

成安造形大学紀要  
第6号

Journal of  
Seian University of  
Art and Design  
No.6

ISSN 1884-7919

# 成安造形大学紀要 第6号

---

## 目 次

### 研究論文

- Sleeves of Desire (A Cover Story) に出会った。…………… 藤 田 隆 001
- 美的紐帯を創出する映像ワークショップ  
—“remoscope”の可能性— …………… 要 真理子 015
- 第9回から第15回京都写真展参加報告 …………… 金 澤 徹 029
- BUILDING AN EFL COURSE AROUND A FEATURE-LENGTH FILM:  
EXERCISES TO ACCOMPANY *DIE HARD* AND ITS SCREENPLAY  
…………… 三宅キャロリン 045
- 「Hiroyuki NAGAO works 1985-1989 展」報告  
…………… 長 尾 浩 幸 079
- セゾン現代美術館「堤清二／辻井喬 オマージュ展」に参加して  
…………… 岡 田 修 二 087
- プロジェクト演習授業事例報告 …………… 大 草 真 弓 095  
石 川 亮
- 映像作品「水流Ⅳ」の制作報告／映像作品「水流Ⅴ」の制作報告  
…………… 櫻 井 宏 哉 103
- 紙コップ積み上げアート・ワークショップ …………… 島 先 京 一 117
- かそけきものへのアプローチをとおして見えてきたもの…………… 田 辺 由 子 143
- 研究ノート  
第一次世界大戦における仏領ニューカレドニアの日本人義勇兵  
…………… 津 田 睦 美 151

2011年度大学満足度調査結果分析（3）

～自由記述篇～ ..... 山 川 裕 樹 161

芸術系大学のキャリア支援科目を考える（3）

成安造形大学における新たな導入教育科目「スタディスキル実習」の開発：

キャリア支援教育との連携を視野に ..... 千 速 敏 男 177

**平成26年度特別研究助成 状況報告**

津田 睦美 ..... 196

山川 裕樹 ..... 198

Sleeves of Desire (A Cover Story) に出会った。

藤田 隆

Takashi FUJITA



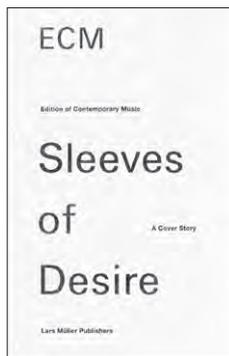
## Sleeves of Desire (A Cover Story) に出会った。

---

藤田 隆  
Takashi FUJITA

教授 (メディアデザイン領域)

### 究極のレコードジャケット



(1)

Sleeves of Desire (A Cover Story) と題された一冊のカタログは、ドイツの Lars Muller Publishers から1996年に出版されたもので ECM レーベル創立25周年を記念してレコードジャケットを集めたカタログで350ページを超え500枚以上が掲載されている。

### ECM レコードの成り立ち

ECM レコードはマンフレッド・アイヒャー Manfred Eicher というミュージシャン上がりの25歳の青年が1969年に発足させたレーベルで、ECM は Edition of Contemporary Music (同時代の音楽のための出版元) という、時代に主張のある音楽を幅広く出していくという志に基づいて設定されており、商業主義にコントロールされない音楽を記録したものだ。

ロックから現代音楽まで、ジャンルにこだわらずプロデュースしていく姿勢は45年以上前から基本的に変わっていない。ECM レコードの初期のジャケットデザインに興味をそえられるものがあるのでそれを眺めながら紹介してみたい。

LP レコードから CD に変化し、表現の場のサイズは大きく変化してきたが、音楽を閉じ込め記録していくことからレコード (記録) という言葉で統一したい。

レコードジャケットは30cm 平方のポリウムで表現の場として十分なスペースが確保され、音楽の世界を魅力的に表現するメディアとして展開され、デザイン学生は大いに憧れてジャケットデザイナーを夢見たものだ。現在でもグラフィックデザインの課題としてのCD スリーブデザインは学生たちに人気で、熱心に取り組んでいるところを考えると、音楽と視覚化表現の魅力は普遍的であるのだろう。大きさの比較だけでも下のようになり面積は16%になってしまっているし、その上 CD は透明なプラスチックケースに入れられたものが多く、紙質や印刷技法による表現も限定的で魅力的なものになりづらい。



〈2〉  
30cm 平方のLP と12cm のCD の対比（面積比16%）

## ECM 創設者

マンフレッド・アイヒャーは1943年ドイツ南部バイエルン州に生まれ、音楽好きの一家に育ちコントラバスの奏者でベルリンフィルに籍をおくほどの腕前であった。25歳という若さでジャンルの枠を超えた音楽をレコードプロデュースというかたちで出していくことになる。

ECM レーベルは録音の技術レベルにおいてもクリアで骨格のはっきりするレコーディングにこだわりジャズ評論家やオーディオマニアの世界でも話題になり数多くのオーディオ賞も受賞していた。音と音楽に独自の世界感を持っていただけではなくジャケットに見られる視覚的思考にも強いこだわりやスタイルを持っていた。

即興ジャズからスタートするがすぐに北欧のロックミュージシャン（テリエ・リピダール）やサクソ奏者（ヤン・ガルバレク）、アフリカンコンテンポラリーミュージック（ロビン・ケニヤッタ）などのレコーディングを始めて民族音楽や現代音楽の世界などジャンルにこだわらないユニークな世界へ発展していく。私はデザインの勉強を始めた60年代末頃から新しい音楽や文化の枠組みに興味があり、このような音楽に接する機会をもち始めていた。

60年代末当時のジャズレコード音楽の環境を少し振り返ってみると、ジョン・コルトレーン、オーネット・コールマンをはじめ、多くのジャズマンは究極の音楽を求めて演奏に邁進して大衆の好みから少しずつ始めていたのかもしれない。また当時、はやっていた技巧表現を追求したプログレッシブロック〈3〉や、ビートルズ〈4〉を始めとするポピュラー音楽もその音楽世界に留まらずに、生活文化全般への広がり

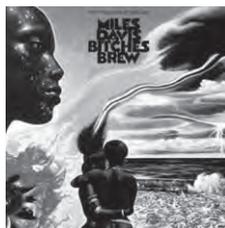
見せる時期であった。多くのロックバンドがファッションや映像や出版など創造的な世界を演出しており、ここに紹介するジャケットアートなど魅力的なものが巷に出てきていた。



〈3〉



〈4〉



〈5〉

ジャズ界の王者で音楽の方向を引っ張って来ていたマイルス・デイビス〈5〉やギル・エバンスもロックミュージックへの接近をして解決の道を探っていたし、ジャズの枠の中で技巧を凝らす表現に限界を見いだして、新しい次元を求めていたようだ。

## ECM の船出

ECM がまず一番目の作品にしたのが、マル・ウォルドロンの Free at Last で「ついに自由だ、全能の神に感謝しよう。」これはキング牧師によるスピーチ「I HAVE A DREAM」の一節からのタイトルで ECM の門出にふさわしいものといえる。

フリージャズのピアニストとはいえないマル・ウォルドロンが、新しいコード進行で即興演奏をものにしたことは、自らの音楽的志向で作品を創ることが難しかったアメリカ黒人の置かれた状況からぬけだして自由に曲を作るチャンスを得たことと、ECM という開かれた表現の場のスタートがぴったりと符合した。

そのジャケットは漆黒の中に割れたガラスが鮮烈に小さく横顔が入った衝撃的な写真 (design : Rufus Vedder) であり ECM の新しい価値を作り出すレーベルの姿勢を表している。



〈6〉

## B&B Wojirsh のデザイン背景

これからが本題で、ビジュアル面で、マンフレッド・アイヒャーのコンセプトを表

現してきたデザイナーの存在に目を向けたい。第三作目から現れるのであるがB&B Wojirsh ブルクハルト&バーバラ・ウォルシュ夫妻の活動によるもので、そのアートワークを見ていくことにする。

彼らのバックボーンを探っていくと、シュトゥットガルト造形大学 (Stuttgart State Academy of Art and Design) で画家を志しており、その思考や技術がデザインの基礎になってジャケットアートに展開している。ウルム造形大学のニューバウハウス美学をふまえた、グリッドシステムに則ったシンプルデザインを多く展開している。またミニマリズム表現で空間や素材感を大事にした緊張感のある平面構成が持ち味だ。

ポール・ブレイの Paul Bley with Gary Peacock 〈7〉では、ランダムに傷がついた硬質な平面をハーフシャドウのモノクロ写真にし、その上下に名前をサンセリフ体 (Helvetica) の大文字組で最下部にECMの社名とSTEREOの表記をスイスタイポグラフィのグリッドシステムに習って配置した控えめであるが新しい時代を表すものであった。



〈7〉

ECMレーベルのデザインとしての特徴を挙げると、奏者の顔写真を基本的には使わない (実際に5%に満たないと思う)、タイトルやクレジットのタイプフェイスには著しい個性を主張しないサンセリフ体の書体を基本とする、そのたびごとにタイトルや曲目を演出するスタイルは追わない、具体的な説明演出は控え、音楽世界に誘う手段としてのジャケットデザインに徹するなどということになるだろう。

## バーバラのデザイン手法の分析

ECMのレーベルがスタートし始めた頃を代表するデザイン Music Improvisation Company 〈8〉は、くしゃくしゃになった紙の折り目にそった形でタイトルとミュージシャンが小さくレイアウトされており、ECMジャケットの初期のスタイル傾向を表している、まさにスイススタイルの空間構成で、LPレコードであれば目の前に大きく広がる画面で楽しめるがCDになるとその楽しみは奪われてしまう。

現在では確固としたグラフィックデザインの世界をもっているECMレーベルだが、しかしB&Bウォルシュのスタイルがすんなりとできたとは思えない節も感じられる。それは6作目にあたるウォルフガング・ダウナーのOUTPUT 〈9〉という作品の



〈8〉

ジャケットデザインなどの存在である。ダウンはアイヒャーの古くからの友人で ECM 以前にも作品をプロデュースしているが ECM の路線とは異なるプログレッシブロックの世界観を持つシュールなジャケットになっており興味が引かれるところである。(Design : F + R Grindler)

私はこのジャケットを学生時代に目にしたが手に入れられずに終わった記憶がある。



〈9〉

チック・コリアの A, R, C, も路線から少し距離を置いた表現になっているが、奏者自身コントロールできかねるようにも思えるフリー路線を意識した表現になったのであろうか。デザインではそれとは対照的に安定した三角形の中に大文字の A, R, C, を配置している。新しいジャズ世界を模索中のチック・コリアの A.R.C 〈10〉の作品として、遥か遠くまで続いている道を描いているオリジナルジャケット 〈11〉も暗示的で興味もてる。



〈10〉



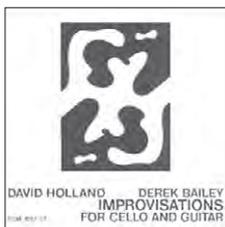
〈11〉

続いてデイブ・ホランドとバール・フィリップの Music from two Baseses 〈12〉のジャケットを見てみよう。線描きのベース奏者のデッサンに珍しくユーロスタイルの

文字で表記がなされており、ヨーロッパに渡ったパール・フィリップに敬意を表したものののだろうか、EURO という書体を使って自由な線のイラストのリズムに文字の太さと高さがそろった配置が抑えを利かせている。同じくデイブ・ホランドとパール・フィリップとの Improvisation for Cello & Guitar 〈13〉ではホランドの書いたモチーフを向かい合わせに組み合わせサイドをカットすることで面白いデザインに仕上げている、ベースとギターのダイアローグ（対話）を具体化している。



〈12〉



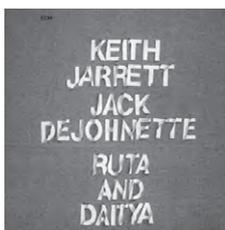
〈13〉

演奏者の顔写真を使わない事を原則にしているようだと言ったがキース・ジャレットは違った。Facing you 〈14〉という、ECM デビューアルバムでは画面いっぱいに硬調のモノクロ写真で黒の部分にタイトルとクレジットを配して平面構成している。

次のアルバム RUTA AND DAITYA 〈15〉では一転タイトルとクレジットを斜体のかかったヘルベチカの太文字を紙で切り、それで立体感のあるジャケットにしている。続いて In The Light 〈16〉では長体のかかった太い文字を砂の上に映す表現手法で世界観を視覚化している。



〈14〉



〈15〉



〈16〉

## バーバラの抽象写真の手法

続いてバーバラの得意とする写真の表現を自分のグラフィック世界に取り込む手法を見ていこう。北欧のサクソ奏者ヤン・ガルバレクの Witchi-Tai-To 〈17〉では雰囲気のある古びた壁に陰がさすことで空間が生まれ、そこに抑えた表現の手書き文字でタイトルとメンバーが書かれて空気感が感じられるジャケットになっている。

その世界観の延長としては Belonging 〈18〉において、日本人写真家、内藤忠行氏の写真を使用、水に浮かべたガラスに色の着いたふうせんが四つ、奏者を表している

のか、寄り添って配置されて、水面には空が映って空間を生じタイトルとメンバー表記は極力はしに配することで広がる世界を作っている。

同じく内藤氏の写真とのコラボレーションとして Vanessa 〈19〉があげられる。ドイツの鍵盤奏者ミハエル・ナウラの作品でファゴットとエレクトリックピアノの組み合わせが新鮮でクールで硬質な音に仕上がっているのだがCD化されていない。昆虫を真っ正面から素材にしているが現実感がなく、気持ち悪さは無く清々しさも覚え、アップにすることで視覚に新鮮さを与えている。



〈17〉



〈18〉



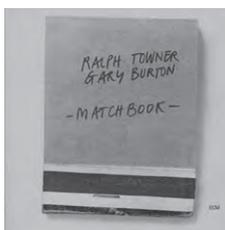
〈19〉

ポール・ブレイの Open to love 〈20〉では二枚のストライプの平面を少し浮かせて撮影してマルチストライプの魅力的な空間を作り最上部に細いサンセリフ体のタイトルでソロピアノの精緻な音を形にしており、LPを手にした時の感激は今でも忘れない。

ラルフ・タウンナーの Matchbook 〈21〉ではブックマッチを30cmのジャケットいっぱいアップにとらえ、大きく配置したデザインはLPレコードでは新鮮で迫力があつたが、CDになってしまうとその面白さはなくなってしまっている。ウォルシュの表現のLP盤の大きさを意識したものだだろう。絶対的な大きさによる視覚効果は外すことができないということだ。



〈20〉



〈21〉

## バーバラのレタリングの手法

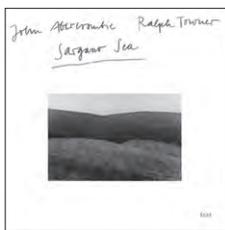
ここからはバーバラの自由奔放な手書きレタリングに注目したい。雰囲気のあるレタリングがいくつも見られて、ECMのジャケット世界の一つの記号になっている。

Sargasso Sea 〈22〉ではラルフ・タウンナーとジョン・アバークロンビーのギター

デュオの世界を表して広い空間の写真と力の抜けたレタリングが独自の世界を作っている。

Nice Guys 〈23〉のレタリングは、アート・アンサンブル・オブ・シカゴ (AACM) の既存の音楽世界に挑戦するような攻撃的レタリングが写真の中に入り込んで、映画のラッシュフィルムのような新しい世界を作っている。

ルイス・スクラビスのシクステットのジャケットデザイン 〈24〉では、それぞれの楽器が歌っているような楽しい文字が折り重なって構成されている。



〈22〉



〈23〉

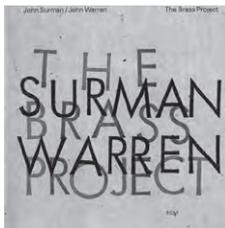


〈24〉

手書きスタイルだけでなく既存のタイプフェイスを使った多くのデザインにも個性が発揮されている。The brass project 〈25〉では、サンセリフ文字を、空間をもって重ねた構成にしており、クレジットは最上部にレイアウトして、ジョン・サーマンの前衛的だが深く心に響くサックスの音空間を演出。パーカッション奏者のピエール・ファールの Window step 〈26〉では文字が風に吹かれて一部が消えてしまうが、そこに ECM の社名が入っており気持ちよく収まって好感が感じられる。

ジョン・アバークロンビーのレコード 〈27〉では文字を切ることでエレキギターのようなねりとトリオの音の揺らぎのように表現されている。

多種多様なジャズ音楽の世界を文字のバランスや加工によって、ミニマムでありながら自在に表現するバーバラの世界はグラフィックデザインとして大いに学ぶものがある。



〈25〉



〈26〉



〈27〉

バーバラの手法として文字の並びを自由奔放に作っている例を見てみよう。

Acoustic Quartet 〈28〉ではジャズメンを名前のスペル音節に分解することで新奇性を出しているし、STAR 〈29〉では T の文字だけを小文字にして見事に新鮮に見

せている。

わずかの種類の材料に限定し、レイアウトの当たり前を疑うことで見事に新しい展開を見せたバーバラのデザインには脱帽する。アルファベットを並べるスペーシングでは、日本人はどうしても借り物意識が強く深く入り込めないが冒険の必要性を痛感する。



〈28〉



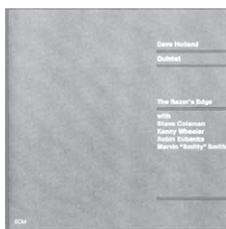
〈29〉

### バーバラの平面分割の手法

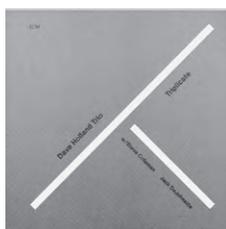
平面分割の作品を見てみるとデイク・ホルランドのRazor's Edge 〈30〉ではかすかに表情のある緑の面に対してオレンジの枠とラインによって空間が作られそこに白のサンセリフ体のタイトルがレイアウトされて緊張感に満ちた空間ができています。スイススタイルのグリッドデザインの真骨頂だ。

Triplicate 〈31〉は同じくデイク・ホルランドの作品であるがこちらは三人の奏者が向き合うかのようにラインで表されており空間に緊張感が走っている。タイトルやジャズメンのクレジットとそれを指示する太いラインで空間を分割して構成している。

ブルーノートにおけるキース・ジャレットのライブ・アルバムのジャケット 〈32〉もグリッドで構成された空間に黒と白とグレーの文字だけで構成されて、さりげないが神経の行き届いたデザインである。



〈30〉



〈31〉



〈32〉

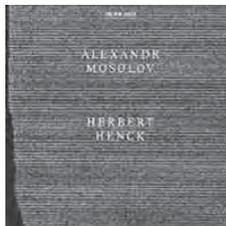
### バーバラの素材表現の手法

ゲイリー・ピーコックのジャケット 〈34〉では古い壁のようなテクスチャーに筆で記した点の連続はコントラバスのピッチ跡であろうか、メンバーの表記だけでスタイ

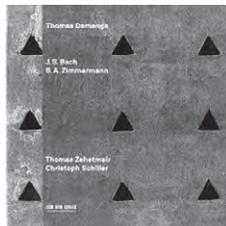
リッシュに仕上げている。ロバート・ヘンク〈35〉のジャケットも同じく壁のようなテクスチャーに、伝統的なセリフ体のフォントを使っているが端の欠けた表情は普通のクラシック音楽のジャケットには無い面白みを出している。トーマス・デメンガのバッハ集〈36〉も壁面の表情と文字の関係で緊張感のある画面ができている。壁面の色の变化を利用して文字の整列を規定して、グリッドシステムに則ったレイアウトとなっており、バッハの整然とした音を感じられる。



〈34〉

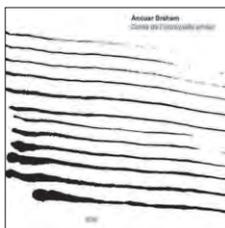


〈35〉

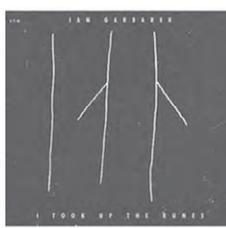


〈36〉

アヌアル・ブラヒムのウードゥのアルバム〈37〉はジプシー音楽色の濃い作品である。しかし、ミニマムなグラフィックで、風や音の流れを表現し現代音楽らしくジプシー色を抑えた作品になっている。ヤン・ガルバレクの I took up the runes 〈38〉では古代ゲルマンのルーン文字を書いているが、バーバラのミニマムイラストの世界になっており北欧の澄んだ冷ややかな空気感まで三本のラインが表現している。なお、表現された線はルーン文字のスペリングで J A N を表しておりバーバラのデザインの神髄を見るようだ。



〈37〉



〈38〉

バーバラのデザイン手法を様々に見て来たが、そのポイントを分析する。

平面の構成においても、素材のもつ表情を大事にする、長い時間が作り出す軌跡や、多様な自然が創る変化に目を向けることに創造の起源を求める。自らが描く画面において、本質に迫る最小の行為で表現し尽くす。フォントの使用に関しては種類を限定し文字の形に表情を求めず、個性をアピールすることのないサンセリフ体を基本形としてグリッドシステムで構成して、スペーシング、カーニングなどで文字間を調整、手書き文字との対比や、文字に素材感や表情をもたせることなどで個性を出す。

バーバラの制作態度は要素を最小限にして、そのなかで新しく表現することにこだ

わることでECMの個性を発揮してきた。現在はコンピューターに様々なフォントが用意され、簡単に新しい表現が手に入る時代になっているが、それがかえって個性をなくし魅力を薄めている。

バーバラが行なってきた方法にならって、自分で表現の枠を作りそれを意識して羽ばたくミニマムデザインはこれからも十分に魅力を発しつづけるだろう。

バーバラ・ウォルシュ氏は1996年辺りまでECMで存分にデザイン制作をして現在はイタリアの北部で隠居生活をしているとのことだが羨ましい人生の過ごし方のように思える。

しかしECMのジャケットデザイン世界においては、バーバラのデザインミーム(文化遺伝子)はちゃんと引き継がれており、今も十分に美しく、個性的なデザインを展開しているが、ファンからすると少し彼女の方法論に捕われすぎているようにも思われる。

やがて50年になろうとするECMの世界がどのような展開を見せるのか、マンフレッド・アイヒャーの志が新しい感性にどのように引き継がれるのか、今後のECMのデザイン展開を期待してやまない。

参考文献：ECMの真実(稲岡邦彌)河出書房新社(2001)

ECM Catalog(稲岡邦彌)東京キララ社(2010)

Sleeves of Desire(Lars Muller)編集 Lars Muller. Pr.(1996)

Windfall Light(Lars Muller)編集 Lars Muller. Pr.(2010)

図版引用：ECM review <http://ecmreviews.com> <3><4><5>以外の図版

アマゾンネットカタログ <http://www.amazon.co.jp/> <3><4><5>



美的紐帯を創出する映像ワークショップ

— “remoscope” の可能性 —

The Image Workshop of Creating an Aesthetic Band:  
“remoscope” and its Possibilities

要 真理子

Mariko KANAME



# 美的紐帯を創出する映像ワークショップ

## —“remoscope”の可能性—

The Image Workshop of Creating an Aesthetic Band: “remoscope” and its Possibilities

要 真理子

Mariko KANAME

非常勤講師（美学）（大阪大学招へい准教授）

The purpose of this paper is to introduce a Japanese workshop that makes use of a form of video footage referred to as “remoscope” and, through the significance of this workshop, to propose the attitude which we should adopt toward the situation surrounding images in the modern world.

### はじめに

本稿で紹介する大阪のNPO法人「記録と表現とメディアのための組織（Record, Expression and Medium-Organization）」（以下remo）は、多様な映像メディアが氾濫する現代社会では、個々人がそれらのメディアそれ自体、ならびにその映像コンテンツに振り回されがちであるとの危機感を抱いている〔註1〕。“remoscope”は、remoが考案した「リュミエール・ルール」に則って撮影された映像を総称する造語である〔註2〕。「リュミエール・ルール」とは、19世紀末にリュミエール兄弟が開発したシネマトグラフにおける撮影手法を、「固定カメラ／無音／無加工／無編集／ズーム無し／最長1分」〔註3〕といった6つのルールへと整理したものである。そこにおいてremoが提案する映像ワークショップは、私たちがこうした映像メディアを主体的に使いこなせるようになるための、いわば基礎訓練として位置づけられているのである。幸いなことに、現代の多様な映像メディアの氾濫と並行して、私たちは様々な映像記録メディアを手軽に操作できるようにもなった。デジタルカメラがたいていの携帯電話に標準装備されるようになって久しいが、やがてそれは動画をも記録できるようになっている。しかも年を追うごとにこうした機材は廉価になっていったため、今日ではほとんどの成人男女が少なくとも一台の映像記録メディアを所持するまでになった。remoが目指すのは、私たち個人がこれらのメディアを、ちょうど以前の記録メディアであった紙と鉛筆と同じくらいに気軽に扱えるようにすることである。とはいえ、それだけならばremoscopeはメディア機器の操作を実践的に教えてくれるだけのワークショップであるに過ぎない。もし、この試みがそれ以上の意義を備えているとすれば、それはどういった点に見出されるのだろうか。

## 1. 問題の所在

remo が表明しているのと同様の意図は、すでに1948年にアレクサンドル・アストリュック (Alexandre Astruc, [born 1923]) が「カメラ万年筆 (La Camera Stylo)」という考え方とともに展開していたものである。それによれば、「映画は目に見えるもの、映像のための映像、物語の直接的で具体的な要求から解放され、ちょうど書き言葉と同じくらい柔軟で繊細な書くための手段となるだろう」〔註4〕。とはいえ、当時の状況をそのまま現代にあてはめることはできない。というのも、アストリュックが念頭に置いていた映像メディアとは映画であり、それは撮影された映像が人々に鑑賞されるまでに多くの人為的なプロセス (現象、編集、複製、上映) を介在させていたからである。結果として映画の映像には多くの労働が投資される。アストリュックは、このようにして仕上げられた作品の質の帰属する主体を、これ以降に盛んになる作家主義を先取りするかたちで、脚本家から演出家 (作家) に置き換えようとしたのである。一方、remo がワークショップで用いている映像メディアとはデジタル・ビデオカメラであり、それは撮影から鑑賞まで、映画においては人が行っていた作業のほとんどを機械が肩代わりしてくれる。機材の初期投資を除けば、映像が出来上がるのに費やされる労力はほとんどない。この違いを際立たせているのが、先述した「リュミエール・ルール」である。こうしたルールによって、映像ワークショップはできるかぎり「ありふれた」映像を生み出そうとする。

映画の場合、1920年代には始まっていたハリウッドのスターシステムや1950年代のフランスに始まる作家主義批評の影響により、映像が帰属する主体として観客に意識されるのは「スター」や「作家」であるのに対して、あまりにも容易に制作できるビデオ映像はそうした「創造力豊かな主体」を意識させない。それゆえ一見すると、remo がリュミエール・ルールというものを設定し、初心者にも映像メディアを操作できるようにするのは、近代的な「作者」を解体するというポストモダニズム的な挑戦であるかのように見える。つまり、映像メディアのコンテンツが一つの「作品」として統一性・一貫性を備えるための根拠として要請されるにすぎない「作者」という理念を、まるでそれが創造的な能力を発揮できる実在の主体のように幻想させていた制度を、解体する挑戦であるかのように。

しかしながら、こうした理解によっては、remo の実践に間違った評価を下すことになってしまう。正しい評価への出発点となるのは、やはりあのリュミエール・ルールと、それが前提としているビデオカメラの可能性である。ビデオカメラをリュミエール・ルールのもとで使用することによって、もともと映像ができあがるのに費やされていた最小限の労力は極限まで切り詰められる。そうして生み出される映像は、ほぼ「自動的に」生成された映像であり、ややもすれば公共機関や店舗などに設置された防犯カメラが絶えず記録している映像となら変わりはない。それゆえ、そうした防犯カメラの機能を参加者に追体験させること自体に特段の意味を見出そうとする

のはやはり外的なものである。それどころか、もしこれら「ありふれた」映像それ自体を「ポストモダン主義的な挑戦」として意味づけてしまうなら、再び「創造力豊かな」主体が、今度はワークショップのコーディネーターにおいて現出してしまうだろう。つまり、個々の映像を持ち寄った参加者には何の創造性も認められない上で、これらの映像がうまくコーディネートされさえすれば一つの「挑戦」としての意義を持ちうることを提示できる主体が、あたかも「ポストモダンの旗手」のようにして再び浮かび上がってくるのである。ここで人は、自らが否定しようとしたものに意図せず取り込まれてしまう、あるいは意図的にその地位を奪い取ろうとしているのである。

個々人が映像機器を主体的に利用することを通じて、現代のメディアとそのコンテンツを管理している権力への対抗手段を提供するというremoの試みは、すでに解体されつくされた観のある「作者」神話にとどめの一撃を加えるというよりは、この新たに浮上してきた「コーディネーター」的なものへの反省として、つまり商業的なビデオ映像の大半を掌握しているテレビ・マスメディアにおいて実現している映像と権力の関係を解体する試みとして理解しなければならない。今日のテレビにおいて主流をなしているバラエティ番組で権力をもっているのは、可視的には複数の映像を采配する司会者であり、実質的には、この番組の制作プロセスを超越的に掌握するプロデューサーであって、彼らはもはや映像それ自体のクオリティにはほとんど関わっていない。こうした素材に対して超越的なアレンジを司る主体が権力をもつようになったことこそ、映画からビデオへという映像メディアの移行が本質的に示していることである。相当の労力とともに制作された映画の映像が具体的なフィルムとして保存されていたのに対して、ビデオ映像の場合は、たとえその記録媒体はさまざまであっても、とりわけデジタル・ビデオカメラによる映像であれば実体を欠いたデータ=情報として記録される。フィルムの所有権よりも番組の放映権が重視されるシステムにおいては、もはや具体的な財としての作品を仕上げることは重視されない。そこではすでにできあがった一定数の情報を統括し、編成し、提示する主体こそが権力を持つのである。こうした状況を考慮するなら、むしろremoの実践において注目すべきなのは、そこで収集された「ありふれた」映像が参加者全員で鑑賞されることであり、映像の制作から鑑賞にまで至る一連のプロセスを通じて、テレビ・メディアにおいて実現している映像と権力の関係に揺さぶりをかけようとしているのである [図版1・2・3]。



図版 1

©remo



図版 2

©remo



図版 3

©remo

## 2. 映画からテレビへの映像メディアの変質：映像の「社会関係的価値」

機械によって自動的に生成されるイメージは、19世紀前半に、まず「写真」として私たちの前に現れた。それまでは、たとえ版画や印刷術であっても手を動かして版を製作しなければならなかったのに対し、写真機は撮影したい対象に一定時間レンズを向けさえすれば対象のイメージを写し取ることができる。このように自動的に生成されるイメージはさらに進歩し、やがて動く「映像」となった。これら大量複製されることを前提に機械的に生成されるイメージについて書かれたヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin, 1892-1940) の有名な論文のなかで「アウラの消失」という問題が提起されたことはよく知られている。それによれば、

ここで失われてゆくものをアウラという概念でとらえ、複製技術のすすんだ時代のなかでほろびてゆくものは作品のもつアウラである、といいかえてもよい。このプロセスこそ、まさしく現代の特徴なのだ (中略)。複製技術は、これまでの一回かぎりの作品のかわりに、同一の作品を大量に出現させるし、こうしてつくられた複製品をそれぞれ特殊な状況のもとにある受け手のほうに近づけることによって、一種のアクチュアリティを生みだしている [註5]。

こうしたアウラ、すなわち作品の「今ここにしかない」という事実が発散する「ありがたい」が消失するのを埋め合わせるかのように、映画産業が創造的な主体を指示する固有名を利用したことは、同じ論文のなかでベンヤミンも指摘しているとおりである [註6]。すなわち、「ハップバーンの映画」や「ヒッチコックの映画」などといった呼び方において「スター」や「作家」が映像のクオリティを司る主体として強調され、消え去りつつある映像のアウラに代わって、その「ありがたい」創造性が「～の」という所有関係を表す助詞を通じて映像の価値を生み出していたのである。この観点から振り返ってみるなら、ベンヤミン自身が言及しているのは映画スターについてだけとはいえ、作家主義もまた、映像の価値を作り手の側に留め置こうとする試みだったと考えられる。

その一方で先の引用でベンヤミンが指摘していた「一種のアクチュアリティ」とは、どのようなものなのだろうか。たとえば1970年代後半になると、映像の感性的なクオリティに応じて、類似した嗜好をもつ者たちによるコミュニティが形成されるようになる。すなわち、1975年公開の《ロッキー・ホラー・ショー》や1982年公開の《ブレード・ランナー》といった、いわゆるカルト映画と呼ばれる作品が指標となり、その愛好者たちが同じ趣味を保有する者として作品の特別上演といった機会を共有した。こうしたコミュニティは、映像をめぐる所有権とは無関係なところで、アクチュアルな社会性を形成していたのである。やがて、こうしたコミュニティの世代を超えた継続性を可能にしたのが、1980年代以降に普及した映画作品を録画したビデオテープと

そのレンタルショップであることはいうまでもなからう。大都会のミニシアターでの深夜上映に限定されていたコミュニティへのイニシエーションは、分散的にはあれ、家庭のビデオデッキによって執り行われるようになった。

こうした変化を通じて、映像の価値を司る主体は「作り手」から「受け手」へ移行したように見える。ここでは、もはや映像の制作にまつわる高い技能（すぐれた演技や演出）を反映したクオリティとはあまり関係なしに、ただ特定数の観客の嗜好と合致するかどうかテストされるのであり、しかもその感性的な合致は（それまで映画産業が狙いを定めていた大衆と比較するなら）極めて小さな集団においてしか自然発生的にしか発生しないため、それを映像の作り手が事前にコントロールするのは不可能であるように見えるのである。だからといって、そこから一足飛びに近代的な「作者」の解体というポストモダニズム的な結論を導き出すべきでないことは、さきに注意していたとおりである。やがてテレビが、このように分散した集団を、各家庭に置かれたテレビ受像機を通して分散的なままにコントロールするようになったからである。視聴者から料金を直接に徴収しないことによって、安易な鑑賞の対象となったテレビ映像は、もちろん映像のクオリティにおいては映画と比べるべくもないものの、番組編成の基本である週一回の繰り返しのなかで、上記のような嗜好のテストを大衆に施す。こうしたテストにおいて映像はただ特別な嗜好を表現する指標としてのみ機能すればよいのだから、テレビ映像のクオリティが映画よりもずっと低いからといって何ら問題にはならない。重要なのは、こうした嗜好テストとしてのテレビ番組はすべて、テレビ局の編成部によってコントロールされていることであって、したがって特定のバラエティ番組に呼応したコミュニティであろうと、特定のドラマ番組に呼応したコミュニティであろうと、テレビ番組を旗印として形成されているかぎり、それらのコミュニティはすべてテレビ局によってコントロール可能なのである。結局のところ、深夜枠で実験的に放送されていた低予算番組が高視聴率のおかげでゴールデンタイムに放送されるようになるとき、テストされていたのは番組のクオリティではなく、移ろいやすい大衆の嗜好のほうである。

だからこそ、remoscope ワークショップの参加者が撮影した映像だけに注目し、それらの意義を——たとえ理論的な裏づけを介してであれ——与えることに満足しているなら、それは視聴者が投稿したホームビデオ映像を編集して一つの番組にまとめあげるテレビの行為から一歩も抜け出していないといえる。必要なのは、こうした映像の価値の変化に引き続き注目しながら、テレビ映像そのものではなくテレビが映像を扱う仕方との比較から導き出される remo の実践の意義を明らかにすることである。そこで、さきにたどったような映像の価値の変化をいまいちど整理してみよう。情報社会学の専門家である遠藤薫氏は、ベンヤミンを参照しながら、文化領域における〈情報〉の価値が、「経済的価値」、「社会関係的価値」、「アウラの価値」に分類できると述べている〔註7〕。それによれば、「経済的価値」とは、その所有が何らかの経済的価値に変換され得るような価値のことを指している。また、「社会関係的価値」とは、

その所有が何らかの社会関係と結びつくような価値である。「天気に関する情報」は、たとえば農業関係者にとっては農産物の生育とそれによって生み出される経済的価値を左右するものである一方で（経済的価値）、すでにその情報を所有している二人の人物にとっても、それが二人の間の会話にいくばくかの話題を提供し、その会話によって互いの社会関係が再認識される点で、何らかの価値を備えている（社会関係的価値）。それゆえ、公共施設に保存されている歴史的文化財についても、その経済的価値の所有関係とは別に、特定の集団のなかに「歴史文化を共有するわれわれ」という意識が醸成されるならば、社会関係的価値が認められることになる。最後に「アウラの価値」とは、その遭遇もしくは体験が、自己の存在論的問いを導くと同時に、それに何らかの価値をあたえ、自己アイデンティティ（世界内存在としての自己確信）を根拠づけるのだとされる〔註8〕。

ここまでの映像に関する私たちの考察にこの区別をあてがうなら、複製を前提に生産され、映画館での興行を通じて利潤を上げるものとしての映像に備わっているのが直接的には経済的価値である一方で、その経済的価値の一端はそれが「スター」や「作者」による唯一無二の表現であり、それを通して観客が感動を得るというアウラの価値によって裏打ちされている。映像の経済的価値とアウラの価値は表裏一体となっていて、映画産業は、そして図らずも作家主義の映画批評もまた、たくみに両者をコントロールしてきたのだといえる。しかし今日のテレビは、この二つの価値に加えて社会関係的価値をもコントロールするのであり、もしremo自身が主張するワークショップの意義、すなわち多様な映像メディアが氾濫する現代社会において個々人がそれらを主体的に使いこなせるようになるため基礎訓練となることを目指すのであれば、この社会関係的価値のコントロールにこそ焦点が当てられなければならない。だからこそ、私たちはリュミエール・ルールによって「ありふれた」映像が撮影されるということだけではなく、さらにそのようにして撮影された「ありふれた」映像が参加者全員によって鑑賞される場が設けられる点にも注目するのである。なぜなら、まさにこの鑑賞の場においてこそ、映像の社会関係的価値が顕現するからである。それゆえ、このようにワークショップ参加者が「ありふれた」映像を全員で鑑賞しているとき、そこで何が起きているのかをもう少し詳細に考察してみよう。

### 3. 嗜好テストのシミュレーションとしてのワークショップ

ワークショップとはもともと工房を指す英単語であり、絵画作品から農具まで、今日の私たちからすれば種類の幅広さにとまどいを覚えるとはいえ、いずれにせよ実利的な物品が制作される現実の場所のことを意味していた。もちろん、ここでの主題であるremoscopeワークショップといった実践についていわれる「ワークショップ」は、別の意味を持っている。それは、かつての工房で師匠と弟子のあいだで行われていたように、具体的な実践を通じて経験知を獲得する場のことではあるのだが、その

実践自体は実利的な物品の制作からは切り離されている。そのかぎりでは、現代のワークショップとはシミュレーションであり、現実で起こっている特殊な事象を単純化および凝縮して、本来ならばその特殊な事象においてしか獲得できない経験知を一般にも獲得できるようにする場のことなのである。だとすれば、remoscope もまた、映像にまつわるシミュレーションだといえるのだが、それは映像制作をシミュレートしているのではなく、前節で確認したように、テレビ・メディアが映像を介したコミュニティ形成のコントロールをシミュレートしているのである。

この一連のシミュレーションにおいて、現代の映像メディア技術の進歩によって誰でも容易に機材を操作できるようになったことは重要な役割を演じている。ワークショップにおいて鑑賞される映像は、参加者自身が撮影して持ち寄ったものであり、だからこそこのワークショップはたんなる映像鑑賞会とも区別されるのである。リュミエール・ルールの意義もここにあると考えてよい。つまり、映像はあくまでも偶然に撮影されたかのようにして集められなければならないのであり、もし個々の撮影者の意図的な選択や創意工夫が映像に反映してしまえば、ワークショップの力点はふたたび映像制作へと戻されてしまい、鑑賞会では社会関係の価値よりもアウラの価値と経済的価値が強調されてしまうだろう。そしてワークショップ参加者は、アウラの価値と経済的価値が高い映像を制作する技術を獲得して現実社会へ戻っていくだろうが、その技術を使って制作された映像は、動画を投稿するネット上のサイトや、視聴者から寄せられた映像を寄せ集めたテレビ番組によって回収されるばかりで、この回収のシステムとそれが実現しているコントロールの実態が意識されることはないだろう。

しかし、ネガティブな理由付けだけではなく、ポジティブな根拠を示さなければならないだろう。つまり、remo のやり方でなければ現代社会において特徴的なテレビ的なメディアの働きを意識できないというだけでなく、なぜremo のやり方こそが、テレビがコントロールしている映像の社会関係の価値を介したコミュニティ形成をシミュレートできるのかを示さなければならない。そのために私たちが参照したいのは、イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の『判断力批判』において示された趣味判断の理論である。

趣味判断の特殊性(美の無関心性)を解説するためにカントが引き合いに出すエピソードは、remo のワークショップと比較して興味深い類比を示してくれる。

もし誰かが私に向って、私の目前にある宮殿を美しいと思うかどうかと訊ねるとする。これに対して私は、——自分はこういうたぐいのものを好まない、かかる物は徒に観る人の眼を見はらせるためだけに造られたものである、と応えるかもしれない(中略)。しかし、ここではそのようなことを問題にしているのではない。つまり我々が知りたいのはこういうことなのである、——たとえ私がこのように場合に、私のうちにある表象に対応するところの實在についてまったく無関心であるとしても、この対象の単なる表象が適意を伴うのかどうかということである[註9]。

カントによれば、私たちが対象を美しいかどうか判断する際には、その対象が社会にとって、あるいは私にとってさえ役に立つかどうかといったことは関係なく、それどころかその対象が何であるかということすら問題にはならないとされる。むしろ、その対象が何であるかが分かっしまえば、そこに予断が混ざりこんでしまい、純粹な趣味判断は成立しなくなるだろう。ダイヤモンドを美しいと認めるとき、それが実は木炭と同じ炭素でできているという知識は関係なく、またダイヤモンドのほうは市場価値が高いからといって、雪の結晶を拡大したときに現れる美しさがダイヤモンドに劣るということにもならない。純粹な趣味判断において、二つは同じくらいの美しさとともに見られるのである。そこから、リュミエール・ルールの積極的な意義が明らかになる。このルールが課す制約は、撮影者の創意工夫を制限することによって remoscope ワークショップがたんなる映像制作のワークショップに墮するのを防いでいるだけでなく、そこで鑑賞される映像において何らかの対象が強調されるのを防ぐことによって、映像そのものが趣味判断の対象となるよう促しているのである。

映像の撮影に関わるワークショップの前半部に次いで、その後半部、すなわち上記のようにして撮影された映像を鑑賞する、つまり趣味判断の対象にすることが、どうして嗜好を同じくする者同士のコミュニティ形成をシミュレートできるのか、その積極的な理由を考えてみよう。カントは、上記のように個別の関心から自由の下される趣味判断が、やはり個別の事情に左右されない普遍的な妥当性を要求できると考えた。すなわち、

それだからこそ趣味判断は、或る種の主観的原理——換言すれば、何が我々に快いか或は快くないかを感情によってのみ、従ってまた概念によってではないがしかしそれにも拘らず普遍妥当的に規定するような原理をもたねばならない。するとかかる原理は、共通感と見なされ得るようなものでしかないだろう。しかしこの共通感、我々は時に共通心とも呼ぶところの普通の悟性、即ち常識とは本質的に異なるものである。常識は、感情によって判断するのではなくて、概して不分明に表象された原理にもせよとにかく概念に従って判断するものだからである  
〔註10〕。

ある対象が美しいと感じられるのは、それが私にとって価値があるからではないし、ましてや私以外の誰かの気に入るだろうとか、あるいはいずれ何かの役に立つだろうと推測できるからでもない。だからこそ、私が美しいと感じる対象は、私自身の個別の事情を超えて、あらゆる人にとっても同じように美しいと感じられるはずだと主張できるのである。

趣味判断の原理として見出された「共通感」が普遍妥当性を要求するということが、個別の利害関係を超えた感性的なコミュニティの成立する基盤である。共通感とは「共同体の感覚 (gemeinschaftlicher Sinn)」であるとさえ理解できる〔註11〕。なぜな

ら趣味判断を通じて、私は「みんな」と同じ何かに属するという実感を持つからである。「それどころか私は、趣味を次のように定義してもよいとさえ思うのである。すなわち——趣味とは、与えられた表象に関する我々の感情にすべての人が概念を介することなく普遍的に与り得るところのものを判定する能力のことである、と」〔註12〕。概念を媒介しない以上、この「みんなと同じ」という意識は、理解や納得ではなく、あくまでも実感にすぎないのだが、だからこそこの意識はいつそう強力に、いわば「いわくいいがたい」仕方で働くのであり、それを個別の概念を通じて反省することは困難である。海外ドラマのファンに対して、どうして彼らがファンであるのかを理解させるには、そのドラマの脚本や演出のクオリティを考慮させるだけではむだであり、そこに働いている「みんな」という意識までが自覚されなければならない。こうした自覚をもたらすことこそが remoscope の意義であり、それはテレビを純粹状態でシミュレートすることによって、「みんな」意識が生み出されるかどうかの瞬間を意識にもたらすのである。

## おわりに

しばしば日本のテレビコマーシャルについていわれているように、テレビは「すぐれた商品」を提示するのではなく、「すぐれた商品に感心する人」を提示する。同じように、クイズ番組はクイズだけを提示するのではなくクイズに回答する人をも見せるのであり、グルメ番組といった情報番組に必要なのは、その分野の専門家ではなく素人のコメンテーターなのである。こうした演出上の手立てや、特定の番組に対する人気を紹介するような「メタ番組」ともいえる工夫を通じて、視聴者は共感をコントロールされる。しかし、それらの個別の共感を問題視するのではなく、その共感の根源にある原理をカントは明らかにしているのであり、そしてこの原理に基づいたシミュレーションを通じて、remoscope は参加者に「みんな」という意識への自覚的な構えをもたらそうとしているのである。

- [註1] 大阪市を拠点とするNPO法人remoは、「メディアを通じて『知る』『表現する』『話し合う』、3つの視点で活動する非営利組織」であり、映像メディアに関するいくつかの活動(①個人によって記録された8mmフィルムやビデオなどを収集・公開・保存・利用するまでの一連の仕組みづくりを推進するArchive for Human Activities、②情報発信および活用の仕方に関する意見交換の場としてのAlternative Media Gathering、③建築パーツなど「インテリアとしての映像」の可能性を追求するプロジェクトvideo loungeなど)を展開している。remoの活動内容の詳細は以下のURLを参照のこと。<http://www.remo.or.jp/ja/2008/0101-6.html> (2015年1月12日確認)
- 2] <http://www.remo.or.jp/ja/project/remoscope/> (2015年1月12日確認)
- 3] <http://www.remo.or.jp/ja/project/remoscope/> (2015年1月12日確認)
- 4] Alexandre Astruc, *Naissance d'une nouvelle avant-garde, L'Écran français/Comités du Cinéma du Front National de Lutte pour la Libération*, 1948, p.325.
- 5] ヴァルター・ベンヤミン「複製技術の時代における芸術作品」『複製技術時代の芸術』高木久雄・高原宏平訳、晶文社、1999年、15頁(Walter Benjamin, "Das Kunstwerk im Zeitalter Seiner Technischen Reproduzierbarkeit", 1935/36) .
- 6] ベンヤミン、前掲書、31頁参照——「そこで映画界は、アウラの消滅に対抗するために、スタジオのそとで人為的に〈パーソナリティ〉をつくりあげ、映画資本を動員してスター崇拜をおすすめる」。
- 7] 速藤薫、『メタ複製技術時代の文化と政治』、勁草書房、2009年、60～73頁
- 8] 速藤、前掲書、73頁
- 9] イマヌエル・カント『判断力批判』(上) 篠田英雄訳、岩波文庫、1992年、72頁(Immanuel Kant, *Kritik der Urteilskraft*, 1790, §26) .
- 10] カント、前掲書、132頁(Kant, *ibid.*, §20.64) .
- 11] カント、前掲書、341頁(Kant, *ibid.*, §60.262) .
- 12] カント、前掲書、235頁(Kant, *ibid.*, §40.160) .



第9回から第15回京都写真展参加報告

Report on Participation in the 9<sup>th</sup> through 15<sup>th</sup>  
Annual Kyoto Photography Exhibitions

金澤 徹

Toru KANAZAWA



## 第9回から第15回京都写真展参加報告

Report on Participation in the 9<sup>th</sup> through 15<sup>th</sup> Annual Kyoto Photography Exhibitions

金澤 徹  
Toru KANAZAWA

教授 (写真)

This is a paper on the photography works of the author that were presented in the 9<sup>th</sup> through 15<sup>th</sup> annual Kyoto Photography Exhibitions. In the paper he includes statements, comments, etc. which he presented at each show along with his works of photography. He also explains the way he thinks about his landscape photography.

### 1. はじめに

2014年12月16日から25日まで開催された第15回京都写真展『記憶論Ⅱ 忘れない写真』(ギャラリーマロニエ、京都) に出品した。京都写真展は『How are you, PHOTOGRAPHY? 展』などの開催を継続していることで、2007年に日本写真協会の「文化振興賞」を受賞した、京都写真クラブが主催している。この展覧会には2008年の第9回京都写真展『風景に-3』から毎年出品している。

### 2. 京都写真展で展示してきたこと

これまで「鉄のシリーズ」として取材を続けており、ニューヨーク WTC エリア付近のイメージを積み重ねていることや、オハイオ川流域などの撮影をしていることは、その一環と考えている。また、2011年3月11日に起こった東日本大震災の被災地の一部は、2012年より機会を見つけて撮影をしている。そして、それぞれの取材イメージから、京都写真展では展示に関する実験も含めて作品を出展している。以下、それぞれの展示時の文章、キャプションなどと共に発表したものを振り返る。

※発表作品は1点を除きすべてモノクロームイメージ・会場はすべてギャラリーマロニエ (京都)

## 2.1 第9回京都写真展『風景に－Ⅲ』

会期：2008年12月16日(火)～12月25日(木)

以下は展示時の掲示文章と作品である。

2003年アメリカのオハイオ州ライオグランデ大学のミュージアムギャラリーで個展「鉄のシリーズⅤ」を開催した。それ以前に制作した作品を携えて展示をしたが、その他に近くを流れるオハイオ川流域で気に留まった所を作品群に加えた。「ウエストヴァージニア州メイソン郡、2003年」は、その時のものを今回用にプリントしたものである。

この建物と場所が気になっていたの、2007年に地図の記録と記憶をもとに捜したが、見つけることができなかった。その後どうしても知りたくなり調べると、近くにTNTエリアという軍需用爆薬などを生産し、現在は土地自体が汚染のため、自然保護区として放置されている場所があることを知った。そして2つの場所に関係があるのではないかと思い取材をした。どちらも隣り合わせてはいるがつながりはなかった。建物は精神に障害を持つ黒人の男の子たちが収容されていた元病院で、建物自体の保存のため、地元住民が現地権者である大規模発電会社と交渉を続けていたことがわかった。しかし、ある日住民たちに知らされる事なく、アスベストに対する懸念から、その会社によって建物が解体された事実もわかった。元病院は人種差別の名残とも言えるが、このように人の目から消え、さらには記憶からも薄らいで語り継がれなくなってゆくのだろう。

私の作品の中には、マンハッタン西対岸のニュージャージー側の工事現場から撮影した、崩壊15日前のニューヨークのWTC ツインタワーがある。目的のWTCに向かうフェリー乗り場に行くことができず、別な乗り場に迷い着いた際に出会った風景だ。ツインタワーは崩壊という衝撃的な事件があったため、多くの人が記憶に留めているのではないだろうか？展示している作品はブルックリンブリッジから撮影した。この橋はマンハッタンの南東から同じニューヨーク市のブルックリンにかかっている。ずいぶん昔にこの橋のブルックリン側のたもとからマンハッタンを見たことがあるが、残念ながらツインタワーの存在よりもスカイラインの夜景しか記憶にない。そして、撮影場所からのタワーのある風景の記憶も私にはない。この橋にはWTC ツインタワーの存在を示す銘板がある。違う方向から撮影したとはいえ、自身の作品や今まで見た多くのイメージから、実際にこの場所から見たことがないにも関わらず、銘板から2つのタワーがそこにあるかのようにイメージできるのは私だけだろうか？



New York, NY, USA 2008



Lakin, WV, USA 2003



Lakin, WV, USA 2008

展示作品のイメージサイズ New York, NY, USA 2008 : 452mm (縦) × 451mm (横) ・ Lakin, WV, USA 2003及び2008 : 252mm (縦) × 246mm (横) /すべてゼラチンシルバープリント

## 2.2 第10回京都写真展『風景』

会期：2009年12月15日(火)～12月23日(水)

以下は展示時のコメントと作品である。

私の作品「鉄のシリーズ」で、アメリカ中西部オハイオ川流域の取材をしてきた。この川はペンシルバニア州ピッツバーグから始まり、ミシシッピ川と合流するイリノイ州カイロまでの全長1,579Km。前述のピッツバーグやシンシナティ（オハイオ州）、ルイヴィル（ケンタッキー州）などが流域の大都市である。そこで出会ったメトロポリスという田舎町は、河川交通が主要ではない今、大都市を除く他の町と同様、人影もまばらで過去の栄光にすぎているように見えた。



Metropolis IL, USA 2005

展示作品のイメージサイズ：1000mm（縦）×1000mm（横）／ゼラチンシルバープリント

## 2.3 第10+1回京都写真展『時間論 I』

会期：2010年12月21日(火)～12月26日(日)

以下は概要と作品である。

オハイオ川流域の街「Gallipolis」と「New Richmond」のこれまでの洪水の高さを表すポールのあるオハイオ川を撮影した作品。



New Richmond, OH, USA 2004



Gallipolis, OH, USA 2008

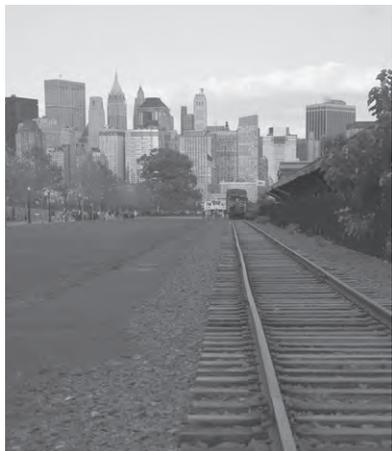
展示作品のイメージサイズ：2点とも412.5mm（縦）×412.5mm（横）／パライタ調紙にインクジェットプリント（顔料）

## 2.4 第12回京都写真展『時間論Ⅱ—写真は忘れない』

作品タイトル：ニューヨーク遺跡 会期：2011年12月20日(火)～12月25日(日)

以下は展示時のコメントと作品である。

その昔、アメリカ合衆国に東海岸から入国する移民たちの多くは、ニューヨーク港湾にあるエリス島で入国審査を受けてきた。幾日かかかる審査の後、西へ向かう人たちの多くは、島から西に位置するニュージャージーの波止場へ向かい、そこから鉄道を利用した。その当時の施設は、今はその役割を終え、それぞれ公園の一部となっている。



A



B



C



D

A～C. ニュージャージー州 リバティ州立公園 2010年

(A) 382mm (縦) × 279mm (横) (B) 297mm (縦) × 397.5mm (横)

(C) 296mm (縦) × 279mm (横)

D. NY州・NJ州 エリス島 元移民管理局ビル 2003年 291mm (縦) × 279mm (横)

すべてバライタ調紙にインクジェットプリント (顔料)

## 2.5 第13回京都写真展『時間論Ⅲ—写真は何度でも忘れない』

作品タイトル：キズアトのキオク 会期：2012年12月18日(火)～12月23日(日)

以下は展示時のコメントと作品である。

米国東部・南部と中西部を隔てるオハイオ川の撮影を続けている。2010年の本展では、その水位や氾濫を示す水位計やモニユメントの作品を展示した。日常は穏やかな川であるが、何度も大きな氾濫を起こしている。流域の町では過去の氾濫の記録が目に見える形にされ、人々の記憶に組み込まれていく。今年5月に訪れた石巻にはこのような標識があった。時に襲いかかる自然の猛威の形に違いはあるが、“記録”＝“正確に刻み込まれるべき記憶”を後世へ残し続けることが大切だと感じている。



米国オハイオ州 マリエッタ ラファイエットホテル、2011年8月  
The Lafayette Hotel, Marietta, OH USA  
August 2011  
546 mm (縦) × 396mm (横)

オハイオ州形の銘板が洪水の水位を表している  
Each state of Ohio shaped plaque on the wall is flood mark.



米国オハイオ州 マリエッタ オハイオ川博物館、  
2011年8月  
Ohio River Museum, Marietta, OH USA  
August 2011  
420mm (縦) × 477.5mm (横)



宮城県石巻市八幡町、2012年5月  
Hachiman-cho, Ishinomaki, Miyagi, Japan  
May 2012  
413mm (縦) × 522.5mm (横) (カラー作品)

すべてバライタ調紙にインクジェットプリント (顔料)

## 2.6 第14回京都写真展『記憶論Ⅰ－忘れない繰り返し』

会期：2013年12月17日(火)～12月22日(日)

以下は展示時の掲示文章と作品である。

米国東部・南部と中西部を隔てるオハイオ川の撮影を続けている。この川はアレゲニー川とモノンガヒラ川が合流するペンシルバニア州ピッツバーグからミシシッピ川と合流するイリノイ州カイロまで流れる1579キロメートルにおよぶ。流域にはピッツバーグ、シンシナティ（オハイオ州）、ルイビル（ケンタッキー州）、エバンズビル（インディアナ州）などの賑やかな都市もあるが、河川交通が盛んだった頃の面影は残しているものの、寂れてしまっている町も多い。

○オハイオ川の終点カイロは、昔は栄えていたが、本当に寂れてしまっていることを実感した町だ。※2011年の予測世帯収入の中央値がカイロ\$15,697（2000年は\$21,607）、イリノイ州全体が\$53,234。イリノイ州の中で最も貧しい町の一つに数えられている。

※ <http://www.city-data.com/city/Cairo-Illinois.html> より引用

○メトロポリスはその名前から「スーパーマンの故郷」として町をアピールしている（2009年の本展にて2005年撮影のスーパーマンのイメージを展示）。スーパーマンが守っているこの町には、カジノがあり大きな収入源になっている。

○1967年12月15日ガリポリス（オハイオ州）とポイントプレゼントに架かる「シルバーブリッジ」がラッシュアワーの混雑時に落ち、46名が死亡した。ポイントプレゼント周辺では1966年11月15日から1967年12月15日までの間に「Mothman」（直訳すれば蛾男）が目撃され、不可解な事件が起きていたという。映画「プロフェシー」（オリジナルタイトルはThe Mothman Prophecies）リチャード・ギア主演2002年などの題材にもなった。



米国イリノイ州 カイロ、2011年8月  
Cairo, IL USA August 2011



米国イリノイ州 メトロポリス、2011年8月  
Metropolis, IL USA August 2011



米国ウエストヴァージニア州 ポイントプレゼント、2008年8月  
Point Pleasant, WV USA August 2008

すべて413mm（縦）×413mm（横） バライタ調紙にインクジェットプリント（顔料）

## 2.7 第15回京都写真展『記憶論Ⅱ 忘れない写真』

作品タイトル：キズアトのキロク 会期：2014年12月16日(火)～12月25日(木)

以下は展示時の掲示文章と作品である。

写真撮影を続けてきて、取材作品や取材地についての記録のしかたに変化が生じてきている。また、私自身が作品化しているものに関しても、新しく出現してきているメディアと結びつけることによって、違った角度からも見えるようになってきた。

過去の京都写真展でも展示をしてきた、アメリカのオハイオ川やニューヨーク WTC エリアを眺める作品の取材を始めた当初は、印刷物の地図を頼りに様々な場所を訪ねたり、道に迷ったり、通りかかって撮影をしたりしてきた。地図を見て大きく取材範囲を俯瞰する。そして、行動の軌跡やデータを地図上にも記していた。また大雑把な撮影場所や日付けのデータは、フィルムロールにもメモをして、それを現像後のネガ入れにも転載してきた。しかし、カーナビゲーションや iPhone、デジタルカメラと GPS などの出現とインターネット上のコンテンツの増加で、私のそのような取材時の記録方法が変わりつつある。

かつてアメリカを車で行動するときは、決まってその年の最新地図を購入していたが、ここ数年は地図を購入せずに GPS (カーナビゲーション) を頼りに動いている。道に迷わずに、目的地に効率よく到達するという点に関しては、とても便利な道具である一方、移動中に不安に陥ることもある。それは自分の行動範囲の中程度から全体図が見られないことと、正確な地図が頭に入っていない場合に、俯瞰した行動が不明確になることだ。

近年は便利な機材や Google マップなどの進化によって、地図上のある部分に関しては、これまでとは違ったモノの見かたができるようになってきているのではないだろうか。以前は、私が取材し、作品化した場所の特定は、記録した地図に頼っていた。現在は前述の便利な道具を利用して、その他の情報と共に記録することができる。また、すべてを網羅している訳ではないが、Google マップなどを利用すれば、ある地点の写真や、ストリートビューがあり、様々な場所のイメージを見ることができる。例えば、私が展示している作品にしても、現時点の Google ストリートビューでは、新しいデータがアップされた後でも、古いデータも閲覧できるようにしており、場所によっては撮影時以前や、それ以降の様子をコンピューター上で確認できるようにもなっている。

今展示の2011年3月11日の大震災による「キズアト」の場所それぞれは、復興にかかる時間差はあったとしても、近い将来には何事もなかったかのように、見られなくなっていくだろう。しかし、私の作品のイメージをきっかけに、ストリートビューなどの情報と関連づけた時、それぞれの風景イメージの場所は、その土地の過去の状況が新しいものと置き換えられて見えなくなっていくのではなく、蓄積されていくイ

メージによってさらに積み重ねられて、変化と共に記憶の中に残っていく可能性を持っているのではないだろうか。



宮城県亶理郡亶理町 2012年5月  
Watari-cho, Watari-gun, Miyagi May 2012  
38° 0'35" N 140° 54'22" E  
900mm (縦) × 900mm (横)



岩手県宮古市山田町 2014年5月  
Yamada-cho, Miyako-shi, Iwate  
May 2014  
39° 29'02.0"N 141° 59'28.0"E  
457mm (縦) × 457mm (横)



宮城県東松島市野蒜 2012年5月  
Nobiru, Higashimatsushima-shi,  
Miyagi May 2012  
38° 21'54.0"N 141° 09'31.9"E  
457mm (縦) × 457mm (横)

すべてバライタ調紙にインクジェットプリント (顔料)

### 2.7.1 2014年の展示に関する補足

2014年の展示では、試みとして、Google Map やその中からリンクできるストリートビューにたどり着くことができるように、QR コードを設定した。デバイスが対応していれば、携帯端末から私が撮影をした場所を、まさに展示を通して確認することができるようにした。そのため、これまで私の取材地とその作品は、鑑賞者にとって出会った時点で、ある意味完結をしていたのであるが、ストリートビューなどで同じ場所にたどり着くことによって、鑑賞者と撮影場所との間に新たな関係性ができるのではないかと考えた。

今回の発表作品は広大な場所で受けた震災の傷跡の本当に一部分に過ぎない。しかし、私の作品に興味をもった人たちが、これらの場所を忘れないでいるきっかけを掴み、Google Map 上だけでも、訪れる機会をもってくれたら良いと思っている。更新されるインターネット上にアップされているイメージ群と私の作品が、復興の進捗状況に目を向けさせ、被災地から離れて住む私を含めた鑑賞者が留意し続けることにつながれば良いと思う。本誌にも2014年発表の作品にはGPS座標を記しているので、ぜひ、復興の様子に関心をもち続けて欲しい。

## 3. おわりに

以上のように作品を展示してきた。これらのイメージは撮影時期・場所は違っているが、人と土地との関わりを考える作品だと考えている。そして、イメージ群は、それぞれの地で持つ時間の流れの中で変化する状況や、未来へ受け継ぐべきもの、また、現時点でそれらの場所が持つ課題を読み取るきっかけとなると考える。つまり、撮影したイメージはすぐさま過去のものになっていく。しかし、その過去や、それ以前、そして、これからを注目して観察することによって、忘れられていく変化に対して注目するための導火線の役割をしていく。

BUILDING AN EFL COURSE AROUND A  
FEATURE-LENGTH FILM: EXERCISES TO  
ACCOMPANY *DIE HARD* AND ITS SCREENPLAY

三宅キャロリン

Carolyn MIYAKE



# BUILDING AN EFL COURSE AROUND A FEATURE-LENGTH FILM: EXERCISES TO ACCOMPANY *DIE HARD* AND ITS SCREENPLAY

三宅キャロリン

Carolyn MIYAKE

教授 (英語教育・日本学)

Here I will present the course materials I have designed for EFL students to accompany the movie *Die Hard* and the Screenplay Publishing Company's book by the same title.

EFL 授業のために開発した教材の内、ここでは映画 *Die Hard* と Screenplay Publishing Company から出版されている同名の英語スクリプトに併用する教材を公開する。

## 1. Introduction.

Movies are an excellent source of authentic text and have long been recognized as an important tool in the language learning process (Nunan 1989, Tomlinson 1998, Sherman 2003). They offer a wide range of material for the development of language exercises while adding an interesting dimension to an EFL class. In this paper I will present worksheets that I have written to accompany the movie *Die Hard* and Screenplay Publishing Company's screenplay book (hereafter referred to as SP), *Die Hard* (1993). These worksheets are the core of a course I designed for EFL students at a university of art and design in Japan. They are preceded here by a brief explanation of how the course is set up and what materials are used. More detailed information about my method of using a film and its screenplay in a language class, including an analysis of some of the types of activities presented here, can be found in the two-part paper titled "Movies in English-Language Teaching: Building an EFL Course around a Feature-Length Film" (Miyake 1999, 2002). Readers can find other activities that I have designed for use with films in my "Video-Based Language Learning" series (Miyake 2012, Miyake 2013, and Miyake 2014).

## 2. From “Movies in English-Language Teaching: Building an EFL Course around a Feature-Length Film Part I”.

The following is a revised and abridged expert from “Movies in English-Language Teaching: Building an EFL Course around a Feature-Length Film Part I” (Miyake 1999), which outlines my general design for a class built around a film and its screenplay.

### Materials

#### *The movie*

The movie, of course, is the most crucial element to the class. On the topic of selecting a textbook for an EFL class Marc Helgesen wisely advises to “choose it carefully. Nothing can make a year more miserable than having a book that doesn’t work well for you and your students” (Helgesen 1993:47). This holds equally true to the choice of the film to be used in the course...It is important to choose a film that will hold the students’ interest and one whose content will not be offensive to the target group.

The other more vital element to look at in selecting the movie for a class is, of course, language content. Here I look for vocabulary, phrases, dialogues, and language usage which represent modern spoken English and which can be used to develop a wide array of language-learning activities. One disadvantage to using movies with SPs is that one’s choice is limited to only those movies for which SPs have been published, but even so there is quite a wide variety of movies which meet the criteria above to choose from and new SPs are being published regularly.

Regarding the legality of showing these videos in the classroom, a very informative article by Casanave and Simons (Casanave and Simons 1995) helps to clarify this point. They cite Article 38 of the Japanese Copyright Law, which states “a work already made public may be publicly presented, performed, recited or presented cinematographically for non-profit making purposes and without charging any fees to the audience or spectators” (p.82). This can be interpreted to mean that the showing of pre-recorded videotapes to college students in a university classroom setting does not

represent an infraction of the law.

### *Screenplay*

The SP is a book of the complete script of the movie written in both English and Japanese. Written in between the dialogue are brief explanations of what is happening in the scene, such as one would find in the script of a play. The SP also includes notes explaining the significance of certain words and phrases in the dialogue when the meaning of such phrases is not evident through translation alone, as is sometimes the case with jokes, idioms, slang, historical references, and the like. My choice of a book that includes a Japanese translation of the dialogue is deliberate...My purpose in this class is to develop listening and speaking skills, and the SP provides a sort of database from which classroom activities can be developed. For large classes of students with varying ability levels, beginning with a shared understanding of the dialogue in the movie allows the conversational activities to progress more smoothly. Students are more than sufficiently challenged linguistically by the worksheets and printouts that they are given to complement the SP. (For a discussion of the importance of comprehensible input in second language acquisition see Krashen and Terrell [1983].)

Each SP is given a language-difficulty ranking set by the staff at Screenplay Publishing Company of from one to four stars, with one star representing the most elementary level of the movies being evaluated and four the most advanced. Criteria for evaluation include the speed of speech, the use of slang and dialects, and the difficulty of the linguistic content of the movie. In my estimation these star rankings are quite reliable, but since the students I teach are studying at the university level and since they are provided with a copy of the script which they can study at home before class and have an instructor at their disposal to help break down the language content I do not consider the SP ranking when choosing a movie for my class. I do, however, draw the students' attention to this system when they come to me for advice on what movies and SPs I recommend to them for individual study. As it happens, the movies which I have used to date had rankings of either one or two stars and they were more than sufficiently challenging for the students in my classes.

Most of the students I have taught have not heard of the SP series and I think it would be useful for EFL instructors to mention this series of books to their students whether they are using videos with them or not. These books offer self-motivated students a fun way to improve their listening skills and increase their English vocabulary on their own. They are relatively inexpensive and can be purchased at most of the larger bookstores in Japan or ordered through them if they are not in stock. The movies to accompany SPs are also available through the bookstores or can easily be obtained at video rental centers in Japan, of which most students would appear to be members. I also keep a selection of SPs in my office to lend out to interested students. I find that students are always eager to learn of new ways in which they can work on their own to improve their language skills, and this is one source of self-study materials that seems to be both interesting and beneficial to the students who have tried it.

### *Worksheets and printouts*

The printouts and worksheets are an integral element of the course. The worksheets are designed to help the students assimilate the language used in the movie and to give them opportunities to work with useful vocabulary, phrases, and language structures in the movie and SP. The type of exercises I use on the worksheets and the number of worksheets I provide vary from unit to unit, but for each unit I always begin with a list of what I feel are the most useful phrases for the students to know from that part of the movie based on my knowledge of current language usage in the United States. In subsequent sections of the worksheets I include exercises designed to give students further practice in using the vocabulary and expressions introduced in the first section of useful phrases.

I also introduce the students to various aspects of American culture by means of printouts that I prepare periodically. In these printouts I either reproduce or summarize information which I have found on the Internet or in TV reports, newspapers, magazines, or books that is relevant to a particular aspect of culture which we have been exposed to in the movie and which we have discussed in class. This provides the students with an opportunity to study from realia and gives them an up-to-date look at

various facets of modern American society.

### *Notebooks*

In addition to these materials, students are required to keep an A-4 sized notebook into which they put the printed materials that I give them, write-ups of group work, notes which they take in class, and any other work they do that is relevant to the class. I collect these notebooks periodically to make sure the students are keeping up with their work and to give them feedback on their written assignments. Since we refer to previous worksheets regularly throughout the year, I emphasize to the students the importance of keeping their printouts and worksheets in chronological order in their notebooks and bringing their notebooks to class with them every week (Miyake 1999).

### 3. *Die Hard* worksheets.

Below is a complete set of the worksheets that I have written to accompany the SP for *Die Hard*. The SP divides the movie into ten episodes, with a title assigned to each episode. Worksheets for episodes one through ten are designed to correspond to the ten episode divisions in the *Die Hard* SP, while the final worksheet is a comprehensive review of the movie. Page numbers refer to the pages in the SP.

#### Unit One L.A. Airport

**I . Useful Phrases: Find these phrases in your book between pages 7 and 10 and underline them.**

1. You don't like flying, do you?
2. Do you want to know the secret to surviving air travel?  
EX: Do you want to know the secret to surviving English class?  
EX: Do you want to know the secret to mastering English?  
EX: Do you want to know the secret to gaining (losing) weight?
3. It sounds crazy. (OR It sounds stupid; funny; interesting; complicated; like fun; like a good idea.)
4. I've been doing this for eleven years.  
EX: I've been studying English for \_\_\_\_\_ years.

EX: I've been studying at Seian for \_\_\_\_\_ months (years.)

EX: He's been working there for \_\_\_\_\_ years.

5. Can I leave my bag here? (=Is it OK to leave my bag here? ) Note: "May I..." or "Do you mind if I..." are more polite ways to say the same thing.

EX: Do you mind if I leave my bag here? / May I leave my bag here?

EX: May I sit here? / Do you mind if I sit here?

6. Flight \_\_\_\_\_ is now boarding at gate \_\_\_\_\_.

7. I want to congratulate each and every one of you. (=Congratulations!)

8. A: It's Christmas Eve. Families, stockings, chestnuts, Rudolf and Frosty. Any of these ring a bell?

B: Actually, I was thinking more of mulled wine, a nice aged Brie and a roaring fireplace.

EX: A: Hey, would you like to go see a movie this weekend?

B: Actually, I was planning to go back to my hometown this weekend.

9. It's five-forty. Go join the party. You're making me feel like Ebenezer Scrooge.

EX: It's ten o'clock. Get up!

EX: It's twelve o'clock. Put away your books, it's time to go.

EX: It's a quarter after eleven. Go to bed!

EX: It's a quarter to six. Get ready for dinner.

10. Do you think the baby can handle a little sip?

EX: You have to take all of these packages to the post office by three thirty. Can you handle it?

EX: I have classes every day and a lot of homework every night. I can't handle a part-time job now.

## II . Answer these questions in your notebook, then discuss them in groups.

- Ex. Q: What is John's relationship to the salesman on the plane?

A: They're strangers. They don't know each other.

1. What is John's relationship to Holly?
2. What is Paulina's relationship to Holly and John's children?
3. What is Mr. Takagi's relationship to Holly Gennaro?
4. What is Ellis's relationship to Holly Gennaro?
5. What does John do?
6. What does Holly do?
7. What does Ellis do?
8. What does Argyle do? What was his job before that?

**III . Find the sentences below in your book and underline them. They are between pages 10 and 12.**

1. The salesman has a shocked look on this face. (The salesman looks shocked.)
2. McClane pulls a large teddy bear from the overhead compartment.
3. A pretty stewardess passes McClane in the aisle.
4. She stares at McClane as she walks by.
5. Passengers retrieve their luggage from the carousel.
6. She walks through the crowded lobby into an empty hallway. (p.9)
7. Ellis has a smile on his face. (Ellis is smiling.)
8. Holly stares at Ellis a moment.
9. Holly holds a telephone receiver to her ear and looks at Ellis.
10. The telephone rings and Lucy runs to answer it.

**IV . Dictation: Now listen as your partner dictates the sentences in Part III to you, and fill in the blanks below. This is a listening and writing exercise so do not look at the sentences above while you are writing. If you need help you can say, "Pardon me?" or "How do you spell that?" or "Would you please repeat that?"**

**Sentences for Dictation**

1. The salesman has a \_\_\_\_\_ on his face. (The salesman looks shocked.)
2. McClane pulls a large teddy bear \_\_\_\_\_.
3. A pretty stewardess passes McClane \_\_\_\_\_.
4. She \_\_\_\_\_ McClane as she \_\_\_\_\_.
5. Passengers \_\_\_\_\_ their \_\_\_\_\_ from the \_\_\_\_\_.
6. She walks through the \_\_\_\_\_ into an \_\_\_\_\_. (p.9)
7. Ellis has a smile \_\_\_\_\_. (Ellis is smiling.)
8. Holly \_\_\_\_\_ at Ellis a \_\_\_\_\_.
9. Holly holds a \_\_\_\_\_ to her ear and \_\_\_\_\_  
Ellis.
10. The telephone rings and Lucy runs to \_\_\_\_\_.

**V . John Meets Argyl: Write the answers to these questions in your notebook.**

1. Why does John say "California!" to himself when the girl yells and jumps into her

- her boyfriend's arms?
2. Why does John McClane approach the chauffeur?
  3. How do you introduce yourself to someone?
  4. How do you know Argyle has never driven a limo before? What does he say?  
(Use "first time.")
  5. How do you know McClane has never ridden in a limo before? What does he say? (Use "first time.")
  6. What does Argyle say about John's bear?
  7. What would be a more formal way for Argyle to say "Sorry about that" to John?
  8. The answer is "For about six months." Holly is the subject. What is the question?
  9. Why does Argyle ask so many questions?
  10. a) What is a word that means legally wed?  
b) What is a word that means legally wed but living apart because you don't get along?  
c) What is a word that means once wed but later unwed by law.  
d) What is a word that means never wed?
  11. How does Argyle say, "Is it OK with you if we listen to some music?"
  12. What does "Ain't you got..." mean in more grammatical English?
  13. How do you say "Do you got a place to stay " more grammatically?

## VI . Conversation Practice

- a) Pretend that you are the parent and your partner is your college-aged child.  
Make some questions using "Why didn't you..." to ask your partner.  
EX: Why didn't you bring your notebook to class today?  
EX: Why didn't you come to class last week?  
EX: Why didn't you tell me you were sick? I would have let you go home.
- b) Make some sentences using "When I was in high school (I used to)..." to tell your partner.  
EX: When I was a senior in high school I used to drive to school every day.  
EX: When I was a freshman, sophomore and junior in high school girls weren't allowed to wear pants to school. They had to wear dresses or skirts every day.
- c) Ask your partner a few questions using "Do you mind if I..."  
EX: Do you mind if I leave class early today?  
EX: Do you mind if I put my books here?  
EX: Do you mind if I smoke?

**VI . Acting Out Commands:** What are the actors doing? Reread the descriptions of the characters' actions and body language in Unit One of the screenplay. The commands in Part A and Part B below use vocabulary words from those descriptions. Work with a partner. Cover one part of the commands. Your partner will cover the other part. Take turns giving each other the commands from your part. Your partner will act out your commands. When you finish, repeat with opposite parts. This is an exercise in listening and responding, so make sure that you and your partner only look at your own half of the page while doing this exercise.

### **Part A**

1. With your hands, imitate a plane landing on a runway.
2. Clench the sides of your chair.
3. Make a fist.
4. Stare at someone.
5. Chuckle.
6. Imagine you are in an airplane. Reach into the overhead compartment.
7. Look shocked.
8. (Now give your partner your original command.)

### **Part B**

9. Glance at the clock.
10. Pretend to put a cigarette in your mouth and light it.
11. Pretend to put a cigarette out.
12. Shake hands with your partner.
13. Applaud.
14. Turn your back on your partner.
15. Hold the telephone receiver to your ear and wave good-bye.
16. (Now give your partner your original command.)

## Unit Two: Nakatomi Plaza

### I . Useful Phrases: Find the phrases below in your book and underline them.

1. You live happily ever after, right? (The last line in many fairy tales is “They all lived happily ever after.”)
2. Do you have a place to stay?  
EX: Would you like to stay at my place tonight? (“My place” means “my home.”)
3. Take the express elevator. Get off where you here the noise.  
EX: Take the (number) bus. Get off in front of the university.  
EX: Take the (number) bus. Get off at the fourth stop.
4. I couldn't agree with you more. (=I agree with you completely.)  
EX: I couldn't be happier about it. / I couldn't be happier for you. (=I'm really happy for you.)  
EX: I couldn't be more pleased. (=I'm so pleased!)
5. Why don't I talk to him right now? (This is used for making a suggestion. An expression with the same meaning is “Shall I talk to him right now?”)  
EX: Why don't we go to the library after class? (=Shall we go to the library after class?)  
EX: Why don't we get together tonight to study for the test?
6. How was your ride in?  
EX: How was your day? / How was your weekend? / How was your trip?  
Q: How was your trip?  
A: 1) Great! / Wonderful! / Good. 2) All right. / So-so. / Not bad.  
3) Not too good. / Not very good. 4) Terrible. / Awful. / Horrible.
7. Several floors are under construction.  
EX: The Sagrada Familia has been under construction for decades.
8. I was just making a call. This was the nearest phone.
9. I want you to meet John McClane.  
More polite: I'd like you to meet John McClane.
10. I've heard a lot about you. (=Holly has told me a lot about you.)
11. Q: Can I get you anything?  
A: No thank you. I'm fine.
12. It's sort of a double celebration. (sort of=something like, somewhat of a)
13. I was hoping you made the flight.(=I was hoping you didn't miss the flight.)  
EX: I didn't make the flight. I got to the airport a little too late. (=I missed the flight.)

- EX: I didn't make my train. I missed it by two minutes. (=I missed the train.)
14. Well, go on. Are you embarrassed? (=Well, go ahead. Are you embarrassed?)
15. It's just a small token of my appreciation.  
EX: I appreciate your help.  
EX: I appreciate your concern.
16. He gets very depressed this time of year.  
EX: I get depressed when I watch a war movie. / War movies are depressing.  
EX: I get depressed when I think about all of the homework I have to do this weekend.  
EX: Too much homework is depressing.
17. The kids would love to have you at the house. I would too.  
EX: We'd love to have you come and stay with us this weekend.  
EX: We'd love to have you visit us this summer. (=We'd love it if you would visit us.)
18. I missed you.
19. Mr. Takagi is looking for you.
20. Very mature. (This is a sarcastic remark. It means "That was a childish thing to do," or "That was very immature.")

## II . Situation Descriptions

1. The limousine pulls up to the curb.
2. McClane shakes Argyle's hand.
3. McClane walks through the revolving door.
4. He approaches the security guard at the front desk.
5. McClane nods to a guard who is leaning against the wall.
6. McClane takes a sip of punch, then he bumps into a brunette woman.
7. Takagi is talking with a middle-aged woman.
8. McClane has a tattoo on his arm.
9. A drunken couple stumbles into the office.
10. There's a knock on the door.

## III . Understanding Details: Answer these questions in your notebook.

1. Why is McClane upset when he sees Holly's name under the list of names beginning with G?
2. What tune is McClane whistling as he walks to the elevator?

3. Why does McClane say "California!" when the man kisses him on the cheek?
4. How do you know the Nakatomi Plaza building isn't finished yet?
5. Why is McClane angry with himself after he talks with Holly?

**IV . Look at the phrases in Part I above. For each phrase below, find a phrase with the same or almost the same meaning.**

1. It's being built now.

---

2. Where are you going to spend the night?

---

3. I think so too.

---

4. I was sad because you were gone.

---

5. The children would be very happy if you'd stay with us this weekend.

---

6. Thank you for your help.

---

7. I missed my plane.

---

8. From then on everyone had a good life. (Many fairy tales end with this.)

---

9. Was the ride in from the airport OK?

---

10. He's trying to find you.

---

**V . Look at the Useful Phrases and examples for Unit Two in Part I and fill in the blanks below.**

1. A person who acts childish is \_\_\_\_\_.

2. When you're \_\_\_\_\_ your face turns red.

3. Q: How was your weekend?

A: \_\_\_\_\_. I wrecked my car.

4. To offer a guest something to eat or drink you say \_\_\_\_\_ ?

5. If something brings you down you say, "This is so \_\_\_\_\_."

If you feel down you say, "I'm \_\_\_\_\_."

**VI . Fill in the blanks with the appropriate words from the situation descriptions in Part II above.**

1. \_\_\_\_\_ means turning around or rotating.
2. To bend or slant in order to rest on something is to \_\_\_\_\_.
3. To bend your head forward quickly as a form of greeting or to agree with someone is to \_\_\_\_\_.
4. The concrete edging along the street is called the \_\_\_\_\_.
5. To take a little drink of something is to \_\_\_\_\_.
6. A design made on the skin by pricking it with needles and putting in colors is a \_\_\_\_\_.
7. Someone between the ages of 40 and 60 is \_\_\_\_\_.

**VII . Conversation Practice: Make up conversations to match the situations.**

1. A is having a party. B is a guest. A will offer B something to eat or drink. B will say he doesn't need anything. Use the expressions in Part I, #11. Write your conversation below.

A: \_\_\_\_\_

B: \_\_\_\_\_

2. Ask each other what makes you depressed. Use the pattern below.

You: I get depressed when \_\_\_\_\_. How about you?  
When do you get depressed?

Your Partner: I get depressed when \_\_\_\_\_.

- 3a. Use "Why don't we..." and suggest doing something with your partner. Write both conversations. For the response say, "Sure. That sounds like fun."

You: \_\_\_\_\_

Your Partner: \_\_\_\_\_

Your Partner: \_\_\_\_\_

You: \_\_\_\_\_

3b. Suggest doing something again. This time reply with "I'm afraid I can't. I have to..."

You: \_\_\_\_\_

Your Partner: \_\_\_\_\_

Your Partner: \_\_\_\_\_

You: \_\_\_\_\_

4. Pretend your partner has done you a favor. Thank him or her using "appreciate."  
(Part I, #13.)

EX: A: Thank you for helping me with my homework. I really appreciate it.

B: You're welcome. I was happy to do it. OR No problem! It was my pleasure.

You: Thank you for \_\_\_\_\_. I really \_\_\_\_\_ it.

Your Partner: \_\_\_\_\_

Your Partner: Thank you for \_\_\_\_\_. I really \_\_\_\_\_ it.

You: \_\_\_\_\_

5. Ask you partner about his or her Golden Week holiday. Use the expressions in Part I #6 above.

6. Tell your partner how to get from one place to another by bus or train. Use expressions such as "Take the \_\_\_ train (bus, subway)", "Get off at \_\_\_"; "It takes about \_\_\_ minutes." (See Part I #3 above.)

### Unit Three: The Takeover

I . Useful Phrases: Find the phrases below in your book and underline them.

1. Amazing! Fists with your toes!

2. How's it going up there?  
Oh, all right.
3. Stay calm! Everything's gonna be fine. (= Calm down! / Don't get excited.)
4. How do you do? It's a pleasure to meet you. (Informal: Hi. It's nice to meet you.)
5. I always enjoyed \_\_\_\_\_ when I was a boy.
6. I'm afraid work must intrude. (=I'm sorry but work must intrude.)  
EX: I'm afraid I can't go to the movie with you tonight.
7. Sort of fill in the blank questions actually.
8. When they wake up in Tokyo in the morning they'll change it.  
EX: When the bell rings you can go.  
EX: When you come home I'll be asleep.
9. You won't be able to blackmail our executives.  
EX: I'm afraid I won't be able to come to your house tomorrow.  
EX: We won't be able to finish Unit Three in one lesson.
10. I'm not interested in your computer.  
EX: I'm not interested in politics.  
EX: I'm not interested in expensive clothes and jewelry.
11. What kind of terrorists are you? (This means that the person's actions are not normal for a terrorist.)  
EX: She murdered her son for insurance money. What kind of a mother is she?  
ALTERNATIVE USAGE: What kind of movie is this? It's an action movie.  
What kind of books do you like? I like mysteries.
12. You'll never get it open.  
EX: I'll never forget you.
13. You're just gonna have to kill me.  
EX: You're going to have to practice if you want to improve.

**II . Pre-viewing Questions: Read the questions. Watch for the answers as you watch the movie. Write the answers in your notebook.**

1. What does Theo do as he's typing?
2. Who does Karl shoot?
3. The terrorist Eddie changes his clothes after he enters Nakatomi Plaza. What does he put on?
4. Why doesn't Argyle hear the shooting?
5. What is John doing when he hears the shots?
6. What is John wearing when the shooting begins?

**III . About You: Write the answers to these questions in your notebook then discuss them with your partner.**

1. When you are very tense and you need to relax what do you do?
2. How many times a day do you change your clothes?
3. What do you keep in your wallet?
4. When do you get frantic? (Possible reply: I get frantic when I can't find my cell phone.)
5. What did you enjoy doing when you were in elementary school?

**IV . Write the names of the characters being referred to in the sentences below.**

1. They enter the lobby through the revolving door. \_\_\_\_\_
2. He hums and sings as he works. \_\_\_\_\_
3. He's barefoot. \_\_\_\_\_
4. He makes fists with his toes. \_\_\_\_\_
5. He takes his wallet out of his pocket. \_\_\_\_\_
6. He's kneeling by the telephone switchbox. \_\_\_\_\_
7. He unzips a bag and takes out a weapon. \_\_\_\_\_
8. He cuts the wires with a chain saw. \_\_\_\_\_
9. He's working frantically on the telephone wires. \_\_\_\_\_
10. He's sweating as he works. \_\_\_\_\_
11. He shrugs and hangs up the receiver. \_\_\_\_\_

**V . Glossary. Look at the underlined words in Part IV above. Write them in the blanks below. Note: These are "fill in the blank" questions. (Hans uses this phrase when he's talking to Mr. Takagi. See Part I #7 above.)**

1. \_\_\_\_\_ wildly, with anger, pain, worry, etc.
2. \_\_\_\_\_ (v.) to sing with the lips closed, not saying the words
3. \_\_\_\_\_ without shoes or socks
4. \_\_\_\_\_ a hand with the fingers closed into the palm
5. \_\_\_\_\_ a thin, flat case for carrying money, cards, etc. in a pocket or purse
6. \_\_\_\_\_ (v.) to rest on one's knee(s)
7. \_\_\_\_\_ (v.) to open a zipper
8. \_\_\_\_\_ (v.) to give out a salty liquid through the skin; perspire

**VI . Fill in the blanks with the appropriate word from the glossary in Part V above.**

1. The rescuers dug \_\_\_\_\_ through the building looking for survivors.
2. He was \_\_\_\_\_ as he worked under the hot sun, and his shirt was soaked in sweat.
3. The little girl \_\_\_\_\_ by her bed to say her prayers.
4. The zipper was stuck and he couldn't \_\_\_\_\_ his coat.
5. He didn't know the answer so he \_\_\_\_\_ his shoulders as if to say, "I don't know."
6. The earth \_\_\_\_\_ around the sun.
7. If you walk \_\_\_\_\_ on the beach you can feel the sand between your toes.
8. I don't know the words to that song but I can \_\_\_\_\_ the tune.
9. Besides money and credit cards, most Americans carry family pictures in their \_\_\_\_\_.
10. Wood cutters use \_\_\_\_\_ to cut down trees.
11. The cab driver made a \_\_\_\_\_ and yelled at the other driver.
12. The sign on the \_\_\_\_\_ door said MEN.

**Unit Four: Fire Alarm**

**I . Useful Phrases: Find the phrases below in your book and underline them.**

1. Why (in the world) didn't you stop them? Because then you'd be dead too, stupid.  
EX: A: Why didn't you come to class last week? B: Because I was sick.
2. Call 911.  
EX: Call me tonight if you have time.
3. The fire has been called off. (called off = canceled)  
EX: The game was called off due to a typhoon warning. (due to= because of)
4. I promise I won't hurt you.  
EX: May I borrow 5,000 yen? I promise I'll pay you back next week.
5. We are in charge. So decide now.  
EX: Who's in charge of ticket sales for the school festival? (OR Who's in charge of entertainment, advertising, food, etc.)
6. Have you decided what you'll do after you graduate?
7. We have to tell Karl (that) his brother is dead.  
EX: We have to tell the teacher that we'll be absent next week.

8. Something's wrong.

EX: You look terrible. What's wrong?

9. Do I sound like I'm ordering a pizza?

EX: A. John called. He wants you to call right back.

B. Uh-oh. Did he sound like he was in trouble?

10. Send a police backup ASAP. (=as soon as possible)

EX: I need an answer right away. Please call me back ASAP.

11. Come down here and arrest me.

EX: His brother was arrested for shoplifting, but he was innocent.

**II . Find the commands in Unit 4 and write them in your notebook. Change or drop the bad language from the commands before you write them to make them G-rated. (You can use commands from other units too.) Write the commands in your notebook.**

**III . Conversation: With your partner make short conversations using the expressions below. Then write the conversations you made up together in your notebook.**

- 1) Why didn't you... 2) Call me. 3) I promise I'll... OR I promise I won't...  
4) Uh-oh. 5) ASAP

**IV . Comprehension questions: Write the answers to these questions in your notebook.**

1. Why didn't John help Mr. Takagi?
2. What did John do first to try to get help?
3. Why did the fire trucks drive away?
4. Why isn't Tony afraid of McClane?
5. How does Tony die?
6. Did McClane kill Toni intentionally or by accident?
7. Hans doesn't think a security guard killed Tony. Why not?
8. How does McClane try to get help the second time?

## Unit Five: Party Crasher

### I . Useful Phrases: Find the phrases below in your book and underline them.

1. I thought you guys just ate doughnuts. (p.43)
2. She's pregnant. (p.43)
3. I'm on my way. (p.44)
4. The police are probably on their way. (p.46)
5. I can stall them, but not if they hear gunshots. (p.46)  
EX: a) Are you stalling for time?  
b) Why are you stalling?  
c) Please stall the teacher until I get back.
6. Well, it's about time. (p.47) (This is a slightly rude way to say "Finally!" or "At last!")
7. It's a possible crank call. (p.48)
8. We had that false alarm. (p.48)
9. a) Next time you have a chance to kill someone, don't hesitate.  
b) Thanks for the advice. (p.51)
10. Everything here's OK. (p.52)
11. Welcome to the party, pal. (p.52)
12. All of you relax. (p.53)
13. Maybe you should've put it on the bulletin board. (p.54)
14. Oh, these are very bad for you. (p.55)
15. See if he's lying about Marco. (p.55)
16. Yippee-kai-yeah! (p.55) (This is the most famous line from this movie.)

### II . Look at the useful phrases in Part I and find a word or phrase that means almost the same as the ones below.

1. Stay calm! \_\_\_\_\_
2. Yee-ha! \_\_\_\_\_
3. Everything is fine. \_\_\_\_\_
4. buddy \_\_\_\_\_
5. These will make you sick. \_\_\_\_\_
6. Find out whether or not he's telling the truth. \_\_\_\_\_
7. It might have been a good idea for you to post it publicly. \_\_\_\_\_
8. Don't think twice. \_\_\_\_\_

9. you people \_\_\_\_\_
10. She's expecting. (=She's expecting a baby.) \_\_\_\_\_
11. You're here at last! \_\_\_\_\_
12. dollars \_\_\_\_\_
13. I'm sure they're coming here now. \_\_\_\_\_

### III . Write the definition for each of the underlined words in English or Japanese.

1. McClane ducks. (p.44) \_\_\_\_\_
2. He runs backwards. (p.44) \_\_\_\_\_
3. McClane dives behind a power unit. (p.44) \_\_\_\_\_
4. McClane frantically looks around. (p.45) \_\_\_\_\_
5. McClane crawls through the duct. (p.46) \_\_\_\_\_
6. Powell leans on the counter and looks around. (p.49) \_\_\_\_\_
7. Eddie claps his hands together. (p.49) \_\_\_\_\_
8. McClane smashes a window with a chair. (p.49) \_\_\_\_\_
9. Powell a) kicks the driver's door open and b) squeezes out through it. (p.53)  
 a) \_\_\_\_\_ b) \_\_\_\_\_

### IV . Answer the questions below in your notebook.

1. Why is Powell buying so many Hostess Twinkies?
2. Powell starts to leave Nakatomi Plaza. How does McClane get him to stop?
3. What is Thornburg begging Sam to let him do?
4. Why is Hans so upset about Heinrich's missing bag?
5. Why was McClane impressed with the terrorists' phony IDs?
6. McClane answers, "Call me Roy." What was Powell's question?
7. a) Does Al advise McClane to fight the terrorists?  
 b) What does he tell Al to do?

## Unit Six: Swat Team

### I . Useful Phrases

1. a) How do you know that?  
 b) (I have) a hunch.
2. I have a request.

3. a) What idiot put you in charge?  
 b) You did, when you murdered my boss.  
 EX: What idiot told you that?
4. I don't enjoy being this close to you.
5. She's not due for a couple of weeks. (=The baby isn't due to be born for a couple of weeks.)
6. Unless you like it messy, I'd start bringing us in groups to the bathroom.  
 EX: Unless you want to fail, I'd start studying more (if I were you.)
7. a) What's going on?  
 b) What's it look like? We're going in. ("What's it look like" is a rude way of saying "What we're doing is obvious. You don't need to ask.")
8. Turn it down a little.  
 EX: The music is too loud. Would you mind turning it down a little please?
9. a) I'm kind of busy now. I'll talk to you later.  
 b) What's wrong? What's going on?
10. Take cover! Duck!
11. Don't be impatient. Just wound them.
12. a) You made your point. Let them pull back.  
 b) Thank you, Mr. Cowboy. I'll take it under advisement.

**II . Application of Useful Phrases: For each sentence below, find a phrase in Part I with the same or similar meaning.**

1. Get down.  
 \_\_\_\_\_
2. Who said that you are in control?  
 \_\_\_\_\_
3. Shoot to injure, not to kill.  
 \_\_\_\_\_
4. What's the matter?  
 \_\_\_\_\_
5. It's unpleasant to be anywhere near you.  
 \_\_\_\_\_
6. I'll consider your suggestion.  
 \_\_\_\_\_
7. She's going to have a baby soon.  
 \_\_\_\_\_

8. Take your time.

---

9. Where did you get that information?

---

10. My intuition tells me. (=I have a feeling that that's the case.)

---

11. Give them a chance to get out.

---

12. I'd like to ask a favor.

---

**III . True/False: Answer true or false for the following questions in your notebooks. If the answer is true, write why you know it is true. If it is false, write the correct answer.**

1. Dwayne is a news reporter.
2. Dwayne trusts McClane.
3. Dwayne thinks McClane could be a crazy man.
4. Dwayne is concerned about the hostages.
5. Powell respects Dwayne.
6. Powell has a hunch that McClane is a bartender.
7. Hans thinks that Holly is capable and efficient.
8. Hans turned down (refused) Holly's request to give the pregnant woman a comfortable place to sit.
9. When the first policemen try to enter the building Hans orders his men to kill them.
10. Theo refers to the army tank as an RV.

### Unit Seven: Geronimo

**I . Useful Phrases: Find the phrases below in your book and underline them.**

1. I'm in charge of this situation.
2. I've got some bad news for you.
3. a) How are you feeling?  
b) Pretty %% &! unappreciated.
4. You hang in there.

EX: I know you have a lot to learn before the test but hang in there!

5. I think I can handle this Eurotrash.

EX: He couldn't handle the stress of living in the crowded city so he moved to the countryside.

6. I hope I'm not interrupting.

EX: The TV program was interrupted for a special news bulletin.

7. You're very perceptive.

8. Touching cowboy, touching.

EX: She was touched by his kindness toward her child.

9. My friends call me John.

EX: My name is Robert but please call me Bob.

10. Can't you read between the lines?

EX: He said everything was fine but, by reading between the lines, his very perceptive girlfriend realized that he was in serious trouble.

**II . Look at the dialogue in Unit 7 in your books. Find a quote that means the same as each of the sentences below.**

1. You've ruined the Nakatomi Plaza. (Robinson)

---

2. Do you understand? (Robinson)

---

3. I feel like no one values my work. (McClane)

---

4. These are words of encouragement from Powell to McClane.

---

5. I know how to deal with the terrorists. (Ellis)

---

6. I hope I didn't catch you in the middle of something. (Ellis)

---

7. It's clear... (Ellis)

---

8. You have keen insight (intuition). (Hans)

---

9. I'm not at all interested in your political motives. (Ellis)

---

10. I'm your hero. (Ellis)

---

III . Complete the sentences. Use words from the quotes in Part II above. For number one you will need a different form of the word used in the phrase above.

1. \_\_\_\_\_! I'm sure things will be better soon.
2. Please stop \_\_\_\_\_ me when I'm talking.
3. You're the only one who realized why the little girl was so unhappy. You're very \_\_\_\_\_.
4. I \_\_\_\_\_ about who wins the baseball game. I don't like sports at all.
5. The dog is scratching frantically at the door. It's \_\_\_\_\_ that he wants to go outside.

#### Unit Eight: Bare Feet

I . Useful Phrases: Find the phrases below in your book and underline them. Then in your notebook write who said each line to whom.

1. Yes, right over there. ("Right" is for emphasis, as in "Right now!" or "Right away!")
2. How you doing. (=How are you doing?)
3. No relation. (=We're not related.) OR He's not related to me. / I'm not related to him.
4. I'm in charge here.
5. I'm not going to hurt you.
6. What are you doing up here?
7. I managed to get out of there. (=It wasn't easy, but I got out.)
8. A: Aren't you forgetting something?  
B: Such as? (Here this means "For example?" OR "Like what?")
9. A: One of yours? (=Is he one of your men?)  
B: No, no way! (=Absolutely not!)
10. Do you smoke?
11. I got invited to this party by mistake.

12. Do you know how to use a handgun?
13. I spent a weekend at a combat ranch.
14. I'm going to count to three.
15. That man looks really pissed. (In American English "pissed" means "angry."  
NOTE: "Pissed" is not a very good word. It's vulgar. "Ticked off" is better.
16. Only John can drive somebody that crazy. (=Only John can irritate [bother] somebody that much.)

**II . Say these sentences to your partner in Japanese and ask your partner to say them in English.**

managed to It wasn't easy, but I managed to finish my homework on time.

No way! A: Would you please do my homework for me?

B: No way! That's cheating!

A: Can you read the whole book in one night?

B: No way! It'll take me a week.

Do you know how to... A: Do you know how to ski?

B: Yes, but not very well.

A: Do you know how to cook Chinese food?

B: Yes, a little.

He really looks ticked off. Your dad really looks ticked off. You'd better apologize.

The teacher really looks ticked off. You'd better stop talking.

It drives me crazy. The noise of cars honking in the night drives me crazy.

His complaining drives me crazy.

by mistake I was supposed to read chapter four, but I read chapter five by mistake.

I was supposed to bring my English textbook to class but I brought my French one by mistake.

**III . About You: Write your answers to these questions in your notebook, then ask and answer them with your partner.**

1. What drives you crazy?
2. Where did you spend last summer vacation?
3. What ticks you off?

4. Are you related to anyone living in Shiga?
5. Do you smoke? If yes, do you ever plan to quit?
6. Have you ever smoked? (Possible replies: Yes, a few times. / No, never. / Yes, I'm a smoker. I started in college.)

## Unit Nine: The Seventh Lock

### I . Useful Phrases: Find the phrases below in your book and underline them.

1. I'll be right up.
2. I'm good for it.
3. I had an accident.
4. They can teach you everything about being a cop except how to live with a mistake.
5. I just couldn't bring myself to draw my gun on anybody again.  
EX: I couldn't bring myself to tell him the bad news. Someone else will have to tell him.
6. You ask for miracles, Theo, I give you the F.B.I.
7. Are you crazy?!
8. What's goin' on here?
9. We're on the way.
10. I want you to tell her that John said he was sorry. You got that?
11. Powell: Did you get that?  
Police officer: No, something about a double cross.
12. A policeman's wife might come in handy.
13. I have some news for you, McClane.
14. You're nothing but a common thief!
15. I'm an exceptional thief, Mrs. McClane. And since I'm moving up to kidnapping, you should be more polite.

### II . Application of Useful Phrases: Look at the useful phrases in Part I and find a word or expression that means the same as each of the sentences and phrases below.

1. All you are is a robber. \_\_\_\_\_
2. outstanding \_\_\_\_\_
3. We're coming now. \_\_\_\_\_

4. I'll be able to pay. \_\_\_\_\_
5. What's happening here? \_\_\_\_\_
6. Did you understand what I said? \_\_\_\_\_
7. be useful \_\_\_\_\_
8. He said he apologizes. \_\_\_\_\_
9. It was too hard emotionally for me to (do it.) \_\_\_\_\_
10. I have something important to tell you. \_\_\_\_\_

**III . Conversation: Ask and answer these questions with your partner.**

1. When could knowing English come in handy?
2. Ask your friend to give your teacher a message using "Please tell the teacher that..."
3. Why does Hans tell Holly that she should be more polite?
4. Have you ever been in a traffic accident? When?
5. Pretend that your train has been delayed and you're going to be late for class. Ask your partner to give a message to your teacher. Begin with "Please tell the teacher that..."

**IV . Look through the dialogue in Unit 9. Find the underlined words in the twelve sentences below and underline them in your book. Then write the long form of the underlined words in the space provided.**

1. I hav'ta hurry. \_\_\_\_\_
2. You oughta be on TV. \_\_\_\_\_
3. You should'a warned me. \_\_\_\_\_
4. I gotta go. \_\_\_\_\_
5. I could'a told you he was armed. \_\_\_\_\_
6. Who would'a thought this would happen. \_\_\_\_\_
7. I wanna go home. \_\_\_\_\_
8. Lemme go! \_\_\_\_\_
9. I'm kind'a busy right now. \_\_\_\_\_
10. I might'a misunderstood him. \_\_\_\_\_
11. We hav'ta get outta here. \_\_\_\_\_
12. I've gotta lotta homework. \_\_\_\_\_

V . In your notebook write three comprehension questions for Unit 9. Ask your partner the questions and see if your partner can answer them correctly.

## Unit Ten: Blow the Roof

### I . Useful Phrases

1. I was in junior high.
2. You got a terrorist shooting at hostages.
3. There's something wrong.
4. Hang on, honey.
5. Let's give 'em a hand over there.
6. Come on, we're gonna miss it!
7. I'm gonna go check on the line.
8. What was it like in there?
9. How did they treat you?
10. You take good care of him.
11. Now that it's all over, after this incredible ordeal, what are your feelings?
12. If this is your idea of Christmas, I gotta be here for New Year's.

### II . Comprehension Questions: Write the answers to these questions in your notebook.

1. Big Johnson says, "This is just like Saigon!" What is he talking about?
2. Why doesn't Little Johnson have any memories of flying a helicopter in Saigon?
3. Why does McClane begin firing his gun over the hostages' heads?
4. Why does the sharpshooter in the airplane begin firing at McClane?
5. How does McClane get off of the roof?
6. Why does Robinson say they're going to need some more FBI guys? Is this supposed to be humorous?
7. Why is Holly so shocked when she sees John?
8. Why does Hans compare John to a cowboy?
9. How does Hans die?
10. What does John do to save Holly from falling out of the window with Hans?
11. Why does Holly punch Thornburg?

## Comprehensive Review Units 1-10

**I . Describing the Characters:** Look over the past ten units of the book. Think about how each of the leading characters reacted to various situations throughout the movie, and how they interacted with one another. Choose at least three words from “Vocabulary for Describing People” in Part II to describe each of the characters listed below. You may use other adjectives as well, but you should include at least three words from the list for each character. Some of the same characteristics apply to more than one of the characters, so you may use the same words more than once. Explain at least two of your choices, including quotes from the book, to make your point. Include the page numbers of the quotes you use. Follow the example for Ellis in writing about each of the characters. Write your answers in your notebook.

1. What’s John McClane like?
2. What’s Argyle like?
3. What’s Hans like?
4. What’s Al Powell like?
5. What’s Karl like?
6. What’s Holly like?

EX: Ellis 1) Ellis is cocky. He thinks that he can handle Hans. He says, “I negotiate million-dollar deals for breakfast. I can handle this Eurotrash.” (p.78) 2) Ellis is aggressive. He’s tries to get Holly to go out with him. 3) Ellis is naive and unsuspecting. He doesn’t think that Hans is dangerous.

NOTE: “Cocky” means over-confident, thinking you know more than everybody else.

**II . Vocabulary for Describing People:** The following is a list of words and expressions for describing various characters who appeared in *Die Hard*. If you don’t understand the words from the definitions provided be sure to look them up in a dictionary. Learn the words in the list.

1. self-assured: confident; believes in oneself
2. hip: cool, with it
3. rude: bad mannered

4. upbeat: cheerful and fun
5. funny: makes people laugh; tells jokes
6. sophisticated: high class
7. cold and unfeeling: not nice, heartless
8. mean: not nice; unkind and hurtful to others
9. strong: the opposite of weak
10. professional: extremely competent in a job
11. brave: not afraid
12. vindictive: vengeful; inclined to revenge
13. cruel: very mean
14. scary: frightening
15. a good leader
16. smooth: no rough edges
17. cool and collected: calm
18. sensitive: responsive to feelings, moods, reactions, etc.
19. short-tempered: gets angry easily
20. smart: intelligent
21. ambitious: greatly desiring to get ahead at work
22. unscrupulous: lacking a moral sense of right and wrong; willing to do anything  
for personal benefit
23. ruthless: without mercy or pity

**III . Plot Keywords:** These are some of the plot keywords listed on the Internet Movie Data Base website for the movie *Die Hard*. You can find the complete list by going to < imdb.com > on the Internet and inputting the title of the movie. With your partner choose words from the list below and explain how the words relate to the movie. When you have finished write your explanations for at least ten of the words in the list in your notebook.

EX: 1980's: This movie took place in the 1980's.

California	helicopter
limousine	1980's
Christmas party	vault
hostage	hip hop music
bare feet	rescue
broken glass	negotiator

elevator                      machine gun  
talking to oneself        robbery

## References

- Casanave, C.P. (1995). Copyright law and video in the classroom. In Casanave, C.P. and J. D. Simons (Eds.), *Pedagogical perspectives on using films in foreign language classes*. In Keio University SFC Monograph #4, 78-90. Fujisawa, Japan: Keio University SFC.
- Helgesen, M. (1993). Dismantling the Wall of Silence, in Wadden (Ed.),
- Krashen, S. and T. Terrell (1983). *The Natural Approach*. London: Prentice Hall.
- Miyake, C. (1999). Movies in English-Language Teaching: Building an English Language Course around a Feature-Length Film Part One. In Seian Zokei Daigaku Kenkyu Kiyu (The Bulletin of Seian University of Art and Design) Vol. 6, 43-55, Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2002). Movies in English-Language Teaching: Building an English Language Course around a Feature-Length Film Part Two. In Seian Zokei Daigaku Kenkyu Kiyu (The Bulletin of Seian University of Art and Design) Vol. 7, 51-62, Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2012). Video-Based Language Learning: A Communicative Activity for Teaching Target Vocabulary from a Film. In Seian Zokei Daigaku Kiyu Dai San Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 3, 77-94. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.1
- Miyake, C. (2013). Video-Based Language Learning II: Communicative Activities to Accompany the Oxford Video Adaptations of Nick Park's Wallace and Gromit Films. In Seian Zokei Daigaku Kiyu Dai Yon Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 4, 102-120. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2014). Video-Based Language Learning III: Communicative Review Activities to Accompany the Oxford Video Adaptations of Nick Park's Wallace and Gromit Films. In Seian Zokei Daigaku Kiyu Dai Go Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 5, 83-106. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Nunan, D. (1989). *Designing Tasks for the Communicative Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sherman, J. (2003). *Using Authentic Video in the Language Classroom*. New York: Cambridge University Press.
- Swan, M. (1980). *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Tomlinson, B. (1998). *Materials Development in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wadden, P. (Ed.), (1993). *A Handbook for Teaching English at Japanese Colleges and Universities*. Oxford: Oxford University Press.
- Yamada, H. (1993). *Die Hard*. Nagoya, Japan: Screenplay Publishing Co., Ltd.



「Hiroyuki NAGAO works 1985-1989 展」報告

長尾 浩幸

Hiroyuki NAGAO



# 「Hiroyuki NAGAO works 1985-1989 展」報告

---

長尾 浩幸  
Hiroyuki NAGAO

准教授

I have been depicting print-art about the nature of art as a medium since 1980. I have conducted research on the following elements essential things to human life, feeling, memory, home, sleep, awareness. My works employ various methods, with a visual representation based on painting, prints, photography, and movies. I exhibited my past works this year, anticipating that new generations will experience a new sense of art and new interpretations.

私は、1980年代よりアートのメディア性に着目しながら、版表現を用いた作品を発表してきた。これまで「感情・記憶・居場所・眠り・知る」といった、我々が生きることと切り離せない事柄を取り上げ、絵画表現を起点に、版画、写真、映像など多様なメディアで制作を展開している。

2014年は、1985年ギャラリー 16の初個展以来、およそ30年を迎える。この機会に、当時に発表していた作品を今日の美術に向けて発信することは、これまで遭遇することがなかった世代に対して、新たな感性の創出と解釈が生まれる場になることを期待している。また、1980年代を「絵画と彫刻の復権の時代」と括ることに対して、その動向に向き合いながら制作していた頃を振り返り、当時の問題意識を鮮明にすることは、どのような意味があるのか問いかける展覧会となった。

## 「版」による表現と距離

「版」とは、古くから「字を刻んだ印刷用の板」「版木」を意味している。この「版」を使って創作された絵画として、一般的には版画が知られている。版画は「版」に使用している材料や技法から、木版画、銅版画、リトグラフ、シルクスクリーンなどの版種（凸版、凹版、平版、孔版）に分類される。また、「版」による技法を今日的に拡大解釈すれば、印、印刷、コピー、写真、デジタル化された画像など、より多種多様なものが想起される。版画は印刷媒体として派生しながら、その時代の社会が要請のもとに発展してきた。さらに、「版」による表現は、指紋などの「痕跡」や物などの「陰影」、あるイメージを映写する「鏡」、転写によるイメージの「反復」と「間接性」、模造や増殖による「型」、「複数性」、刷り重ねることで生まれる「層」など、メディア性に特徴があり、「版」による表現の可能性は無限に広がっている〔註1〕。

日本では江戸時代に流行った浮世絵版画、明治期末の創作版画運動の流れが「版画」の文化を形成してきたという一般的な解釈であるが、1957年から1979年まで、隔年開催された東京国際版画ビエンナーレは、世界に向けて開催された展覧会として日本の版画史に大きな足跡を残している。日本美術のなかで、版画表現を普遍的に認知させ、また現代美術としての版画を知らしめる機会として、大きな貢献を果たした。

その後、70年代頃に実験されてきた版表現には現代の批評性を担保していたが、観念的過ぎることで版画である必然性がなくなり、ふたたび絵画や彫刻に従来の批評を求めていく作家もいた。東京国際版画ビエンナーレの受賞者でもある泉茂や吉原英雄は、「デモクラート美術協会」解散後は、それぞれが活動の場を移して関西の大学において後進を育成していた。教育理念の中で明らかなことは、版画を目的化することではない柔軟な版画との距離感であった。自由な感性と批判精神を伴った版画や絵画を通して、新たな世界を創出したいと願う熱い思いから、版画教育に取り組んでいった〔註2〕。

## 「絵画と彫刻の復権の時代」以降

80年代美術を捉え直すにあたって、70年代における現代美術の背景は、欧米モダンの影響下で様々な価値観や芸術が停滞していた。絵画や彫刻といわれた従来のメディアの作品の多くはどこか即物的で「絵画と彫刻が失権した時代」という括り方をされていた。同様の停滞感は、文学や音楽から、サブカルチャーなどに及んでいた。このような状況で、哲学や思想、それを担った批評へのアプローチがフランスの人文社会科学系の分野で顕著となり60年代に活性化した構造主義と言われる思潮は、美術にも大きな影響を与えた。近代的な物語が解体し、人々の価値観も多様化した現在を予感させ、のちにポストモダンをめぐる論争となって欧米諸国や日本にまで広がった。これに同調するように、それまで禁欲的だった概念芸術に対して、意図的に激しい筆致や唐突なイメージを表出させた絵画や彫刻が評価されるようになった〔註3〕。

80年代のニュー・アカデミズム・ブームには、翻訳された言説の一部だけがデザインやファッション雑誌、美術雑誌にも掲載され、その文体から美学生の私も相当に感化されていた。そうした文化的雰囲気は、これまでの閉塞感のある価値観から解放へ向かう予兆であったが、自由な気運にまかせた個々の主題は曖昧なままであった。一方で、構造主義的手法は「問題の明確化」という前提が共有された者同士では成立するが、それ以外の人には有効ではなかった。日本の80年代美術の評価が待たれるのは、60年代末から70年代にかけて問題提起した「もの派」と、先のことを学習して戦略的に取り組み、世界を席卷したスーパーフラット周辺らの間に隠れてしまっていることだ。このことについてもいずれは考察することにした。

ここで一人称にもどると、80年代前半にはすでに流行っていたポストモダンの思考の現代美術に反目しつつも、その影響のもとで作家活動を始めていた。当時は学生時

代に版画を専攻していたが、自分はいくまで「絵画」の中で版画を制作していた。同世代の作家らが派手に大きな絵画や他素材の彫刻によって、個展やグループ展で発表の機会を得ていくうちに、専門分野に所属しながら、作家としてどのように独自の表現を獲得できるか葛藤していた。私にとっての課題は、版画についての史実や文脈の提示ではなく、「ほかにはない作品」が、今日の美術に対して、いかに批評を呼ぶことができるかにあった。もっとも思い返せば、経験も少ない美学生が独り思い込んで個展に臨んでいたのだろう。しかし、あの時の試行錯誤しながら生まれた作品たちが現在まで作家として活動する起点となった〔註4〕。

## 問題意識と新たな展開へ

90年代に入って作品と向き合う意識に変化が生まれた。画廊や美術館といったニュートラルな場所から離れて、サイトスペシフィックな空間での展示や海外での発表を契機に自らの制作を見直すような出来事があった。また、企業のメセナ活動に参加し、社会と芸術を取り巻く環境のあり方について考える経験が増えたことも要因となっている。そして、これらの経験や知識は、今の研究分野に繋がっている。

90年代以降急速に発展を遂げてきたデジタル機器やインターネットなどの新たなメディア、とりわけ情報メディアの活用によってアートを取り巻く環境が急変することになった。このことにより変容する世界像が「現代美術としての版画」のあり方にも影響を及ぼしているといえる〔註5〕。

これまでアートのメディア性に着目しながら、版表現を用いた作品を発表してきたが、近年とくにその関わりを深めているデジタル化されたイメージ、映像、写真、身体論・認知科学などを対象とする学問的研究にも、それぞれについての再考をうながす課題がある。歴史や今日的な状況をなぞるだけではなく、文脈にとらわれることのない次世代の作家や研究者達がこれまでになかった価値観を提案するように、自らが新たな目標に挑みたいと思う貴重な機会となった。

最後に私の企画趣旨に賛同し、発表の機会を頂いたギャラリー 16の井上道子氏、専門分野の枠を超えて示唆に富んだ執筆を頂いた茂登山清文氏、中谷至宏氏、撮影からリーフレット作成まで尽力をいただいた浅野豪氏に感謝の意を表したい。

## 概要

展覧会：長尾浩幸展 1985年－1989年の作品

展覧会名英語表記：Hiroyuki NAGAO works 1985-1989

会期：2014年6月10日（火）～6月21日（土）

会場：ギャラリー 16

作品点数：約14点 [インスタレーション（各壁面に1点、計4点）]

入口付近：オブジェ（3点）、ドローイング（2点）、版画作品（5点）

リーフレット発行：A5サイズ、8ページ1000部

撮影／デザイン：浅野豪

テキスト

茂登山清文（名古屋大学大学院情報科学研究科教授）「光と書物、エクリチュールー  
長尾浩幸の四半世紀」

中谷至宏（PARASOPHIA：京都国際現代芸術祭事務局キュレーター）「デフラグの  
手触り」

- [註1] 「版のダイナミズム」中谷至宏 版から  
／版へ カタログ p60-p63 発行：京都市  
美術館 1989
- 2] 第6章芸術系大学における版画教育 長  
尾浩幸 関西現代版画史 p362-p364 関  
西現代版画史編集委員会（編集）発  
行：美学出版 2007
- 3] 「現場」研究会特別編 シンポジウム開  
催報告 web complex 2008

- 4] [座談会] 現代版画の位相—関西からの  
発信 版画芸術90号「版画」の現在地点  
西日本編 発行：阿部出版 1995  
マキシグラフィカ／ファイナル・デイス  
ティネーションズ カタログ 発行：マキ  
シグラフィカ事務局 2008
- 5] 「版画の現在、あらたな批評の場に向け  
て」長尾浩幸「版の時間／age of  
prints」記録集 p68-p69 発行：女子美  
術大学 2013



1. Untitled リノカット、紙  
35.5×24cm 1985



2. Untitled-1160B 個展会場  
ギャラリー 16 1985



3. Carving Blue シルクスクリーン、リノリウム、顔料、  
アクリル絵の具 ギャラリー16 1986-2014



4. Untitled リトグラフ、エッチング、  
アクアチント、紙 74×52cm  
1985



5. 展示作業風景 1989



6. Carving Image ブロンズ鑄造、表面酸化  
125×110×2.5cm 1989-2014



7. Carving Image 部分



8. Carving Image ブロンズ鑄造、表面酸化  
アルミニウム鑄造 ギャラリー16 1989-2014

セゾン現代美術館「堤清二／辻井喬 オマージュ展」  
に参加して

SEZON MUSEUM OF MODERN ART  
Participation in  
“Seiji Tsutsumi/Takashi Tsujii Hommage Exhibition”

岡田 修二

Shuji OKADA



# セゾン現代美術館「堤清二／辻井喬 オマージュ展」に参加して

SEZON MUSEUM OF MODERN ART Participation in "Seiji Tsutsumi/Takashi Tsujii Hommage Exhibition"

岡田 修二

Shuji OKADA

教授（絵画）

Seiji Tsutsumi passed away on November 25, 2013. His pen name as a poet and a novelist is Takashi Tsujii. The special exhibition entitled "Seiji Tsutsumi/Takashi Tsujii homage exhibition" was held at the SEZON Museum of Modern Art where he served as the chief director. Also, the SEZON Museum of Modern Art has published a collection of essays in memory of Seiji Tsutsumi. I was requested by the museum to contribute to the memorial essay collection and to participate in the special exhibition held in his honor.

## 1. はじめに

2013年11月25日、堤清二が亡くなった。詩人・小説家としてのペンネームは辻井喬である。ご存知のように彼は、一時代を築いた流通グループの総帥であると共に、一流の芸術家であり、また偉大な芸術支援者でもあった。セゾン現代美術館の館長である難波英夫によれば、「堤清二の死によって、日本の現代文化の大きな部分が終わったことを感じる」とジャスパー・ジョーンズが伝えてきたということである〔註1〕。本年はこの偉大な人物を追悼するために様々な催しが行われたが、このたび彼が理事長を務めていたセゾン現代美術館では、「堤清二／辻井喬 オマージュ展」と題した特別展が開催された。また、セゾン現代美術館ゆかりの作家達によって寄稿された追悼エッセー集も発刊された。美術館からの依頼で、私もそのエッセー集と展覧会に参加することとなった。

## 2. 展覧会の紹介

少し長くなるが、この展覧会の告知チラシ裏面に掲載されたテキストをご紹介しますと思う。展覧会の趣旨と概要を理解していただくために、これに勝るものはないと思われたからである。

堤清二はペンネームに辻井喬を使い始めた頃からこう記している。「二つの行為（経営と詩を作ること）は本来矛盾するべきものではなく、それが矛盾して感じられるところに、時代の様相がある」と。固定概念を嫌い「実業家と芸術家の和解」

を提言したように、「二つの行為」は自然な行いだっただけで、それにしても堤清二／辻井喬がそれぞれの名前で成し遂げたものは、あまりにも輝やかに鮮やかである。経営者堤清二として、西武百貨店、西友ストア（現・西友）、パルコ、ファミリーマート、西武クレジット（現・クレディセゾン）、無印良品、吉野家等を育て、同時に他方では詩人・小説家辻井喬として、詩集『異邦人』で室生犀星詩人賞、『群青、わが黙示』で高見順賞、長編詩『わたつみ三部作』で藤村記念歷程賞を受賞し、小説においても『いつもと同じ春』で平林たい子文学賞、『虹の岬』で谷崎潤一郎賞、『沈める城』で親鸞賞、『父の肖像』で野間文芸賞他多くの賞を受けている。さらに経営者と詩人・小説家という領域を超えて、1981年に軽井沢に開館したセゾン現代美術館は、まさに堤清二と辻井喬の合作というべきものである。「時代精神の根拠地」という開館宣言は、堤清二＋辻井喬の思想と感性として広く知られるところである。本展は、昨年11月25日に亡くなった堤清二／辻井喬が愛した収蔵作品、身近に置いていた親密な作品、数多くの著書、自筆原稿、言葉等によって氏の創造した世界を展望するものである。

実際の作品展示の様子について少しふれておきたい。オープニングレセプションに招待されたが、残念ながら大学業務と重なり参加できなかった。かろうじて会期終了間際に軽井沢に行くことができたが、妻と二人でプライベートに訪問したため、かえって静かにじっくりと鑑賞できたのはありがたかった。エントランスに入りまず最初に目を引いたのが、1階大展示室への通路部分の壁面を飾った80年代前後の西武百貨店のポスター群である。田中一光や糸井重里を起用して一世を風靡したそれらの広告は今見ても斬新であり、強い力感を発散している。また面白い対比を演出していたのは、そのポスター群の反対の壁面に大変詩情豊かなモダニズムの小品絵画、クレヤミロ、マックス・エルンストなどが展示されていたことだ。この共存こそが堤さんの精神を表していると感じられた。1階の大展示室壁面にはセゾングループ各社のロゴがエンドレスパターンとなって壁紙のように装飾されていて、その大胆な演出に驚かされた。そしてそのロゴの壁紙を背景に多数のモダニズムの絵画や彫刻が展示されていて、再びその対比が興味深かった。2階へ向かうと、中西夏之、宇佐美圭司をはじめとする日本人作家の作品がところ狭しと並べられていて、私の作品「水辺52」もその中に場所を与えられていた。堤清二の盟友である宇佐美圭司は、私が京都市立芸術大学博士課程在学中にてお世話になった恩師の一人である。セゾン現代美術館は宇佐美圭司の作品を多数所蔵しているが、今回は素晴らしいドローイング作品がたっぷり展示されていた。

また会場では、「堤清二／辻井喬さんへ」と題された追悼エッセー集が配布された。横尾忠則、篠原有司男、山口勝弘、磯崎新など堤清二と関わりのある作家達、私を含む総勢26名が寄稿した原稿が美しく編集された小冊子である。



岡田修二《水辺52》油彩、キャンバス 174×348cm 2009年 セゾン現代美術館蔵

### 3. 私とセゾン現代美術館、堤清二と私

私の作家としてのセゾン現代美術館との関わりは、2009年の「ART TODAY 2009 岡田修二・安田佐智種」にて2人展を開催させていただいたのが最初である。その後、作品を収蔵していただくと共に、2010年の「遭遇、カオスにて—伝統・現代・日本・西洋」や、2011年の「ART TODAY 2011 昨日の今日と今日の今日」など数回の企画展に参加させていただいた。そのような成り行きの中で、堤さんとは軽井沢でのパーティや茶会で何度かお会いしたが、せっかくの機会に恵まれたにもかかわらず、ぼつぼつとわずかな会話を交わしたのみで、今となってはそれが少し心残りに思われる。私にとって堤さんは父親ぐらいの年齢で、伝説的な人物と認識していたので、恐縮して言葉少なめになってしまったのである。しかしその僅かなやりとりの中で、堤さんは良質な芸術の必要性を語られていた。そして、まったく気の利いた応答もできない私に、大変優しい微笑を投げかけてくださり、その瞬間のイメージが映像的な記憶となって私の身体に深く残存している。私と堤さんとの思い出はこんな些細なことのみである。

このように堤清二ゆかりの作家として私は極めて新参者であるが、逆に、一般の消費者として私は若年の頃からセゾン文化に大きな影響を受けた。あるいは、大きな影響を受けた世代であるといえる。かつて私が東京で芸大浪人していた頃（70年代の終わり頃）、通っていた美術研究所が池袋の近隣に位置していたため、池袋西武美術館には頻繁に通った。西武百貨店では60年代から先鋭的な現代芸術の紹介がなされていたが、当時もアメリカ抽象表現主義などモダニズム絵画の動向をいち早く示す重要な展覧会が開催されていた。若かった私の意識にはそれらの作品の印象が鮮明に焼きついたことはいうまでもない。また隣の美術書店アール・ヴィヴァンにも足しげく通い、書架に陳列された貴重な画集を手に取り片っ端から立ち読んだ。今思えばまったく迷惑

な客であったかもしれないが、滞在時間は大変長かったと思う。当時、私にとってそこは現代美術に関する最高の勉強の場所だった。私には、日本人であるにもかかわらず、そのような絵画を超えたい、という複雑な思いが芽生え、それが油画を専攻しようとしていた私の創作動機の原点となっているのである。

その後私は、大学院修了後1987年に大手広告会社電通に就職しアートディレクターとなった。私は、絵画制作に関する情熱や、西洋モダニズムを超克したいという意志を捨てた訳ではなかったが、それを成し遂げるためのプロセスとして一度社会に出ることを選んだ。芸術大学という制度体が作り出す特殊な場所に生息していたのでは、時代のリアリティを知り得ないと感じていた。芸術大学で吸収した価値観をとりあえずは総て捨て去り、自らの体で現代社会の中心部分に飛び込んでみなければならないと思ったのである。現実の社会に向き合いながら、そこで戦った経験を元に、改めて芸術の機能や役割を考えたかった。堤清二は1992年にセゾンを引退し、その後大変旺盛な執筆活動をしているが、私も1994年に電通を退社し、絵画の創作活動に魂を注いできた。この私の考え方と行動は、恐れ多い比較をお許しいただくなれば、スケールこそ違えど堤清二における現実と芸術の関係に類似する構造を持っていると思っている。

#### 4. 「鈴あらば 鈴鳴らせ りん凛と」

時は流れた。1980年から起算しても、すでに約35年の月日が経過したことになる。この間に芸術を巡る状況もかなり変化してきた。日本は明治以来、西洋と同じ価値観を持つことが「文明国」となるための必要条件であると考えてきた訳で、いうまでもなく「芸術」も西洋から輸入した制度であるため、芸術と呼ばれるものの規範が総て欧米から紹介され、それらを学習することがまずは第一義的課題であったのは必然的なことである。そしてそれは80年代に至るまで支配的な流れであったと思われる。だが最近はかなり潮目が変わってきたとも感じられる。モダニズムの実験が終焉を迎えると目新しい表現形式も輸入されなくなってきた。つまり情報格差が無くなり、水位が拮抗した今日、それぞれの国々や地域にとってのそれぞれの芸術を構想する局面を迎えているのではないだろうか。

グローバリゼーション、ネット社会、そしてポップカルチャーの隆盛など、確かにパラダイムは大きく変化した。我々がかつて研究したモダニズムの言語は今や顧みられない。がしかし、今日の世界の調和を考えると、芸術のもつ役割の大きさは増大しているのではないだろうか。そしてスポーツなどと同様に、今後それはますます重要なものとなるだろう。なぜならば芸術は、既に世界共通の平和的なインフラであると同時に、それぞれの民族の成り立ちや宗教にルーツを持ち、それぞれの文化の特質を総合的に表し、未来に向けての提言力をもつ可能性、があるからである。

このような今日の状況においても大切なことは堤さんの言葉の中にあるだろう。い

まこそ良質な芸術の必要性について語り合わねばならないのである。芸術が地域振興や国際交流の道具や投機の対象になることを否定するつもりはないが、あくまで大切なのはその内容の問題である。真の芸術には、多様な感受性や価値観のみならず、近代国家の枠組みに対して反社会的・非社会的作用までもが含まれるのであり、正しく大切なものとはその批評的機能であり、批評的精神なのである。

「二つの行為（経営と詩を作ること）は本来矛盾するべきものではなく…」と述べた堤清二の姿勢とは、詩を、そして芸術を現実からの居心地の良い逃避の場所にしないという決意であろう。そこには、人間の生をよりよく取り戻すために、芸術をいかに社会で機能させられるか、現実をいかに変えていけるか、という戦う意志の持続がある。それが堤清二の不屈の精神だと私は思う。

70年代末の池袋を出発点に始まった私の絵画創作の試みは今日も続いている。そんな私の作品をコレクションの末席に加えていただいたことにある種の感慨も覚える。堤さんともっとお話をしてみたかったという思いもあるが、それは叶わぬ夢となった。だが幸いにも私たちには辻井喬の残した多くの言葉がある。彼は私にいうだろう「鈴あらば 鈴鳴らせ りん凜と」〔註2〕と。

展覧会「堤清二／辻井喬 オマージュ展」

2014年7月5日～11月24日

会場：セゾン現代美術館（長野県軽井沢）

主催：一般財団法人セゾン現代美術館

エッセー集『堤清二／辻井喬さんへ』

2014年7月12日 第一刷発行

編集：坂本里英子（セゾン現代美術館）

発行：一般財団法人セゾン現代美術館

〔註1〕 難波英夫. 堤清二という志士. ユリイカ. 2月号. p.97. (2014)

2) 辻井喬. 叙情と闘争. 中央公論. p371. (2012)



# プロジェクト演習授業事例報告

Case Report of a Project Based Learning Class

大草 真弓

Mayumi OKUSA

石川 亮

Ryo ISHIKAWA



# プロジェクト演習授業事例報告

Case Report of a Project Based Learning Class

大草 真弓 Mayumi OKUSA	准教授 (グラフィックデザイン)
石川 亮 Ryo ISHIKAWA	特別講師 (近江学研究所研究員)

2014年度の「プロジェクト演習」では、デザイン・カテゴリーの『イベントのPRデザイン』とプロデュース・カテゴリーの『イベントのデザインプロデュース』の2つの授業を担当した。本稿では、後者の『イベントのデザインプロデュース』授業の事例を報告する。

## 1. はじめに

2013年度までの「プロジェクト科目」では、地域系イベントの広報・広告デザイン分野を中心に、具体的な依頼に対するデザイン提案、コンペティションへの参加を行ってきた。2014年度は、この内容を『イベントのPRデザイン』で継承し、新たに『イベントのデザインプロデュース』授業を追加し、依頼に対して何をデザインすべきか、どのようなアプローチが効果的なかを考えるところからスタートし、学生が依頼者と一緒に考えていくタイプの共創的デザインワークに取り組んだ。

## 2. 事例1「肺のチカラゲームのデザイン」

2013年度に、滋賀吸入療法推進フォーラム(SKRF)からの依頼で、薬局で喘息とCOPD(慢性閉塞性肺疾患)に対する吸入療法を啓発・普及させるためのポスター、パンフレットを制作した。その後、活動内容をお聞きするうちに、大学祭や地域イベントなどで「肺のチカラ」を測定するゲームを実施し、喘息やCOPDの潜在患者さんを発見し、早期治療につなげようとしている活動を知った。そこで、デザインで貢献できることがないかを探すために、滋賀医科大学で開催されていたイベントに参加した。

私たちは、医師や薬剤師によって全て手作りで制作されたイベント会場の写真を撮影するところからプロジェクトをスタートさせた[写真1]。

学生にこれらの写真を見せ、下記の観点から何をデザインすべきか、何を足して何を引くのかを考えてもらった。

- ・どうしたらイベントを盛り上げることができるのか
- ・どうしたらこのイベントを通じて滋賀吸入療法推進フォーラムが実現したいと考えている目標に対してデザインで資することができるのか



写真1 プロジェクト開始前のイベントの様子

具体的な指示がないことに対して最初はとまどっていた学生たちも、手を動かしたり資料を集めたりするうちに、しだいにどのアイテムからスタートしたらよいか、与えられた時間の中でどのように分担するのかを考え始めた。その後SKR（滋賀吸入療法推進フォーラム）の医師／薬剤師にもミーティングに参加していただき、現場の声を聞きながらデザインを進めていった。

最終的にできあがったのは、ビーズ飛ばしゲーム用のバックシートとターゲットとなるカゴ、ゲームのルール説明パネル、立ち位置を判定するためのパネル、当日の案内・誘導のためのチラシ・ポスター、喘息・COPDの啓発ポスター、景品コーナー用の表示パネル、一式を収納するケースなどである〔写真2〕。これらのツール類は各地のイベントでも好評で、SKR（滋賀吸入療法推進フォーラム）代表の小熊哲也氏（滋賀医科大学）が日本呼吸ケア・リハビリテーション学会で発表されたところ、「ぜひ使いたい」という声が各地で上がっているそうである。



写真2 制作した「肺のチカラ」ゲーム用のツール類

### 3. 事例2「大津ジャズフェス街歩きポスター」

大津ジャズフェスティバル実行委員会から依頼されたポスター制作は、2012年からスタートした。3年目となる今年も『イベントのPR デザイン』でこれまでと同様に学生コンペというスタイルでポスターを制作した。コンペでは7月までに採用案が決定するが、イベントが開催されるのは10月中旬であり、大津祭や学園祭の時期と近いこともあって、実際にイベントに参加する学生は少ないのが残念なところである。ポスター制作時には、ジャズそのものに触れるために音源をあたったり、大津ジャズフェスティバルの雰囲気を知るために前年度の写真を見たり、あるいは、実行委員会の方々から意気込みや特徴をお話していただいたりするのだが、体感していないイベントのようすを想像するのはなかなか難しく、「ジャズフェスティバルのポスターとしてはOK なんだけど、大津ジャズフェスティバルの雰囲気とはちょっと違う……。」という評価をいただくデザイン案もでてしまう。

そこで今年は、『イベントのデザインプロデュース』の授業で、大津ジャズフェスティバルに触れることを主眼とした課題を出すことにした。この課題は2つの要素で構成した。

1. イベントを観察してデザイン上の問題点を探索し、写真撮影してくる。

次のポスター制作時には、ここで見つけた問題点を解決するようなデザイン

をポスター案とともに提案するためのベース資料とする。

2. イベントの参加者や運営者にインタビューし、撮影許可を得てから写真を撮り、その写真とインタビュー内容をもとに、ジャズフェスに関わる人がうれしくなるようなポスターを制作する。

2. に関しては、電通が大阪商工会議所と連携して取り組んだ「文の里商店街ポスター総選挙」を参考にした。

当日はスタッフ証を用意し、またイベント主催者からお借りしたスタッフTシャツを着用して取材に臨んだ。最初はなかなか声を掛けることのできない学生もいたが、フェスティバルの明るい雰囲気の中でしだいにリラックスしてインタビューができたようである。

後日、実行委員会のメンバーにご来校いただいてプレゼンテーションを行った際も、自分が作成したポスターの説明をする学生が全員非常に楽しそうであった。いつもは緊張して手元資料を見ながら発表している学生が、顔をあげていきいきと語っていた。ポスターは実行委員会の皆さんにも好評であった。次回の公式ポスターのデザインがどう変わっていくか楽しみである。





映像作品「水流Ⅳ」の制作報告

The Making of the Video “The Stream 4”

映像作品「水流Ⅴ」の制作報告

The Making of the Video “The Stream 5”

櫻井 宏哉

Hiroya SAKURAI



# 映像作品「水流Ⅳ」の制作報告

The Making of the Video “The Stream 4”

櫻井 宏哉  
Hiroya SAKURAI

教授（映像）

In the manmade waterways of rice paddies, the water in nature must follow artificial rules. In that way, nature is made abstract, giving rise to a new form of beauty distinct from the natural state. The theme of this work is the liveliness of the water as it follows a manmade course. It is like a musical, using the sound movement of the flowing water. Bubbles, waterweeds, fish and floaters are the performers. A waterproof camera was put at the bottom of a river, and the lens was pointed toward the sky. This composite video image communicates both the diversity of expression and the liveliness of the water.

## 1. 「水流Ⅳ」について

前作「水流Ⅲ」までは、撮影対象である水流と距離を隔てて撮影する手法を用いた。「水流Ⅳ」は防水仕様のカメラを用い、対象である水流という、被写体内部から撮影を行う。水田内の水が、透明な水に対して、その存在を表すのは、水の中に現れるさまざまな現象である。揺れる水草、移動する小動物、気泡などにより水の存在を伝えることができる。したがって、それら被写体を媒介として水流の多様な姿と躍動感を表現した。

防水仕様のカメラは川底に置かれ、レンズは空に向けられ撮影を行った。被写体の泡、水草、魚、浮遊物は、パフォーマーとして演出される。[図1]



図1 「水流Ⅳ」素材：映像 再生時間：5分40秒 制作年：2014年  
所蔵：櫻井宏哉（撮影：櫻井 宏哉）

## 2. 撮影

### 2.1 撮影場所

宇治市巨椋池（おぐらいけ）干拓田（宇治市伊勢田町東遊田と北遊田地内）の水田を囲う灌漑用水路や水田の水中を撮影している。[図2] [図3]



図2 撮影場所：宇治市巨椋池干拓田  
（撮影：櫻井 宏哉）



図3 撮影した水口の1つ（撮影：櫻井 宏哉）

### 2.2 撮影機材

機材：オリンパス STYLUS TG-3 Tough 1台 録画データ：MPEG4 1920×1080pix 29.97p

設定：三脚に固定せず、レンズをほぼ垂直に水面に向け撮影。

### 2.3 撮影内容

この撮影の特徴として二つある。ひとつは、水底から水面に向けた撮影方向であるため、水面からカメラレンズの間にある被写体が撮影される。そのため水中に生息する生物は真下から撮影されている。また被写体が無い場合は空が撮影される。

二つ目は、空からの光が射してくるため、被写体は逆光の中で捉えられ、被写体の多くは透過した状態で捉えられている。

以下、この作品で撮影された被写体について述べる。

#### ・気泡

映像：気泡は二種類あった。水の流入時に発生する気泡と、一定の時間水中に留まる静止した気泡である。空が背景のため泡の形態が晴天の場合、青い無背景に透過光を伴い明快に気泡の形が映像化されている。

音響：音響は生じない。

・水の流入時に発生する気泡

映像：水田には灌漑と水田を結ぶ水口がある。水田側の水口の直下には数センチから十数センチの窪みがある。水口から水田の水面に水が落下した際、窪みの中に水泡が発生するが、その窪みの底にカメラを配置する。

音響：水が空気を伴い落下し、気泡が生まれ水面で弾ける音響。

・一定の時間水中に留まる静止した気泡

映像：水田の水面下の植物などから酸素が発生し、泡となり水面上に泡の集合となる。留まる泡もあれば、水流に流される泡もある。この作品の軸となるゆっくりとしたスピードで流れる水面の映像では一定の位置に留まった泡の集合が水平に移動する。

音響：音響は生じない。

・水草

アオミドロは撮影時に灌漑に水面から水底まで繁茂していたので、カメラをアオミドロの中に沈め、その周囲の情景を撮影した。

ウキクサについては水田面を覆っている葉の真下にカメラを配置した。太陽から射す光が浮き草を透過する様子を撮影された。

・動物

淡水魚は灌漑や河川におり、ヌマムツ等が見られた。ヌマムツを河川の水底30cmほどから撮影している。背後が空になるため、空を浮遊するような構図となった。

メダカは水田中におり、水口の真下は酸素の気泡があるため多くの数が生息していた。静止しては泳ぐ動きがこの作品のミュージカルのパフォーマーとして際立っていた。

アメンボもまた、水面上を移動する独特のふるまいのためパフォーマーとしての存在感があった。水流に対し逆方向を目指すため、水流の方向や動きを表す役割を担った。

カイミジンコ、体が貝殻のような形をしており、蛇行しながら泳ぐ。撮影時はメダカと同じ場所だったため、形、動きとも対比が生まれ効果的だった。

### 3. 編集とシークエンスの構成

#### 3.1 編集

水の躍動を印象付ける効果的な映像を収集しミュージカルのように構成した。ミュージカルとは、第一次大戦後アメリカで独自の発達をとげた、音楽・舞踊・演劇を巧みに融合させた総合舞台芸術である。『大辞林』より

この作品を歌がともなった台詞のある演劇に見立てて表現した。撮影時に収録された水の音を台詞を伴った旋律に見立てて構成した。撮影された被写体が音が発生するのは、水の流入時に発生する気泡であるため、これら素材を主なイメージ、音響として多用している。

その他は水中は原則的には、無音である。小さな音量で環境音が水中に届くがそれも少ない数だが利用している。

### 3.2 シークエンスの構成

5分39秒のうちタイトルやエンドクレジットを除く作品の再生時間は5分02秒である。この全体を3つのシークエンス（章）で構成する。

各節に分かれ、水の躍動感の多様性を表す。その節はさらに2つの内容で構成されている。節の後半の内容を導く前半には水泡の音による。旋律が用意されており、節と節を結ぶ仲立ち、あるいは次の内容への序曲としての役割を与えられている。

以下はその詳細である。時間表記について秒以下の単位フレームは四捨五入で秒換算。

第1章 泡と音響を伴う水流	: 138秒
1) 1節 速い／少ない／泡	: 33秒
2) 2節 速い／多い／泡	: 19秒
3) 3節 速い／大きい／泡	: 16秒
4) 4節 速い／小さい／泡	: 20秒
5) 5節 速い／中程度／泡	: 22秒
6) 6節 速い／小さい／密集／泡	: 27秒



図4 シークエンスの構成 泡と音響を伴う水流  
4節 速い／小さい／泡（撮影：櫻井 宏哉）



図5 シークエンスの構成 泡と音響を伴う水流  
5節 速い／中程度／泡（撮影：櫻井 宏哉）

第2章 泡と音響を伴わない水流	: 137秒
1) 1節 遅い／粒子状の浮遊物と魚	: 31秒
2) 2節 遅い／メダカとカイミジンコ	: 23秒

3) 3節 静止／アオミドロ : 42秒

4) 4節 静止／ウキクサ : 41秒



図6 シークエンスの構成 泡と音響を伴わない  
水流 2節 遅い／メダカとカイミジンコ  
(撮影：櫻井 宏哉)

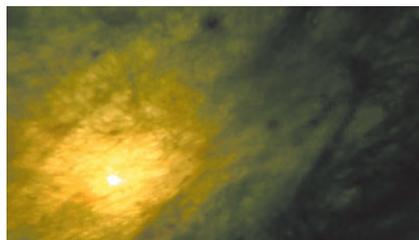


図7 シークエンスの構成 泡と音響を伴わない  
水流 3節 静止／アオミドロ (撮影：櫻  
井 宏哉)

第3章 泡と音響を伴う水流 : 33秒

1) 1節 速い／アメンボと枯葉 : 33秒

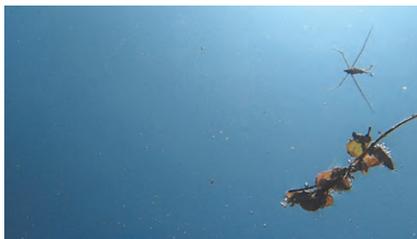


図8 シークエンスの構成 泡と音響を伴う水流  
1節 速い／アメンボと枯葉 (撮影：櫻井  
宏哉)

#### 4. 作品発表

「水流Ⅳ」(The Stream 4) は以下、3つの映画祭で発表された。

映画祭名：se23.mov

会場：The Montage Gallery, London, U.K

会期：2014年7月23日（水）－8月4日（月）

映画祭名：VIDEOFEST2K14, Bienal Internacional de Video y Cine Contemporaneo

会場：TEATRO DEL ESTADO（州立劇場）, Mexicali, Mexico

会期：2014年11月3日（月）－21日（金）

映画祭名：18th International Underwater Film Festival

会場：The Yugoslav Film Archive, Belgrade, Republic of Serbia

会期：2014年12月20日（土）－22日（日）

# 映像作品「水流V」の制作報告

The Making of the Video "The Stream 5"

櫻井 宏哉  
Hiroya SAKURAI

教授（映像）

In the man-made waterways of rice paddies, the water in nature must follow artificial rules. In that way, nature is made abstract, giving rise to a new form of beauty distinct from the natural state. This work is a ballet using the sound and the movement of the algae and water. With the waterway as the theater, I filmed the choreography of the algae that flows in the water. The theme of this work is the liveliness of the water as it follows the man-made course.

## 1. 「水流V」について

「水流V」は防水仕様のカメラを用い、水中撮影を行う。水田内の水は、透明なため、映像によって水の存在を表すのは、水の中に現れるさまざまな現象である。今回は水流を伝える藻を撮影の被写体として、水流の躍動感を表現した。

カメラは水路の幅中央、高さも水深のほぼ中央に配置され、水が流れてくる方向にレンズを向けて撮影されている。なお藻の名称は「アオミドロ」である。[図1]

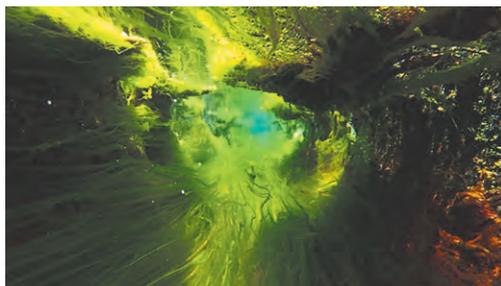


図1 「水流V」素材：映像 再生時間：5分10秒 制作年：2014年  
所蔵：櫻井宏哉（撮影：櫻井 宏哉）

## 2. 撮影

### 2.1 撮影場所

宇治市巨椋池（おぐらいけ）干拓田（宇治市伊勢田町東遊田と北遊田地内）の水田を囲う灌漑用水路を撮影している。[図2] [図3]



図2 撮影場所：宇治市巨椋池干拓田  
（撮影：櫻井 宏哉）

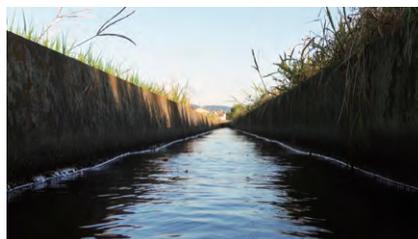


図3 撮影した水路（撮影：櫻井 宏哉）

### 2.2 撮影機材

機材：オリンパス STYLUS TG-3 Tough 1台 録画データ：MPEG4 1920×1080pix 29.97p

設営：水路の幅中央、高さも水深のほぼ中央に配置され、水が流れてくる方向にレンズを向けて撮影されている。カメラは水準器をつけた高さ20cm ブロック上に配置された。

### 2.3 撮影内容

- ・藻を水流の正面から撮影

コンクリート製水路の内側に藻が糸を束ねたように密生している。またその範囲も数十メートルの長さの水路に沿って繁茂している。水路の中央にカメラを固定し、水流の正面から撮影すると放射状に糸状の藻が広がっている構図をとらえる。

水の透明度によるが、手前数センチから十数メートルまでが構図に納まる。

この構図で人為的に行った演出がある。水路の藻を壁面から細長い棒で分離させ、流す演出である。カメラの位置から5mほどの位置で分離された藻は水流の中で複雑に形を変えながらカメラのレンズを横切る。この時、藻のサイズは認識できないくらい小さな点からレンズ直前の画面全面を覆うサイズまで変化する。

- ・藻を水底より水流に方向に垂直に撮影

画面の水平方向に糸状の藻が平行に重なりあって逆光で撮影される。色は緑色から

黄土色にかけて複数の色彩があった。

生育の課程で色彩や質感も変化している。撮影を開始した6月下旬の若い状態は黄緑で質感も張りがあるが、7月中旬には色彩が深い緑色から茶色ががり、張りを失った質感になる。

・ 水流がほとんど失われた状態での撮影

水路の水の配水は午後12時より止まる。水流を失った藻は重力により下に垂れるような形になる。しかし配水停止後しばらくは完全に静止せず、ゆるやかな水流の中でただようように動く。

### 3. 編集

#### 3.1 編集の概要

藻の成長の段階に応じた水草本体の状態と振る舞いを主軸に見せる。また音響もその段階を象徴するよう、同時録音の音響を編集ソフトのイコライザーで周波数の強調、省略を行った。

#### 3.2 シークエンスの構成

5分10秒のうちタイトルやエンドクレジットを除く作品の再生時間は4分51秒である。この全体を3つのシークエンス（章）で構成する。

以下はその詳細である。時間表記について秒以下の単位フレームは四捨五入で秒換算した。

第1章 幼年期	: 45秒
1) 1節 水底に繁殖する少量の藻体	: 27秒
2) 2節 水底と側面に繁殖する藻体	: 18秒



図4 シークエンスの構成  
水底に繁殖する少量の藻（撮影：櫻井 宏哉）



図5 シークエンスの構成  
水底と側面に繁殖する藻（撮影：櫻井 宏哉）

- 第2章 壮年期 : 161秒
- 1) 1節 流れる少量の藻 : 73秒
- 2) 2節 流れる大量の藻 : 88秒



図6 シークエンスの構成  
流れる少量の藻 (撮影: 櫻井 宏哉)



図7 シークエンスの構成  
流れる大量の藻 (撮影: 櫻井 宏哉)

- 第3章 老年期 : 86秒
- 1) 1節 壁面から分離する藻 : 19秒
- 2) 2節 水流が止まり減速する藻 : 17秒
- 3) 3節 静止しつつある藻 : 50秒



図8 シークエンスの構成  
壁面から分離する藻 (撮影: 櫻井 宏哉)



図9 シークエンスの構成  
水流が止まり減速する藻 (撮影: 櫻井 宏哉)



図10 シークエンスの構成  
静止しつつある藻 (撮影: 櫻井 宏哉)

#### 4. 作品発表

「水流V」(The Stream 5) は以下の映画祭で発表される。

映画祭名：The 58th San Francisco International Film Festival

会期：2015年4月23日（木）－5月7日（火）



紙コップ積み上げアート・ワークショップ

Art Workshops: Stacking Paper Cups

島先 京一

Kyoichi SHIMASAKI



# 紙コップ積み上げアート・ワークショップ

Art Workshops: Stacking Paper Cups

島先 京一

Kyoichi SHIMASAKI

准教授（障害学・芸術学）

Since 2012, I have carried out several art workshops in which participants tried to stack paper cups for children and their family. All of workshops I held were filled with smiling faces and the pleasure of the participants. In this paper I will report on the process of these workshops and try to make clear the reasons for the pleasure the participants felt. There could be fundamental desire when someone tries to stack something and desire can arise between human instinct and cultural intellect.

## 1. はじめに

私たちは2012年より、数千個から数万個に至る大量の紙コップを用意し、参加者にそれらを自由に積み上げてもらうという、きわめて単純明快なアート・ワークショップを展開してきた。紙コップを積み上げるという素朴な行為は、しかしその素朴さ、単純さからは説明することができないような、参加者のあふれるばかりの笑顔を引き出してきた。本報告では、参加者の笑顔の根底にあるものを探り出すことを目指す。そして、世界中で見ることができるモノを積み上げるという行為の、根底にある文化的な意味について考察していく。

紙コップを積み上げて楽しむという行為は、もちろん私たちの独自の発想ではなく、多くの人びとが企画し、実践している。実際、ウェブ上で「紙コップ・積み上げ」というキーワードで画像検索を行うと、日本国内だけでも大量の画像がヒットする。これらの画像の多くは、おそらく幼稚園児をはじめとする子どもたちが主人公である。まず、紙コップを積み上げて楽しむという誰もが思いつき実践できる行為に、アート・ワークショップという少しばかり思い上がった呼称を用いることについて、弁明しておきたい。私たちが私たちの企てをあえてアートと呼ぶことの根拠は、大きくは2点に集約できる。一つは私たちの企てにうかがうことのできる非日常性であり、もう一つは無目的性、ないしは無意味性である。

私たちのワークショップに非日常性をもたらしてくれる最も大きな要因は、私たちが用意する紙コップの常識を超えた大量性に求めることができる。最初に記したように、私たちは1回のワークショップにつき、数千個から数万個の紙コップを投入するが、まず参加者たちは、数量的な認識をはるかに凌駕する大量の紙コップを目にして、驚き、あきれ、そして日常生活の中では感じることのない期待感を抱くことになる。アートがその体験者にふだんの生活とは異なる時間の経過をもたらすものであるとす

れば、私たちの企てにはアートと名乗る資格がまずは生じるといえよう。

ワークショップの開始にあたって私は参加者たちに、できる限り高く紙コップを積み上げるように呼びかける。しかし紙コップを高く積み上げることに、何らかの具体的な目的ないし意味はない。あえていえば、高さを競うというスポーツのような競技性という目的が窺えるかもしれない。しかし、多くのスポーツが何らかの具体的な目的をもった動作や行為を純化し、数値化できるような抽象化によって成立していることを考えると、紙コップの積み上げの中に何らかのスポーツ性のような目的を見出すことには無理があるといえよう。紙コップを高く積み上げることには、生活上の機能的な目的性や意味性を見出すことはできない。具体的な目的や意味を追求せず、視覚的な快や身体的な楽しさを求めること、このことも私たちの企てにアートの呼称を与える根拠とすることができよう。

もちろん、紙コップが整然と積み上げられた光景が単純に美しいということもある。そして一瞬のことではあるが、積み上げられた紙コップが流れるように崩れ落ちるようすも、意外なほどに印象的な映像体験として目撃できた人の記憶に残る。これらのように私たちの企ては、表層的にもアートとしての可能性をもっているのである。

## 2. 「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」と「みんなで作るアート・インスタレーション」

「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、2010年より展開してきた「みんなで作るアート・インスタレーション」の考え方の一部を継承している。「みんなで作るアート・インスタレーション」についてはこれまでいくつかの機会を利用して報告してきたが〔註1〕、本節では「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」との関わりにおいて重要なポイントを概観しておきたい。

「みんなで作るアート・インスタレーション」は、実際の制作方法は「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」同様、簡単明瞭である。制作会場に大量の帯状の日用品やそれらに結び付けることのできる素材を持ちこみ、空間内の突起状の形状や柱等を利用して、室内（時に室外）にそれらを張り巡らすというものである。完成したインスタレーションは、写真撮影や内部空間体験のために20～30分の間そのままに置かれ、そののち参加者全員によって撤去される。

「みんなで作るアート・インスタレーション」の第一のポイントは、参加にあたって技術的な制約がほとんど存在しないことである。老若男女を問わず、あるいは障害の有無、そして障害の程度もほとんど問わず、ほぼすべての人が参加することができる。〔註2〕このことは以前の報告においても述べたように、「みんなで作るアート・インスタレーション」が、私の担当している地域交流を目的とした社会貢献型の演習における、地域の特別支援学校と成安造形大学との交流活動を原点としていることと関係があった。

特別支援学校との交流活動に着手したころは、ものづくりワークショップにおいて

美大生が特別支援学校の児童や生徒を指導するという、支援を目的とする活動を中心としていた。しかしある時点から私は、平均者である大学生が、障害者である児童や生徒を指導するという、平均者と障害者の間の階層性の存在が気になり始めたのである。ものづくり指導における階層性の存在は、ワークショップに能力主義という優生思想にもつながりかねない危険な感性の侵入を招来する可能性を秘めていたからである。ワークショップから能力主義的な感性を排除するために私がとった戦略が、誰にでもできること、そしてその成果の中に個人差が現れにくいような動作を制作活動の中心に据えることであった。

「みんなで作るアート・インスタレーション」の第二のポイントは、特定の空間に日用品を大量に持ちこみ、それらをその空間に張り巡らせることによって、室内（時に室外）の景観を一時的にはあるが劇的に変えてしまうことにある。そしてそのこと以外には、何らの目的も意味も持っていない点も重要である。景観の一時的な改変というアイデアは、もちろん、クリストとジャンヌ＝クロード Christo and Jeanne-Claude によるラッピング・プロジェクトに触発されたものである。しかしここで重要なのは、現代美術について全く知らなくても、見る間に景観が変化していく状況に対して参加者全員が、他の行為では得られないであろう楽しさを感じることができる点である。参加者全員にとって等しく無目的で無意味な行為が、同じく参加者全員に等しく楽しさをもたらしてくれる。このことも、「みんなで作るアート・インスタレーション」が、平均者と障害者の境界を無意味化する意義を担っていることを表している。

「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、「みんなで作るアート・インスタレーション」の特徴の一つであった、材料の大量性は引き継いでいる。しかし、「みんなで作るアート・インスタレーション」に見られた、技術的制約をできる限り排除することによってできる限り多くの人がびとに参加してもらうという、参加の開放性は、やや性格を変えて継承することになる。また後に詳しく考察するが、両者とも基本的なアイデアの少なからぬ部分を現代美術に負っているという点は、共通しているのである。

### 3. 紙コップ積み上げアート・ワークショップの実際

私たちはこれまで、11回の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」を行ってきた。本節ではそのうちの10回の実施について、報告する。〔註3〕

#### 3.1 成安幼稚園「おもしろびっくりアート」

最初の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、2012年12月14日の午前10時15分から11時30分にかけて、京都府向日市にある成安幼稚園のホールで実施された。参加者は、幼稚園児（5歳児）約60名、幼稚園保育士5名、成安造形大学生8名、そ

して報告者である。また園児の保護者約50名による、園児の作業の補佐という形での部分的な参加もあったが、中には園児以上に夢中に取り組んだ保護者もいた。用意した紙コップは、8,640個である。

この回のアート・ワークショップは、2002年から継続して行ってきた、私が大学生を伴って幼稚園を訪問し、園児たちとともにものづくり遊びに取り組む、「おもしろびっくりアート」の一環として実施されたものである。最初の頃の「おもしろびっくりアート」は、私が課題のすべてを計画し、それを学生たちに伝えた後に実施していたが、最近では、特にこの取り組みを「プロジェクト演習」という名称で単位の認定を伴う授業として実施するようになってからは、できる限り学生諸氏からアイデアを募るようにしている。この時も、園児たちに大量の紙コップの積み上げに取り組んでもらうというアイデアの最初の発案者が学生か私かは忘れてしまったが、決して安価ではない8,640個の紙コップ（約3万6千円）の購入の決断に至ったのは、打ち合わせの段階における学生諸氏と私の間の相互の扇動があったことを記憶している。

前節で取り上げた「みんなで作るアート・インスタレーション」の中でも、2010年8月の障害児のための夏季休暇活動支援「大津市北部サマースクール」において、公民館の部屋中にトイレット・ペーパーを張り巡らせるという、やってはいけないはずらと、アート活動の、ぎりぎりの境界線上にあるようなインスタレーションを実施したが、その時も打ち合わせの段階での参加学生と私のある種の煽り合いがあった。私の活動において学生諸氏の果たす役割は、単なる協力者や助手以上のものがある。本報告において主語が「私」と「私たち」と二通り現れることの背景には、このことがある。

私たちは園児の入室以前に、19段からなる三角形一列積みの積み上げをあらかじめ準備しておいた。[写真1] 三角形一列積みとは、写真1からもわかるように、一列に直線状に並べた紙コップの上に、2個の紙コップの間に1個を積み上げていき、全体が三角形を構成するような、おそらくは最も基本的な積み方のことである。この積み方は、視覚的には最も整然とした印象を与えるが、しかしさまざまな理由により積み上げの途中でさらさらと崩壊してしまうことの多い、脆い積み方である。

入室した園児たちは、私のできる限り高く積み上げるようにという説明を聞いた後に、それぞれに紙コップを積み上げ始めた。最初は全園児が三角形一列積みに取り組んだが、多くの園児が自らの身長と同等か、あるいは慎重を超える高さに積み上げることができた。中には保育士や保護者の助けを借りて、身長をはるかに超える高さに積み上げる園児も現れ始めた。やがては三角形一列積みにもヴァリエーションが現れ始め、曲線を描いてうねる壁が登場した。[写真2・3] ワークショップ終盤には一部の園児が、紙コップを一段目に円形に並べて積み上げていく、円筒積みの技法を発見した。後でも述べるが、この円筒積みの方法は最も安定した積み方の一つであり、それゆえ高く積み上げるためには最も有効な方法の一つでもある。[写真4]

約1時間に及ぶ積み上げを楽しんだ後に、私の合図とともに一斉に紙コップの壁や

塔を崩した園児たちは、後片付けに取り組み始めた。多くの園児や保護者たちが、いかに素早く紙コップを重ねられるかを競い合い、重ねた紙コップの高さを競う園児や保護者も現れた。[写真5]「紙コップ積み上げアート・インスタレーション」では、後片付けの場面が積み上げの本番と同じくらいの楽しさをもたらしてくれることが、最初の取り組みから明らかになった。



写真1 三角形一列積み



写真2 2012年12月14日 成安幼稚園



写真3 2012年12月14日 成安幼稚園



写真4 円筒積み



写真5 重ね上げの高さを競う

### 3.2 「デイセンターすみれ」

2回目の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、2013年1月22日の午前10時30分から11時30分の1時間、大津市坂本にある重度心身障害者のための通所型介護サービス施設、「デイセンターすみれ」（社会福祉法人滋賀夢翔会）で行われた。参加したのは、重度心身障害者・利用者10名、介護職員8名、成安造形大学生1名、そして報告者である。この日の「すみれ」は、利用者、介護職員ともに20代を中心とした、比較的若い人が多かった。私たちは、約2,000個の紙コップを「すみれ」に持ちこんだ。〔註4〕

前回の成安幼稚園における取組とは異なり、会場もそれほど広くはなく、参加者の数も限られており、またデイケアサービス利用者の大半が自らの意志と身体的能力を駆使して紙コップを積み上げることが難しかったこともあり、ワークショップの成果は、その大きさや規模を競うようなものにはならなかった。〔写真6〕

しかし今回たいへん興味深かったのは、介護支援者とサービス利用者の関係に、通常の福祉の現場では見られない変化が起こったことである。先にも述べたように、大半の利用者は自ら紙コップを積み上げることは参加しなかったのであるが、しかし彼女／彼らは介護職員が懸命に積み上げた紙コップを崩すことの方に喜びを見出した。通常の介護の現場にあっては、上下関係ということではないが、支援者が利用者を支えるという意味において上位者としての立場をとり、積極的に声掛けを行い指導的に生活介助を行っていく。しかし、介護職員が懸命に積み上げた紙コップを、いたずら心を満面の笑みにたたえながら崩そうとする利用者は、介護職員に対して完全に優位な立場に立っていた。介護職員たちは利用者たちに、積み上げた紙コップを崩さないようにお願いすることしかできなかったのである。



写真6 2013年1月22日 デイセンターすみれ

### 3.3 北大津養護学校「スプリング・フェスティバル」

私たちは2013年5月25日の午前10時30分から11時30分にかけて、滋賀県立北大津養護学校において、3回目となる「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」を実施

した。この時は、北大津養護学校が地域社会との交流を目的として毎年開催している、「スプリング・フェスティバル」の、ものづくり遊びコーナーとしての参加である。ワークショップに参加したのは、北大津養護学校中学部と高等部の生徒、10名、「スプリング・フェスティバル」来場者のこどもや養護学校の卒業生数名、養護学校教諭5名、成安造形大学生9名、および報告者であった。養護学校から参加してくれたのは、中学部、高等部ともに、比較的軽度の知的障害とともに育っている生徒たちである。用意した紙コップは、約7,000個であった。

学生と私は、生徒たちに一目でワークショップの概要を理解してもらうために、生徒たちの来場の前に、何列かの一列積みをあらかじめ積んでおいた。入場してきた生徒たちは、私たちとの挨拶ももどかしかったようで、始めの号令とともに、夢中になって積み上げ始めた。最初はほとんどの生徒が、私たちが準備しておいた一列積み of 技法に取り組んでいたが、一部の生徒たちはやがて、私たちが想像もしていなかった新しい積み上げ方を開発し始めた。一人の中学部の女生徒は、紙コップを列ではなく四角形の面上に密集させて並べ、その上にまさに立体的に紙コップを積み上げていくという技法を開発した。養護学校の卒業生の一人は、一段あたりに6個の紙コップを用いる、密集度の高い円筒積みに取り組んでいた。女子中学生も卒業生も、実際に紙コップを手に取り並べていくなかで、新しい方法を思いついたものと考えられる。

[写真7・8]



写真7 2013年5月25日  
滋賀県立北大津養護学校



写真8 2013年5月25日  
滋賀県立北大津養護学校

この回の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」において私にとって最も印象的であったのは、ひとりの高等部男子生徒の反応であった。私はそれまでもさまざまな機会を利用して北大津養護学校の児童や生徒たちと交流してきたが、その男子生徒はどんな活動の機会であっても、仲間たちの近くで椅子に座ったまま、たとえ教諭に促されても、ほとんど何もしなかった。しかし彼は今回、椅子には座ったままであるが、自らの意志で紙コップの積み上げに参加していたのである。もちろん、彼が確実に精神的に成長したということもあろう。しかしこのアート・ワークショップには、知的障害ゆえに無気力に陥りがちな少年をも、惹きつける可能性があったのである。

### 3.4 山科中学美術部

2013年6月9日、私たちは京都市立山科中学校で、4回目となる「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」を行った。この回は、前年の2012年より続けられてきた、山科中学美術部と、成安造形大学、教職課程履修学生との交流活動の一環として行われた。実施時間は、午後1時30分から3時まで、参加者は、山科中学美術部生徒、約20名、山科中学校長、同じく美術部顧問の2先生、成安造形大学生3名、そして報告者である。持ちこんだ紙コップの総数は、約10,000個である。

この回の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」で何よりも印象的であったのは、美術部の生徒たちが実に多彩な積み上げの技法を開発してくれたことと、積み上げの成果がただ単に高さを競うのみならず、造形的なおもしろさの追求に向けられたことである。[写真9・10]

彼女／彼らが新たに見出した積み上げの技法をいくつか紹介したい。一つは、一列積みを並行に何列も接触させる形で並べることによって、密集した集積としての安定感を追求する技法である。先にも述べたように、一列積みは最も整然とした美しい積み方ではあるが、主には紙コップの微妙な寸法の違いの蓄積によって、積み上げている途中で突然さらさらと崩壊することが多い。しかしこの技法では、一列積みに見られる透明感は失われるが、複数の一列積みが相互に接触しあうことによって、崩壊の危険性がほぼなくなるのである。また、四角形に面上に並べた紙コップの上に、さらに紙コップの位置を半分ずつずらしながら立体的に積み上げる、先に紹介した養護学校の中学部の女子生徒が開発した技法を、さらに洗練させた、四角形集積積みともいべき技法を開発した生徒たちもいた。さらには、円筒積みの各段の紙コップの数を微妙に変化させることによって、太さの変化する回転体としての積み上げを追求した生徒も見られた。そして、複数の積み方の技法を組み合わせるグループもあった。その結果、造形的にも多彩な成果が表れたといえよう。



写真9 2013年6月9日  
京都市立山科中学校



写真10 2013年6月9日  
京都市立山科中学校

### 3.5 大津市北部サマースクール

2013年8月12日、午前10時30分から11時30分、私たちは「大津市北部サマースクール」において、5回目の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」を実施した。参加者は、サマースクール参加児童および生徒8名（障害児）、サマースクールのボランティア10名（高校生、大学生、および一般）、成安造形大学生4名、そして報告者である。用意した紙コップは、約10,000個であった。この回の特色は、始めて畳の部屋で実施した点にあったが、予想に反して安定しており、木製の床の上での実施と大きな違いはなかった。

この日のサマースクールに参加した児童や生徒たちの障害の種類や程度は、さまざまであった。またボランティアも高校生から30代前半の青年までと、若干の年齢層の開きがあった。多様な人びとの参加があった今回のワークショップは、しかしこれまでの実施と同様、参加者の笑顔があふれ、また積み方や仕上がった形においても、多様な成果が見られた。積み方では、円筒積みのヴァリエーションとして、円弧の上に各段ごとに紙コップの数が減っていく、優雅な技法が現れた。また、三角形の面上に一段目を並べ、その上にずらしながら積み上げていくという、三角形集積積みとも名付けられる技法も開発された。

そしてこの回、私にとって最も印象的であり、またうれしくもあったのは、言葉も獲得できていない重度の知的障害と、重度の難聴という、深刻な重複障害とともに

育っている10代後半の少女が、積極的に紙コップの積み上げに参加してくれた点である。私は、「大津市北部サマースクール」の常連である彼女のここ数年の取り組みを知っているが、おそらくこの回の紙コップ積み上げほど、積極的に参加したことはなかったように記憶している。おそらく紙コップを積み上げることの楽しさは、理性や知性よりも、身体的な直観に訴えかけるものなのであろう。

### 3.6 仰木の里幼稚園

私たちは、2013年11月17日、午前10時30分から11時30分、大津市立仰木の里幼稚園において、6回目となる「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」を行った。今回は、仰木の里幼稚園のPTAの主催によるレクリエーション企画であり、参加者は園児とその兄弟、および保護者、そして成安造形大学生8名と報告者であり、正確な参加者数は不明であるが、おそらく60～70名といったところであろう。用意した紙コップは約10,000個である。

この回は、会場となった教室がやや狭かったこともあり、のびのびと積み上げてもらうことができなかったのは、残念であった。[写真11]しかし小学校高学年の男子とその父親という組み合わせが、積み上げの高さについては最も熱心に取り組むことが観察できたのは、興味深かった。



写真11 2013年11月17日 大津市立仰木の里幼稚園

### 3.7 成安造形大学「スタディスキル実習」

7回目となった「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、これまでのものとはかなり性格を異にする実施となった。これまでは、2回目の「デイセンターすみれ」における実施を除いては、年齢の幅はあるものの基本的には幼稚園児から高校生までの、広い意味でのこどもを対象とした、ものづくり遊びとして行われてきた。しかし今回は、大学1年生を対象とした、成安造形大学の正式なカリキュラムの一環としての実施であった。成安造形大学は2014年度に大幅なカリキュラムの変更を実施したが、それは多様化する入学者の基礎造形力および基礎学習力のある程度、平準化す

ることを主たる眼目としていた。そして今回の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、基礎学習力ならびに社会人基礎力を身につけることを目的とした新科目、「スタディスキル実習」（主担当、千速敏男教授）の最初の3回の課題として実施されたのである。

「スタディスキル実習」は基本的には、新聞記事を用いた学習、共通したテーマによるグループ・ディスカッション学習、国語、数学、英語の基礎力の復習からなる。私たち担当者は、新入生たちにいきなりこのような堅苦しい課題に取り組ませることより、身体を用いた遊び心のある課題を与えたほうがよいのではないかと考え、紙コップの積み上げ、および洗濯バサミの組み上げという、奇妙な実践に取り組ませたのである。課題の主たる目的は、新入生相互の親睦を深めさせること、およびグループワークのさまざまな側面について実践的に経験させることにあった。〔註5〕

2014年、4月11日、18日、そして25日の3日間、午前9時10分から12時、2014年度の1年生、196名が成安造形大学、聚英体育館に集まり、紙コップの積み上げと洗濯バサミの組み上げに取り組んだ。準備した紙コップは、約25,000個である。11日と18日は、6チームに組み分けされた1年生が、それぞれ3チームずつ、紙コップ・インスタレーションと洗濯バサミ・インスタレーションに取り組み、最終日の25日には、6チームそれぞれが、紙コップと洗濯バサミの両者を用いたインスタレーションに取り組んだ。最終日は指導者は一切アドバイスを与えず、学生たちだけでインスタレーションを完成するよう、仕向けた。

紙コップの積み上げに関していえば、さすがに大学生だけのことはあって、これまで報告者が目にしてきた子どもたちの開発したありとあらゆる積み上げの技法は、すべてが現れた。そして高さや大きさという点では、これまでのどの機会をも凌駕するスケール感が達成された。〔写真12〕学生たちの残してくれたミニッツペーパーには、彼女／彼らがこのアート・ワークショップを大いに楽しんでくれたことが記されている。



写真12 2014年4月25日 成安造形大学

### 3.8 びわ湖ホール

8回目、9回目、そして10回目の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、それぞれ主催者や機会は異なるのであるが、参加者の層がほぼ共通し、方法においても共通する点が少なくなかったので、一括して報告する。

8回目は、2014年、4月29日に、クラシック音楽のイベント、「ラ・フォル・ジュルネびわ湖」のこどもを対象としたプログラム、「にゃんばら先生のキッズプログラム」の一環として行われた。毎年私たちは、その年ごとの「ラ・フォル・ジュルネびわ湖」のテーマにあわせて、戸外でのものづくり遊びを提供してきた。2014年は1日目は計画通り戸外での制作ができたのであるが、2日目は前日から悪天候が予想されたため、急遽、室内でこそ実現可能な、「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」に内容が差し替えられたのである。会場は、「ラ・フォル・ジュルネびわ湖」の会場であるびわ湖ホールに隣接する、ピアザ淡海2階の淡海ネットワークセンターである。準備した紙コップは約30,000個、参加者は約30組ほどの親子連れ、成安造形大学生13名、そして報告者で、午前10時の開始から途中、昼食休憩をはさんで午後3時30分まで開催した。[写真13]



写真13 2014年4月29日 ピアザ淡海

9回目の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、2014年8月2日と3日の2日間、「びわ湖ホール・なつフェスタ」の「お楽しみ企画」の一つとして開催された。これは、8回目の「ラ・フォル・ジュルネびわ湖」における「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」を見たびわ湖ホールの関係者からの、開催依頼に基づく実施である。会場はびわ湖ホールのメインロビー内で、8月2日がエントランス・クロック前の一角、そして8月3日がハワイエであり、両日も午前11時から昼食休憩をはさみ、午後3時までの実施であった。用意した紙コップは約30,000個、参加してくれたのは、2日間でおそらくは50組ほどの親子連れ、そしてサポートしたのが成安造形大学生、のべ25名であり、全体の進行管理を報告者が行った。[写真14]

10回目の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、大津市主催の企画、



写真14 2014年8月3日 滋賀県立びわ湖ホール

「びわ湖・こどもアートセッション2014 in 大津」の企画の一つとして開催された。今回も、8回目、9回目のワークショップを見た関係者からの依頼に基づく実施であり、会場はびわ湖ホール小ホールであった。時間は午後1時から2時30分と3時から4時30分の2回で、参加してくれたのは、2回あわせて50組ほどの親子連れであった。準備した紙コップは約30,000個であり、成安造形大学生12名がサポートに当たり、報告者が進行管理を行った。

この3回の実施において、共通する点をまとめておく。

第一に、参加者がこどもを中心とした親子連れであるということが挙げられる。それも、びわ湖ホールや大津市が企画したこどもを対象としたイベントの情報にアクセスして、来場したということ以外に共通項をもたない、不特定の親子連れである。親子連れの参加において興味深いのは、先にも触れたことであるが、積み上げの高さを競うという点においては、小学校高学年の男子と父親が最も熱心に取り組む傾向が窺える点である。特に、多くの父親がある意味では大人気ないまでに、熱意を示していた。これはおそらくは、限界を究めたいという遊び心を伴う挑戦心と、自らのこどもたちに頑張っているところを見せたいという父親としての心理が働いていると思われる。

第二に、参加者のサポートを十数名の成安造形大学生が行ったという点を挙げる事ができる。学生ボランティアによるサポートは、親子連れといっしょに紙コップの積み上げを手伝う直接的なサポートと、同一会場内で学生の手によって紙コップを積み上げる、ある種のデモンストレーションとしてのサポートがあった。学生たちによるデモンストレーションは、参加者たちの積極的な参加と、高さや新たな造形性への挑戦心を引き出す役目を担ったといえよう。

そして第三に、報告者による進行管理によって、ワークショップにある種のイベント性、参加者全員によるパフォーマンス・アートとしての性格を与えることができた点を挙げておきたい。8回目の「ラ・フォル・ジュルネびわ湖」の実施の際に、偶然、即興的に見出したのであるが、ワークショップの終盤、報告者の合図にあわせて、そ

それぞれの積み上げの成果を、積み上げた親子自身の手で崩したのである。特に印象深かったのは、9回目の「びわ湖ホール・なつフェスタ」2日目の1回目のワークショップのエンディングであった。ちょうどその時間帯は、積み上げの会場となったホワイエに隣接するびわ湖ホール中ホールでの、人気音楽パフォーマンス・アーティスト、「明和電機」のコンサートの開場の直前であり、多くの聴衆がホワイエに滞在していた。私たち「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」の参加者は、ある意味で多くの観衆を前に積み上げ崩しのパフォーマンスを実行したのである。一斉に行った後片付けとともに、参加者の一体感を高めた瞬間でもあった。

#### 4. 笑顔の要因・楽しさの根底にあるもの

最初にも述べたように、「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」の参加者たちには、常に笑顔があふれていた。本節では、このアート・ワークショップの楽しさの要因について、技術的要因、心理的要因、造形的要因、およびパフォーマンスとしての要因の4つの視点から考察していく。しかしこれらの要因は、それぞれが独立したものであるのではなく、相互に関わりながら作用しているものと思われる。

##### 4.1 技術的要因

「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」の特色の一つは、「みんなで作るアート・インスタレーション」を支えていた、誰もが等しい能力的な枠組みから参加できるという精神を、厳格さを少しばかり緩めたかたちで継承している点にある。紙コップを積み上げるという行為は、ほぼすべての人が理解し、実行できる、単純明快な営為である。おそらく私たちのワークショップの楽しさの第一の要因は、この技術的な面での入門ハードルの低さに求めることができるであろう。楽しさをもたらしてくれる人間のさまざまな営為の中には、一定程度の技術的な鍛錬を経ないと、楽しさの入り口にすら到達できないようなものも少なくない。しかし私たちの取り組みは、ある程度の身体的自由度と理解力があれば、誰でもがその楽しさを味わうことができるのである。

一方、「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、技術的な入門ハードルの低さとは反対に、紙コップの積み上げ方に様々な創意工夫を凝らし、段階的に技術を発展させていく可能性をも秘めており、自らの技術の熟練を確かめることができるという楽しさも認められる。最も基本的な積み上げ方である一列積みにあっても、直線状の配置を厳密に保持し、紙コップ相互の間隔を等距離に保つことによって、視覚的な均質性を高め、また積み上げの高さに挑戦することができる。円筒積みや集積積みのような、安定した高さを稼ぐことができる積み方も、技術的な創意工夫の成果である。あるいは逆に、視覚的に不安定な印象を与える積み方に意図的に取り組み高さ

を目指すという、ある意味でアクロバティックな成果を目指すような技術への挑戦という方法もあった。この新たな積み方を目指すというマインドセットの背景には、他の参加者を驚かしてやりたいという、競争心もあるように思われる。

新しい技術を開発していくことの楽しさは、後片付けの段階にも現れた。前節3.7で述べた成安造形大学「スタディスキル実習」以降の「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」では、総数25,000個から30,000個の紙コップを導入してきたが、このような個数になると、ワークショップ終盤に見られる、床に散らばるそれらの姿も壮観である。そして報告者の合図とともに参加者は紙コップを重ね合せて段ボール箱に収めていくのであるが、散らばっている紙コップの重ね合せ方に参加者がそれぞれ、できる限り素早くできるように、工夫を始めるのである。他の参加者に、自らが発見した重ね方がいかに優れた方法であるかを語りながら、紙コップを重ね合せていく姿には、発見の喜びと他者と競い合う楽しさが同居していたのである。

## 4.2 心理的要因

「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」の楽しさの要因には、心理的な側面から考えることができるものもある。

第一に、このワークショップには、積み上げの高さを目指すという、きわめて明確な指標があることが挙げられる。もちろん、ワークショップの進行とともに参加者たちは、積み上げの高さ以外にも、積み上げの美しさ、造形的なおもしろさ、ユニークな積み上げ技法の発見といった、さまざまな指標を見出していくのであるが、ワークショップの開始時点において、きわめて明確でわかりやすい指標があるということは、参加者にとって安心して参加するための必要条件であるといえよう。一般的に考えて、明快な方向性や指標が示されない作業に取り組むという事態は、人をいよいよの不安に陥れるものである。高さ以外の指標も、高さの追求という基本的な指標と矛盾するものではなく、ワークショップの目標が重層化し複雑化していく過程で見出されていくものと考えられる。そして高さの追求という指標は、人間の根源的な欲求にかかわるものである可能性もある。

第二の心理的な側面から考えることのできる、「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」の楽しさの要因として、このワークショップが参加者に対してさまざまな意味での達成感をもたらしてくれるという点を挙げるることができる。それらには、高さの追求に対する達成感や造形性の追求に対する達成感といった、直接的な成果にかかわるものもある。また新しい積み方を発見することによる、技術的な熟達感に対する達成感もある。あるいは一列積みにおいて最も顕著に現れるのであるが、辛抱強く慎重に積み上げたことによって成果が得られた場合の、自らの忍耐力に対する達成感ならびに満足感もあろう。そしてこのワークショップの最大の魅力の一つは、そのようなさまざまな達成感が、比較的短時間で気軽に得られることであろう。

第三の心理的な側面から考えることのできる楽しさの要因として、ある意味で達成感の獲得と矛盾する要素を挙げることもできよう。それは、これもまた一列積みにおいて最も頻繁に起こることなのであるが、紙コップの積み上げが何らかの理由で崩壊した時に感じる悔しさと、その悔しさを乗り越えて再び取り組もうとする挑戦心である。先にも指摘したように、一列積みは、紙コップの寸法のばらつきをはじめとして、ちょっとした空気や床の振動、あるいは不慮の接触などのさまざまな理由により、一か所の崩壊の原点から流れるようにさらさらと崩壊現象が広がっていく。その崩壊するさまは、ある意味で息をのむほどきわめて美しい。しかし忍耐強く積み上げてきた当事者にとっては、その崩壊現象が美しいだけに悔しさもひとしおのものとなり、さらなる挑戦心をかき立てることとなるのである。

そしてもう一つの心理的な側面から考えられる要因としては、これは大学生以上の大人に当てはまることなのであるが、「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、童心に帰ることのできる貴重な機会であるという点を挙げるができる。紙コップの積み上げは、いわば一種の積み木遊びである。積み木は乳幼児のための知育玩具として、おそらくは世界中で楽しまれているものと思われる。紙コップを積み上げる作業は簡単ではあるが、積み木遊びよりは慎重さや忍耐力を必要とする。すなわち、大人のための積み木遊びとしての適度な困難さを有しているのである。前節において、父親と小学校高学年の男子という組み合わせの参加者が、最も熱心に高さを競う傾向があり、時に父親の方が夢中になってしまう事例も少なくなかったことについてふれたが、そのことの理由もこの点にあるとも考えられよう。

### 4.3 造形的要因

紙コップの積み上げが大人をこどもに帰してしまう、積み木遊びであることについて述べたが、しかしこの積み木遊びは、通常の積み木に比べると安定感も低く、また造形的な制約も多い。しかし制約が多いからこそ、制約を乗り越える新たな可能性に挑戦する心理が働くともいえよう。そして山科中学美術部や成安造形大学「スタディスキル実習」の実例でも明らかなように、多彩な造形的成果が得られた。[写真9・10・12]

そして多彩な造形的成果が得られたことの背景には、生徒や学生たちの造形に対する関心の高さとともに、私たちが用意した、常識をはるかに凌駕する紙コップの大量性があったことを指摘しておきたい。というのも、積み上げられた紙コップの数量を正確ではないにしてもほぼ把握できるくらいである場合、一つひとつの紙コップの形、そしてそれらが紙コップであるという意味性は、確実に認識される。しかし、全体の数量が認識できないほど大量に紙コップを積み上げた場合、紙コップ一つひとつの形態や機能は意味を失い、積み上げられた全体が一つの造形物として立ち現われてくる。紙コップの圧倒的な数量は、私たちの活動がアートとして考え得ることの根拠である

と同時に、私たちのワークショップの楽しさの大きな根拠でもあったのである。

また数量の認識を超えた積み上げにおいては、当然ながらその全体のスケール感が、手の届く範囲から身体と同等のレベル、或いは身体を超えるレベルにまで達してしまう点も、非日常的な楽しさを提供してくれることの要因の一つといえよう。おそらく、自らに害を与えないことが自明であるような大きな物体や光景に対峙した時の昂揚感、人間の根源的な感覚の一つであると思われる。そしてまさにそのような巨大な物体をいま現に自らの手で創出しているという感覚は、他では味わうことのできない楽しさをもたらしてくれるのであろう。

#### 4.4 パフォーマンスとしての要因

「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、積み上げた成果を、ある時は一斉に、またあるときには報告者の指示に従って一つひとつ順番に、崩し、そして片付けることによって終了する。そしてこの積み上げを集団的に破壊するというパフォーマンスこそが、私たちのワークショップのクライマックスを形成する時間帯なのである。ほとんどの参加者が歓声を上げながら、満面の笑顔とともに、自らが積み上げてきた成果を勢いよく崩す。その笑顔の根底にあるものについて、考えてみたい。

人間は何かを創造する生き物であると同時に、何かを破壊することの中にも大きな喜びを見出す生き物でもあるらしい。あるいは何かが崩れ落ちるのを目撃する時に、視覚的な興奮を感じる生き物でもあるということもいえそうである。積み上げの破壊の瞬間の参加者たちの笑顔は、そのような人間の根源的な感情の表れであると考えられることができるかもしれない。ジェンガのようなバランスゲーム玩具が世界中で楽しまれているのも、同じような理由に基づいていると考えてよいであろう。なぜ私たちは、ものを壊すこと、あるいは者が壊れる瞬間を目撃することに、快感を覚えるのであろうか。おそらくは、一瞬にして全体が変化してしまう、ある種のカタストロフィーに、非日常性を見出し興奮を覚えるのではないだろうか。崩れ落ちていく紙コップ自体のパフォーマンスそのものに、視覚的なスペクタクルとしての魅力があふれているのであろう。

そして積み上げを崩すのは、その瞬間まで慎重に紙コップを積み上げてきた、当事者である。ある程度の時間をかけて忍耐強く作り上げてきた成果を、一瞬にして無に帰してしまうという、一見、無意味にも思われる行為は、当事者であればこそ許される、特権的な行動である。自らの長時間の努力を一瞬にして否定してしまう、この常識的な価値観とは全く相いれない特異な行動、この中にもまた非日常的でディオニソス的な祝祭性が認められるとあってよいであろう。一瞬にして崩すという参加者のパフォーマンス、そして一瞬にして崩れ落ちるといふ紙コップの自体のパフォーマンス、この両者の共犯性の中にも、私たちのワークショップの魅力の要因の一つがあるとあってよいであろう。

## 5 現代美術における積み上げ・スタッキング・アート・インスタレーション

先にも述べたように、「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」は、「みんなで作るアート・インスタレーション」と同様、その実現のヒントを現代美術のいくつかの思潮から得ている。一つは、マルセル・デュシャンに始まる、既製品をできる限り加工せずに作品化させるレディー・メードの手法である。レディー・メードは、既製品を日常空間から作品空間に転移させることによって、モノのもっている意味を脱文脈化し、脱構築することを狙っているといえよう。私たちがヒントを得た二つ目の現代美術の動向は、クリストとジャンヌ＝クロードによる、風景の一時的改変のプロジェクトである。クリストとジャンヌ＝クロードのプロジェクトは、風景という誰のものでもない社会的な財産の改変を通して、多くの公衆を現代美術の文脈に巻き込むことを、その狙いの一つとしていたと考えられる。私たちの「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」も、大げさではあるが、飲み物を飲むための簡易食器である紙コップを景観の一時的改変のための素材へと変換するという脱構築性を、多くの参加者を楽しみの中で味わってもらおうという意義をもっているともいえよう。

そして、これは私たちのワークショップの直接的なヒントとしてあったわけではないが、同形同質のものや異質のものを大量に積み上げる、いわばスタッキング・アート・インスタレーションともいえるべき作品を発表してきたアーティストたちがいる。そのようなインスタレーションのいくつかについて、見ていきたい。

おそらくスタッキング・アート・インスタレーションの最も早い事例の一つは、クリストとジャンヌ＝クロードが1962年6月27日にパリのヴィスコンティ通りで行った、「ドラム缶の壁—鉄のカーテン、ヴィスコンティ通り、パリ」“Wall of Barrels—Iron Curtain, Rue Visconti, Paris”であろう。[註6] クリストとジャンヌ＝クロードはパリ市左岸の幅、約3メートルほどの最も狭い通路に、89個のドラム缶を円筒の軸が水平方向になるように積み上げ、通路を塞いでしまったのである。クリストとジャンヌ＝クロードにとってドラム缶は重要な素材であるようで、彼らはドラム缶によるスタッキングを数回、行っている。特に1998年には、ドイツにある世界最大規模のガスタンク、ガソメーター・オベルハウゼン Gasometer Oberhausen において、「壁—13,000個のドラム缶」“The Wall—13,000 Oil Barrels”という壮大な積み上げを実行している。布による梱包という、どちらかといえば物質性の薄い素材を用いることが多いクリストとジャンヌ＝クロードであるが、ドラム缶は景観の問題だけではなく景観と物質、そして産業の関係について問いかける、特別な意味をもった素材なのかもしれない。

1988年にターナー賞を受賞したトニー・クラッグ Tony Cragg は、1975年にそのタイトルも「スタック」“Stack”という作品を制作している。[註7] この作品は、木材やブロックといった建築資材、フェルト、ロープ、そして廃棄された雑誌などのさまざまな素材が、さまざまな厚みで水平方向に層状に積み上げられ、全体が一辺が2メートルの正六面体を形成している。クラッグ自身はこの作品について、1992年に次のよ

うに述べている。「私たちの産業社会のオブジェはその物質についての情報をほとんどもち合せないがゆえに、プラスチックのようなものでも実用物として適切であると受け入れられるのであるが、その正体は不明なままなのである。この物質に関する極端なまでの実際的な価値についての神話について、取り組まなければならないことがまだ山のように残されているのである。」〔註8〕現代の都市空間を構成している様ざまな要素が、地層のように積み上げられることによって、都市と考古学、そして地層学を結び付けようとしているようにも見える。

彫刻のみならず映画や絵画などの多彩な分野で活躍しているスロヴァキア出身の彫刻家、マーテジ・クレン Matej Krén は、1994年より膨大な数の書物をレンガ造りの構造物のように数メートルの高さに積み上げる、「ブック・セル」“Book Cell”の連作を、世界各地で発表している。〔註9〕多くの場合これらの構造物には複数の出入り口があり、内部空間に入ることができる。情報の発信源としての書物は、しかし「ブック・セル」の連作では、建築的構造素材として内部が密閉され、情報のアーカイブとしては存続し続けるが、それらから情報を読み取ることはほぼ不可能である。クレンの壮大な積み上げは、壮観な印象のみならず、情報と都市空間についてのさまざまな問いかけを誘発しているのかもしれない。また、カナダ出身のマルチ・メディア・アーティスト、トム・ベンシュテン Tom Bendsten も、大量の書物を積み上げる連作を、1997年より「増大」“Augment”というタイトルにより、また2003年以降は「会話」“Conversation”というタイトルによって、発表している。

政治的な活動や発言でも知られている中国のアーティスト、アイ・ウェイウェイ (艾未未) Ai WeiWei は、壮大な数の伝統的な形式のいすやテーブルを組み合わせるインスタレーションを制作しているが、彼は2003年より複数の中国製の自転車を組み合わせ、「自転車よ、永遠に」“Forever Bicycles”というインスタレーションの連作を、世界各地で発表している。〔註10〕用いられる自転車の数は、時に数千台に上ることもある。多くの場合、規則正しく幾何学的に積み上げられた自転車は、複数の自転車の車輪をはじめとする様ざまなパーツが重なり合うことによって、一台一台の自転車の形態は、遠くからは把握できない。むしろ自転車の集合体が、誰も見たことのないような近未来都市の風景のようにも見える。しかしアイ・ウェイウェイはあるインタビューの中で、貧しい中国の大衆にとってはぜいたく品である自転車が、豊かな国の人びとにとっては健康的な生活のためのアイテムとして意味や生活の中での位置づけが変わってしまうことについて述べている。彼の壮大なインスタレーションは単にその壮大さがもたらす爽快感が目的ではなく、文化とグローバリゼーションについての、重層的な問題提起なのであろう。

コロンビア出身のアーティスト、ドリス・サルシード Doris Salcedo は、2003年の第8回国際イスタンブール・ビエンナーレにおいて、1550脚の様ざまな形をした木製の椅子を、二つの建物の間にびっしりと積み上げる、衝撃的なインスタレーションを発表した。〔註11〕彼女はそれまでも、靴やドア、テーブルやシャツといった、日常生

活の中で使い古されたアイテムを用いたインスタレーションを通じて、内戦状態が続いていた母国の不安定な社会状況について訴えてきた。イスタンブールでの椅子によるインスタレーションも、その延長線上にあると思われるが、その椅子の脅迫的なまでの密集度が印象的である。同じく公共的な空間で展開されるクレンやアイ・ウェイウェイのインスタレーションとは異なり、サルシードのインスタレーションは内部空間のようすを窺うことはできない。インスタレーションの前面が完全に平面化され、二つの建物のファサードと完全にそろえられることによって、内部の不可視性はいっそう強調され、社会的な悲劇の大半が表面には現れないことを強く訴えかけているようにも見える。

同じく日常的なアイテムを大量に用いるインスタレーションを制作してきた、ニューヨークに拠点を置くアーティスト、タラ・ドノヴァン Tara Donovan は、2006年の彼女の初めての個展において、想像を絶する数量のプラスチック製のコップを用いた、一辺が16.6メートル、もう一遍が15.1メートルにも及ぶ、壮大なインスタレーションを発表した。[註12] 大量のプラスチック・コップは、連続的に変化する高さに積み上げられ、インスタレーションの全体は巨大な立体地形図を思わせる。一つひとつのプラスチック・コップはその日常的な形状を隠すことはなく、しかし同時に全体を形成するいわばピクセルの一つに埋没している。一見すると遊び心に端を発するかのように見える彼女のインスタレーションは、しかし現代の生活に潜む様ざまな問題を浮かび上がらせる可能性も秘めている。

木材を主要な素材とした仮設的な構造物を現場で制作する、ワーク・イン・プログレスを世界各地で展開してきた川俣正は、2012年の第4回アブ・ダビ・アート・フェアにおいて、数百脚のさまざまな椅子を、約6メートルの高さの内部空間をもったタワー状に積み上げるインスタレーションを、5日間で制作した。[註13] 川俣によればこのインスタレーションは、様々な椅子を組み合わせ、その内部に待ち合わせをすることが可能なソファを設置することによって、国際都市アブ・ダビに対する敬意と、中東で開催されるアート・フェアの国際的な意義を表現したという。

さまざまなアーティストが、何らかのオブジェを積み上げるという手法に取り組んでいるが、その狙いや芸術的意図はそれぞれに異なると思われる。同形のオブジェを大量に積み上げることによって、そのオブジェの文化的な意味性を強調するアーティストもいれば、異なる意味性を強調するアーティストもいる。また大量に積み上げることによって、オブジェを無意味化するアーティストもいるに違いない。同形のオブジェを大量に積み上げることによって、ミニマリズムがもたらす法悦的な感覚が得られる場合も少なくない。しかしいずれの場合においても、用いられるオブジェの数量が重要な役割を果たしていることは、明確であろう。

## 6. 根元的な欲求としての積み上げ

石を積み上げるといふ行為は、世界中の様ざまな文化の中で散見される。

登山者にとって山頂や登山道に積み上げられるケルンは、目に馴染のあるものである。ケルンが積み上げられる意味や目的については、いくつかの見方があるようである。山頂によくたどり着いた証であるとする目的達成記念碑説、墓標であるという説、登山道とその周囲の境界を表しているという説、何らかの宗教的な祈りを表現しているという説。おそらくこれがケルンの本質であるという、決定的な見方はないように思われる。

日本各地には、賽の河原と呼ばれ、訪れた人びとが石を積み上げる場所がある。親よりも早くなくなってしまった子どもたちが、両親の供養のために三途の川の河原で石を積み上げるが、やがて鬼がやって来て積み上げた石を崩してしまう、子どもが石を積み上げ、鬼がそれを崩すということが際限なく繰り返される、無限の苦しみが続くかと思われたが、地藏菩薩が子どもたちの救済のために河原に現れる。賽の河原の石の積み上げの背景にはこのような説話があり、地藏菩薩信仰と結びつけられて考えられることも少なくない。しかし賽の河原の石積みは、本来は俗信に基づいているというのが一般的な見方である。したがって、なぜ特定の場所で石が積み上げられるようになった理由については、本当のところはよく分からないといつていいであろう。

ケルンも賽の河原の石積みも、その本来の意味合いは不明であり、おそらくはどちらも俗説に帰することができると考えられる。しかし、石を積み上げるといふ行為が世界中に存在し、そしてその根本的な意味が俗説に帰されるという事態は、かえって、石積みといふ行為が、人間の文化にとって普遍的な意味をもっていることの証とはいえないか。

また世界中には、絶妙なバランスで自然石を積み上げる、ロック・バランシング Rock Balancing と呼ばれる遊戯に興じる人びとが存在し、彼らの多くが自らの積み上げの成果を静止画像や動画画像といった形式で、インターネットに投稿し発表している。彼らの中には、彫刻や写真といった芸術の文脈からロック・バランシングに取り組み始めた人びともおり、ロック・バランス・アーティストとして世界的な名声を博している者も存在している。確かに彼らの発表しているロック・バランシングの成果は見事なものであり、感心させられるものも少なくない。ロック・バランシングの中に、私たちが石をはじめとする様ざまなものを積み上げることの、本質的な意味があるかもしれない。

自然石は、煉瓦のように積み上げるために作られたものと異なり、積み上げに若干の難易度を伴う。この若干の難易度こそが、人びとが石をはじめとするさまざまなものを積み上げる、根底にある動機を形成しているのではないか。若干の難易度はその克服のために、若干の技術的な努力を必要とする。若干の技術的な努力による難易度の克服は、それ相応の満足と愉悦をもたらす。この、難易度と努力と満足との連鎖こそ

が、私たちの文化の原点にあるものではないであろうか。

そして積み上げという行為は、何かを構築する行為とは異なり、素材に対する加工は行わない。そのため積み上げられた成果の永続性は、保障されない。仮に永続的に存在できるものを構築する行為とその成果を文化と呼ぶとすれば、積み上げるという行為とその成果はプロト文化と呼ぶことができるのではないだろうか。そして、永続的に存在できる視覚的な快をもたらしてくれるものを創造する行為とその成果を造形芸術と呼ぶとすれば、永続的な存在は保障されないが視覚的な快をもたらしてくれるような何かの積み上げとその成果も、プロト造形芸術と呼ぶことができはしまいか。感性的な成果に知性を投入することによって永続性をもたらすものが文化であり、芸術であるとするならば、永続性を目指さない積み上げは、本能的な感性と知性の間にその動機があるということができるともかもしれない。もちろん、何かを積み上げるという行為の原点には、人間の高さという指標に対する根元的な憧れがある。高さを目指すことの根本には、人間を超える存在に近づきたいという、宗教的な動機もあろう。何れにしても、何かを積み上げるという行為は、文化的な本能とでもいうべき、ある種の矛盾を伴う根元的な動機に基づいているといえそうである。

私たちの「紙コップ積み上げアート・ワークショップ」の楽しさの本当の意味は、そのような人間の文化の根元的な動機を、複数の人びととともに共感的に体験することにあるのではないだろうか。今後も様々な機会を利用して、多くの人びとに紙コップを積み上げることの楽しさを伝えていきたい。

- [註1] Shimasaki, Kyoichi, "Large Paintings and Art Installations by Joining Hands: Art-workshops for Intellectually Disabled Children to Overcome Ableism", 2013, The Proceedings of 2<sup>nd</sup> International Conference on Art, Illustration, Visual Culture and Infant and Primary Education, Universidade de Aveiro, Portugal, edited by Helena Balbosa and Joana Qumental. You can access this paper from following address. <http://congresoarteilustracion.web.ua.pt/wp-content/uploads/2012/12/proceedingsAICVEIP.pdf> pp. 132-136
- 鳥先京一、「みんなで描いた大きな絵・みんなで作るアート・インスタレーション—能力主義を乗り越えるアート・ワークショップの試み」、2012年、成安造形大学紀要第3号
- 鳥先京一、「知的障害児との共同作業によるアート・ワークショップ」、2014年、意匠学会会誌「デザイン理論」64号
- 2] 重度の身体障害者、例えば自力ではほとんど四肢を動かすことができないような人の参加は可能なのかという問いかけがあるかもしれない。そのような重篤な身体障害者の場合、自らの身体の移動のための器具、例えば車椅子や可動性のベッドに、帯状の素材を結び付けてもらうことによって、インスタレーションと一体化するという、他の参加者とは異なる参加が可能である。実際、2011年に滋賀県立北大津養護学校で行った「みんなで作るアート・インスタレーション」においては、ひとりの車いすを利用する高等部の生徒が、大学生に対して自分の車いすにビニールテープを結びつけるよう依頼し、作品と一体化するという参加を实践したことがある。
- 3] 報告対象から除外したのは、2014年11月23日に私の地元の自治会（天津市大物自治会）の文化祭における実施である。参加人数がきわめて少なかったのと、成安造形大学生の参加がなかったのが除外の理由である。
- 4] この回以降の準備した紙コップの個数の報告が概数となるのは、ワークショップの実施に伴い、1回につき数%の紙コップが破損していったため、総数の正確な把握が不可能になったからである。
- 5] なお「スタディスキル実習」では、グループワークについて実践的に学ぶプログラムとして、グループ対抗のかたちでアイデアとプレゼンテーションを競い合ってもらう「フィンガー・フード・コンペティション」と、ダンス・パフォーマンス集団、「モノクロームサーカス」を招いてのダンス・ワークショップを行っている。
- 6] 本稿では、現代美術家の作品については、版權などの問題を考慮し、写真の掲載を行わない。必要な場合は、その作品の画像が掲載されているウェブサイトを訪ねて掲載していく。なおクリストとジャンヌ＝クロードのドラム缶のインスタレーションについては、ゲーグルをはじめとする検索エンジンによって容易にアクセスできる。
- 7] <http://www.tate.org.uk/art/artworks/cragg-stack-t07428>
- 8] Tony Cragg, exhibition catalogue, Musée départemental d'artcontemporain de Rochechouart, Rochechouart 1992, p.61
- 9] <http://www.matejkren.cz/index.php>
- 10] <http://inthralld.com/2013/01/spiraling-stack-of-bikes-creates-forever-bicycles-installation/>
- 11] <http://dornob.com/1600-stacked-chairs-massive-public-art-installation/>
- 12] <http://www.pacegallery.com/artists/111/tara-donovan>
- 13] <http://www.mymodernmet.com/profiles/blogs/tadashi-kawamata-chairs-for-abu-dhabi>



かそけきものへのアプローチをとおして  
見えてきたもの

A View of Approaches to Faint Phenomena

田辺 由子

Yoshiko TANABE



# かそけきものへのアプローチをとおして見えてきたもの

A View of Approaches to Faint Phenomena

田辺 由子  
Yoshiko TANABE

准教授（テキスタイルアート）

I had an opportunity to have my exhibition at the Borderless Art Museum NO-MA over a four-month period from August to December 2013.

The Borderless Art Museum NO-MA is a unique place which exhibits the work of disabled artists – also called outsider art or art brut – alongside non-disabled artists, an idea that arose from their concept of providing visitors a real experience of a universal expressive power that all people share. The museum is located in the Important Preservation District for a Group of Historic Buildings of Omihachiman City, Shiga Prefecture. It consists of a two-storied main building and a storehouse utilising a renovated machiya townhouse from the early Showa era. The museum has a distinct flavour, different from a white-cube art gallery. I was inspired by the space of the storehouse and created a place, which makes visitors even more conscious of light.

2013年8月～12月にかけての4ヶ月の期間にわたり、ボーダレス・アートミュージアム NO-MA において展示の機会を得た。ボーダレス・アートミュージアム NO-MA は、アウトサイダーアートともアール・ブリュットとも称される障害者の表現活動を一般のアーティストの作品と並列して見せることで、人のもつ普遍的な表現の力を見るものにリアルに感じさせることをコンセプトにしたユニークな美術館である。滋賀県近江八幡市の歴史ある重要伝統的建造物群保存地域に、昭和初期の町家を改築して開館した建物は二階建ての母屋と蔵から成り、空間的にもホワイトキューブの美術館とは違う独自のおもむきがある。今回はこの蔵の空間からインスピレーションを得て、より光を意識させるための空間づくりを試みることになった。[写真1]

## 1. 開かれた空間としての町家

近江八幡市の旧市街で展示を行うのは二度目である。前回は2007年秋、BIWAKO ビエンナーレにおいて、学生たちの協力を得ながら50日間にわたる公開制作を行った。空き家となった町家の玄関脇の三畳間、店の間と言われる空間で楊枝刺繍<sup>[註1]</sup>の公開制作をしながら来場者を迎え、ともに作業もする中で多くの得るものがあったが、そのひとつに身体をとおして実感した町家空間の再発見がある。

店の間は表通りに接する位置にあり、格子によって適度に外界から遮断されている

が、現代の建築物から比べると圧倒的に外界に近い屋内環境である。格子越しの光の加減や通りを行き交う人の気配、雨音、風の音など、気候、天候、時間帯の影響をもろとも受けるのだ。このような社会的にも自然現象にもさらされたものであった過去の暮らしにくらべて、現代の住居、特に都会の大多数を占める集合住宅などでは外の人の気配を感じることなく、天候、時間の変化も自らの意志で遮断して過ごすことが可能である。いつの間にか日本人の生活空間は、外界に対して開かれたものから閉じられたものに変化してきたといえる。

実際、滞在制作に参加した学生の中に、雨天で来場者もない平日の薄暗い中、たった一人で町家の空間にいられたことが貴重な体験だったと語る学生がいた。都会の集合住宅で家族とともに暮らす学生にとって町家で過ごした時間は、過去の暮らしを追体験したような新鮮な驚きがあったのだろう。このように人は独りにならない限り、我々を取り巻く環境の細部に気づかないのかもしれない。



写真1 「光の縁起」 撮影 ヨシダダイスケ

## 2. 展示環境と光

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA には今までも数度訪れたことがあり、蔵を使った展示が概ね外光を遮断し、柱や壁などの要素を極力意識させないよう作品のみに焦点を絞ったスポットの当て方、あるいは暗闇で作品そのものが発光するようなものであったと記憶している。母屋の展示空間に比べて光を遮断しやすく、他の作家の展示の影響を受けにくい隔絶された場所であることもその理由だ。

今回、展示を前提として蔵の空間を下見する機会を得、今まで見ていたはずなのに意識してなかったことが多々あることに驚いた。まず、蔵であるから当然なのだが、もともと二階建の構造であり、展示スペースに転換する際に上階の床板を取払い大きな吹き抜けの空間を作っている。しかし、本来床板を支えていた梁は建物の構造体として必要なものであり、90センチ間隔で残されたまま空間を上下に二分している。しかも、その梁にダクトレールが設置されているため照明はその位置より下に当てることを前提にしている。そもそも、90センチ間隔に渡された梁の隙間を縫って上部から作品を展示することは、美的観点からも到底不可能だ。壁面に目をやると柱の部分と漆喰の壁の色味、素材感のコントラストが激しく、さらに、シミや崩れた部分などもあった。過去の展示では特に蔵の細部を意識されなかったのも、このような条件をふまえた上での展示、照明技術を駆使してのだと納得がいった。

二階部分の壁面に不自然なベニヤ板が数枚貼られているのが気になり、担当者に質問したところ、窓を遮断しているとのことであった。照明効果のためには余計な外光を遮断するのが常であるからだが、ためにスポットを消した上で一カ所ベニヤ板を外してみると、わずかな窓の面積にもかかわらず蔵全体にやわらかな光が差し込んできた。今しがたまでギャラリーとして見ていた空間ではない、本来の蔵のあるべき姿が立ち現れ、直感的に自然光のみで展示することに方向が定まった。

## 3. 空間を見せるための装置

これまでも光によって刻々と変わる繊維の表情をテーマの中心において制作を行っていたが、今回この蔵の空間に出会ったことで、かすかな光のわずかな変化による空間そのもののあり方の差異に気づくことになった。この空間に単に作品を展示するのではなく、ゆっくり空間を堪能するための装置を作ることに主軸をおき、そのために今まで蓄積してきたノウハウを使うことにした。具体的には、5年前から制作している羊毛フェルトをレース状に繋げたシートを屋外と内部空間を仕切る幕に用い、さらに、この薄暗い空間にほんやり浮き上がってくるような、空間と物との境目が曖昧な物体として、絹繊維を絡めたものを壁や柱などの細部にも視線を誘導するために設置することにした。

蔵の空間は約4メートル×5メートルの床空間に壁面の高さが約4メートル～5

メートルと、床面積の狭さにくらべて空間の高さが際立っている。この吹き抜けを生かした展示にするために、シンプルに壁一面を幕のように覆い、空間を上下に二分する梁を意識させないよう、あえて邪魔な梁を作品の一部に取り込むことで、ありのままの蔵の姿を見せることにした。また、蔵の入り口部分と壁面の二階部分の空けた窓から差し込む光は、繊維の繊細な表情を強調する。

来場者はまずその入り口から白い幕〔写真2〕をくぐって蔵の内部に入るが、最初は薄暗い空間になにもないと感じるだろう。しばらくして目が慣れると、向かいの壁面の横木にぼんやりと綿のようなものが水平に一直線に浮き上がっているのが見えてくる。〔写真3〕振り返ると今しがたくぐって来た幕が実は壁一面を覆うものであり、戸口や上方の窓からは幕を透かしてやわらかな外光が差し込み、天井の高みからは綿のようなもののつながりが崩れ落ちてきていることに気づく。空間に対して垂直に垂れ下がる作品に呼応するかのように、幕を突き抜けた梁が空間を水平に貫いている。〔写真4〕

#### 4. かそけきものへのアプローチ

「カソケキ+チカラ」〔註2〕は今回の企画展のタイトルである。以下、展覧会パンフレットからの抜粋である。

「かそけき」は漢字で書くと「幽き」である。光や色や音などが、かすかでも今にも消え入りそうな様をいうのだが、現在ではあまり使われない言葉だ。しかし、本展にはこの言葉が必要だ。なぜなら、人の表現のそのスタートは常に「かそけきものである」からなのだ。かそけきものの姿を追いかけること。それは捉えどころの無さがゆえに、私たちの感覚の中で浮上したり埋没したり、夢のように存在する。

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA のアートディレクターであり、この展覧会のキュレーター、はたよしこの言葉だが、かそけき素材である繊維をその最小単位から表現に生かしている身にとって、大いに共感する言葉だ。さらに引用する。

私たちは誰でも自分自身の頭の中にイメージというものを持っており、それを「見える形」にして見たいという願望がある。そもそも「アート」といわれるものの全て、そのあくなき願望が止めようもなく暴走した結果のものだとも言えるだろう。太古の昔から人は「自分の頭の中にしか存在しないその姿を、見える形にしたい」と願った末に、アートというものを誕生させた。表現行為というものは、このように「誘惑の回路」が働く。自分だけのイメージの闇に眠る光景を、具体物にしてみたいという願望は「人が表現をする」ことの根幹に居座り、つい



写真2 撮影 大西暢夫



写真3 撮影 ヨシダダイスケ



写真4 撮影 ヨシダダイスケ

に人を動かすのだろう。アール・ブリュットと呼ばれる表現はその思いが一層生々しい。彼らは素材や技法の学習をしたり、情報を得る方法が乏しいがゆえに、ユニークな発想や手法を自己流で生み出すことで実現をさせている。

ここまで読むと、この文面はアール・ブリュットの作家の特質を物語っていることが理解される。今回、アール・ブリュットの作家と並列して展示する機会を得、作品に接してみて気づいたことは、かれらにとって表現し続けることが生きることと同義であるかのごとく強烈にありながら、アンバランスなほど見せることに関しては無頓着だということだ。薄っぺらな紙に極限の密度にまで描き込まれた小さな絵や、紙の切れ端を1ミリ以下の間隔で念密に切り込んだ作品など、普段ならうっかり見過ごしてしまいそうなもの数々が、美術館サイドの展示技術によってクローズアップされ、見るものに強烈なインパクトを与えるものになっている。

この制作をとおして、かれら同様にかそけきものの姿を追いかけながら、そのアプローチの仕方の決定的な違いを意識することとなった。アール・ブリュットの作家たち、かれらの自己という殻にひきこもりながらひたすら追い求めたイメージの発露が作品であるのに対して、自作「光の縁起」は、与えられた環境に開かれたスタンスで身を置き得られた感覚によって成り立っている。かすかな光による繊維の表情の差異や壁のシミ、さらには遠くの風の音など、そのすべてが美しいかそけきものたちの連なりの中で、訪れた人もまたかそけき存在として全体の一部となる。

〔註1〕 楊枝刺繍は楊枝の道具としての可能性を追求した「ヨージ手芸プロジェクト」の第二弾として行われた。爪楊枝の溝に糸を巻き付け刺繍針のかわりにして、柔らかな羊毛フェルトに落書きするように刺繍する。針を使わないので幼児でも安心ということで、初めての刺繍体験に立ち会うことにもなった。

〔註2〕 カソケキ+チカラ

出品作家：

宮永愛子 辻隆行 小東恭子  
藤岡裕機 今村源 大路裕也  
田辺由子

会期：

2013年8月24日(土)～12月15日(日)

会場：

ボードレス・アートミュージアム NO-MA  
(滋賀県近江八幡市永原町16)

主催企画：

ボードレス・アートミュージアム NO-MA  
社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団

後援：

滋賀県 近江八幡市  
滋賀県教育委員会  
近江八幡市教育委員会

研究ノート  
第一次世界大戦における  
仏領ニューカレドニアの日本人義勇兵

Japanese Volunteers in French New Caledonia  
during the First World War

津田 睦美

Mutsumi TSUDA



## 研究ノート

# 第一次世界大戦における仏領ニューカレドニアの日本人義勇兵

Japanese Volunteers in French New Caledonia during the First World War

津田 睦美

Mutsumi TSUDA

准教授（写真、仏領ニューカレドニア日本人移民史）

At the outbreak of World War I, as the economy got worse and the nickel mines were closed, many Japanese emigrants in French New Caledonia lost their jobs. One hundred Japanese emigrants who moved to the capital city of Noumea at that time volunteered in the French Foreign Legion. This is the story of those Japanese volunteers or, as they are called in French, "légionnaires."

## はじめに

「大戦」といえば、我々はまず日本国中を巻き込み悲劇的な結末を迎えた第二次世界大戦を思い起こす。仏領ニューカレドニアにおいても、日本人はこの戦争で、敵性外国人として島から追放されるという不運に見舞われた<sup>〔註1〕</sup>。

だが、歴史をよくふりかえれば、移民たちの不運の予兆はすでに第一次世界大戦にあった。フランスの植民地のなかでも本国から最も遠く、22,000km 離れた<sup>〔註2〕</sup>ニューカレドニアでもこの大戦の余波は大きく、社会や経済面に大きな打撃をうけた。

まず、適齢の男性（フランス人、カナック人男性人口の25%）が召集された<sup>〔註3〕</sup>ことから働き手が急減した。また、太平洋やインド洋に潜む敵国ドイツの巡洋艦の影響で本国との輸送方法に支障が出たため、主要産業であるニッケルなどが輸出できなくなり、多くの鉱山が閉鎖に追い込まれた。同時に、輸入にたよっていた食料が届かなくなり生活が困窮した<sup>〔註4〕</sup>。

鉱山に出稼ぎに来ていた日本人移民は失業の憂き目にあい、帰りの旅費を自分で工面しなければならなかった彼らのほとんどが日本に帰国する術を失った<sup>〔註5〕</sup>。こうして行き場を失った日本人は、各地から仕事を求めて首都ヌメアに移動してきた。

欧州大戦としてとらえがちな第一次世界大戦は、実は世界の広域にわたる多くの民族を巻き込んだ戦争だった。英仏独を宗主国とするアフリカ、インド、アジア、アメリカなど直接戦争と関係ない国から、白人以外の有色人種が大勢、兵隊や労働者としてかり出されている。

2014年は第一次世界大戦勃発100年の節目の年ということもあって、日本でもこの大戦がいろんな分野から検証された。この機会に、本稿では、ニューカレドニアから、第一次世界大戦における外国人義勇兵（フランス植民地歩兵隊）に志願したなかに、10名

のドイツ人、ベルギー人とともに、首都ヌメア近郊から集まった100名の日本人移民たちがいたことを紹介していきたい。

なお本稿では「日本人義勇兵」という呼称でとおしていくが、実際にフランスの外国人義勇兵 (Légionnaire) として公式に記録されたニューカレドニアの日本人移民はただひとり〔註6〕であったことを最初に明記しておく。

## 1. 第一次世界大戦とニューカレドニアの日本人義勇兵

1914年8月5日、ニューカレドニアの日報紙フランス・オーストラル紙は、対独戦争の開戦を報じた。続いて、首都ヌメアをはじめ地方都市の役所に開戦が告示された。

その3年前にあたる1911年に発表されたニューカレドニアの官報によると、当時のニューカレドニアの総人口は50,098人である。その内訳は、原住民であるカナック人が28,075人、自由なヨーロッパ人が13,138人、元流刑囚だったヨーロッパ人が5,671人〔註7〕、移民（出稼ぎ労働者）が3,214人〔註8〕だった。

ここでの日本人は「移民」のカテゴリーには含まれず、オーストリア、ベルギー、イタリア、オーストラリア、ドイツらとともに「ヨーロッパ人」のなかの「外国人」2,010人に含まれていた〔註9〕。日本人だけの人数は1,202人〔註10〕で、総人口の2.3%にあたる。

100年たった今、外国人義勇兵に志願した日本人の実態を探るのは容易なことではない。唯一当事者の生の声が伝わってくるのが、パリで元義勇兵だと名乗った大森鉄之助から聞き取りをしたノンフィクション作家、角田房子〔註11〕が1961年に文藝春秋に寄稿した「たんぼぼ鉄之助」という表題のテキストである。まずは角田のこのテキストからひとりの「義勇兵」、大森の足跡を辿っていきたい。



写真：ニューカレドニアの外国人義勇兵、Le Miroir 誌（フランス）1917年2月4日、167号 16ページ

## 2. 大森鉄之助

1891年、滋賀県の仏具師の家に生まれた大森は、1913年、4年契約でニューカレドニアのニッケル鉱山に鉱夫として出稼ぎに渡った〔註12〕。

第一次世界大戦が勃発し鉱山の閉鎖で失業した大森は、仕事を求めて首都ヌメアに出ると、港で船の荷役をする仕事にありついた。楽天的な大森は稼いでは博打につき込むその日暮らしであったが、やがて戦争の拡大にともない荷役の仕事も失ってしまった。

1916年10月2日付けで、25歳の大森はフランスの義勇兵に志願した。そのきっかけを「私達は他に食べてゆく道もないので、それで義勇兵としてはいったわけです」と角田に語っている。

おそらく大森と同じような事情で集まった第二回日本人義勇兵は、ニューカレドニアで2ヶ月の訓練を受けた後、オーストラリア、東南アジア、中近東を経てマルセイユに渡った。大森はあちこちに寄港しておもしろかったと船旅をふりかえり、航海中の2ヶ月はすることもなかったので甲板で博打に興じていたと語った〔註13〕。

この前年、すでにマルセイユに輸送されていた第一回日本人義勇兵は、船の上でさんざん周囲に迷惑をかけた揚句、多国籍義勇兵で構成された大隊に編入された。しかし、彼らは、軍規はいっさい無視、喧嘩をしては怪我人を続出させた。前線へ出されたが余りの乱暴狼藉にまた後方にさげられ、結局「全員の旅費をこちらでもつから、なんとか日本におひきとり願いたい」ということになったという。

大森のいた第二回義勇兵は前回とくらべておとなしかったにもかかわらず、フランス側は用心して、彼らをマルセイユ上陸後ただちに軍から隔離して砲兵工場へ送ることに決めていた。一同はル・ブールジュの工場でフランス人の工具とともに作業していたが、日本人だけは常に特別待遇で“敬して遠ざけ”られ、問題の多い日本兵はハレもの的存在であった。

数ヶ月すると、日本人はフランスの工具よりずっと能率よく働くようになったので、大森は交渉し、出来高性にして週にもう一日、日本人には休日を追加してもらった。その休みを利用し、大森は別の町ではじまったアメリカの病院建設の求人を見つけると、汽車で4時間かけて出かけ、とうとうそのまま居着いてしまった。

1921年頃、大森は脱走兵としてフランスの軍事裁判所から呼び出された。フランス語がわからず、工場での仕事はもう兵役に服していないと思っていたと釈明し、もち前の機転で危機を乗り越え無罪放免となった。

文中、角田は何度も大森にほんとうにフランスの「外人部隊の兵士 (Légionnaire)」だったのかと尋ねている。大森はそうだと答えるが、フランスの公的従軍記録に大森の名前はない〔註14〕。義勇兵に応募はしたとしても、前線に立つことがなかったのだとすれば当然だろう。角田が感じたように、大森は「義勇兵」が何かを正確には理解していなかったようだ。

ふたつの大戦が終わってからも、大森はそのままパリに住み続け、ますます波瀾万丈の日々をおくった〔註15〕。

### 3. 門池 勲

ニューカレドニアからただひとり、日本人義勇兵として前線で戦った門池について、1939年9月7日の朝日新聞をもとにその足跡をたどってみよう。

1913年頃、門池はニューカレドニアの鉱山で30人のまとめ役として働いていた〔註16〕。

1916年11月6日に義勇兵に志願し、翌年2月13日に第二回義勇団のひとりとしてマルセイユに上陸している。その理由は先の大森とはあきらかに異なり、「もともと日露戦争では秋川騎兵旅団で騎兵軍曹として出征した経験があり、男の死に場所は戦場であると思っていた」というものだった〔註17〕。

マルセイユに上陸した当初は人手不足だった国内の工場に廻されたが、門池は、「私は日本軍で軍曹であった」と談判し、リヨンの外人部隊第一連隊に配属された。そして歩兵一等卒として、1917年4月に戦線へ出動し、ランス、アルザス、ロレーヌ、ベルギー国境、アミアン、ノイヨンで激戦を重ねた。

1917年8月20日には、フォッシュ元帥の総攻撃命令下でヴェルダン奪回をかけた戦いで左腿を負傷し、21日間野戦病院に入る。再び前線に戻るが、1918年9月3日、今度はパリ近郊のノイヨンで下顎と歯を負傷し、1919年1月までパリの陸軍病院で治療をうけた。その間に休戦となり、1919年1月21日に除隊した。

その功績に対して、門池はフランス共和国から「名誉負傷章」と「クロワ・ド・ゲール（金二星勲章）」を授与された。

### 4. 帰還した日本人義勇兵

次に、フランスから帰国した第一回日本人義勇兵について、朝日新聞の一連の記事から紹介していこう。

#### 1916年6月3日（シドニー特派員）「在外日本人従軍志願」

「ニューカレドニア在住日本人30名はフランスに従軍の志願をし、7月上旬にフランスに向けて出発する」〔註18〕

これ以降、目的地であるフランスのマルセイユに上陸した日本人の動向についての記事はなく、次は日本人の帰還が報告されている。

#### 1916年12月18日（神戸電話）「日本義勇兵の帰還」

「仏領ニューカレドニアの出稼ぎ地を引き払い、友邦の急に赴いた日本義勇兵53名

のうちアトス号で帰還した日本人40名」〔註19〕

西日本出身者20名が神戸で下船したいと主張した。しかし、護送してきたフランス軍人が航海中に日本人を凌辱し負傷させた〔註20〕という報告があったため、16日の朝、警察は内務省に急電を打って対応の仕方の指示を仰いだ。その結果、凌辱事件の調書をとるために全員を横浜に上陸させ、日仏間の国際問題として取り扱われることになった。

### 1916年12月19日「邦人の義勇兵団 相当の資格吟味」

この騒動はかなりインパクトがあったのだろう。翌日の社説にとりあげられている。

「義勇兵とは、元来交戦国の軍人ではない国民が、その祖国のために干伐を義憤と同情に駆られてまったく個人の自由意志より正義の戦いを戦うとは、古来の事例にして国際公法またこれを承認する」

個人の意志で義勇兵として参加する者がいることは誇りとしつつも、義勇兵のあり方について、「義勇兵団の編制、素質は組成当初において厳格に吟味せらざるべからず。この意味において吾人は外務省が、志願者ならびに兵団組織に関しては根本的な方針となんらかの規定を公示する必要がある」と述べている。

社説は、今回のニューカレドニアの一連の騒動も、フランス人による凌辱や虐待が、むしろ日本人義勇兵たち側に要因となる問題点があったことを示唆し、国際間の不祥事がともに連合国である日仏の友好関係に悪影響をおよぼさないよう配慮していることが感じられるまとめかたであった。

### 1916年12月20日「送還兵と旅費」

さらに報道は翌日に続く。送還されてきた日本人（代表矢島高世）は横浜のフランス領事に帰還旅費の支給を交渉したとある〔註21〕が、あいにく領事館のあずかり知らぬこととして強く拒否された。あきらめのつかない矢島は次に東京のフランス大使館に赴き交渉をしようとする。水上署は一文無しの彼らにまず生活を安定させるべきだと説得し、人夫請負業者の斡旋で29名が住み込みの石炭人夫に、そして矢島はじめ他の11名は故郷から送金があるまでの間、水上署の斡旋で旅館に分宿することになった。

### 1916年12月20日「仏船甲板上的椿事」

同日の別紙面には、19日正午、休憩中の日本人荷役人夫とアトス号のフランス人コックおよび水夫の間に、あらたに起こった別の殺傷事件の詳細が書かれている。

横浜港碇泊中に船に行商に来た者から不正品を売りつけられ腹をたてていたフランス人コックが、たまたま後部甲板の料理場口に取り付けてある献立に対して肘をついで談話していた3人の日本人荷役人夫の態度が気に食わなかったのか、そのうちのひとりを殴打した。それに対して日本人3人は憤り、さらにそこで食事をしていたフランス人水夫50名が刃物を持って加わり、不運にも日本人2人が亡くなった。

水上署は午後6時にフランス人の嫌疑者3名を船内に留め、翌朝、訊問、横浜検事局の令状を待って収監することとした〔註22〕。

### 1917年2月25日「仏船アトス号撃沈」

日本人を横浜まで送り届け、12月26日マルセイユに向けて帰路についたアトス号〔註23〕は、1917年2月17日正午、ドイツ軍の潜航艇によって撃沈された。幸いドリーズ艦長はじめ1,600名の乗組員は無事マルタ島に上陸避難した。同じ航路で、同じ汽船会社の船がドイツ軍による攻撃を受けるのは三度目であった。

アトス号には、横浜で生糸が1,154俵〔註24〕はじめ羽二重やモスリンなどの織物、雑貨、銅などが荷積みされていたが、この災難で海のもずくとなってしまった。

## 5. 第一次世界大戦から第二次世界大戦へ

最後に再び門池の話にもどろう。先にふれた1939年9月7日の朝日新聞には、外国人義勇兵であった門池が「日本人は強い」と一目おかれたことが愉快であったとふりかえり、第二次世界大戦のことを「また大戦ですな、いい年をしてと笑われるかも知れませんが、つい又行きたくなってフランス軍従軍願いを出しました」と語ったとある。

この発言に対して、翌日の朝日新聞のコラムには、次のような苦言が呈してあった。

### 1939年9月8日「鉄箒／大戦の義勇兵」

「実はあいた口がふさがらないのである。(中略) 極東ではもう3年も前から皇紀2600年来未曾有の大戦争が続けられているのだ。それを知ってか知らずにか、わざわざヨーロッパくんだりまで戦いに出かけに行くとはいったい何事だ。(中略) もしヨーロッパ行きの切符が買えるだけの金があり、フランスのために死ぬる生命があるなら、なぜそれらを祖国に献じようとししないのだ」

このような動きは日本に限ったことではない。第一次世界大戦中のときにはその正義と勇気が賞賛された義勇兵も、第二次世界大戦下では、世界各国で義勇兵として他国に行くことを制限、禁止し、自国の戦いに備えることを優先させるようになった。そこには戦争が膨大な戦費を使う国をあげての総力戦へと拡大していった背景がある。

ニューカレドニアで志願した第一回義勇兵の日本人は結局「外人部隊」にはならず、やっかい払いをするかのようにフランス軍によって日本に送還された。一方で大森や門池のいた第二回義勇団の他の日本人はどうなったのだろうか。もうフランスには日本まで送り届ける余裕はなかったのではないだろうか。大森のようにそのままフランスに居着いた人もいたのだろうか、詳しいことは今のところわかっていない。

戦争はつねに民間人をまきこみ、その生活基盤を根底からくつがえす。ニューカレ

ドニアの日本人移民とふたつの大戦の関係を、これをきっかけに、さらに調査をすすめていきたいと思う。

- [註1] 日本人は財産差し押さえの上、オーストラリアの強制収容所に移送された。現地女性の妻と混血の子供は抑留対象にならなかったために、家族離散という悲劇を招いた。
- 2] 当時はニューカレドニアのヌメアからシドニー経由でマルセイユまで船で8週間かかった。(Boubin-Boyer p.1)
  - 3] ニューカレドニアはフランスの植民地の中で最も従軍した人が多かった地域のひとつだった。(Boubin-Boyer p.12)
  - 4] 小林 p.193-194
  - 5] いい方をかえれば、この戦争がなければ、日本人が帰国を断念し、現地女性と所帯を持ちニューカレドニアに定住することはなかったかもしれない。
  - 6] Palombo p.123. 第一次世界大戦への義勇兵は日本国内からは出なかったが、ニューカレドニア以外に、カナダ、仏領インドシナの在留邦人が従軍した。
  - 7] 流刑植民地だったニューカレドニアでは、同じフランス本土出身の白人であっても、元流刑囚の子孫は自由移民として移住して来たヨーロッパ人(コロン、兵隊、公務員、技術者など)から長く差別された。
  - 8] 出稼ぎ移民の人口はたいへん流動的で正確な数を算出するのは難しい。(Boubin-Boyer p.3)
  - 9] 日本人は他のアジアからの移民と異なり、ヨーロッパ人と同じ待遇の移民であり、契約を終えれば自由移民として自分の好きなところに暮らし、仕事することが許されていた。これは1892年のニューカレドニア初回移民が失敗に終わった後、フランス側の強い要請に応じて1900年から移民を再開するにあたり、日本政府がフランス政府と交渉して日本人の地位を改善させたからだ。
  - 10] Palombo p.184
  - 11] 取材当時、角田氏は毎日新聞パリ支局長の妻としてパリに在住していた。1914年生まれ、2010年歿。
  - 12] 移民に応募したのは、徴兵検査で丙種合格して間もない頃だった(角田 p.320)
  - 13] 日本人の博打好きは鉱山会社で常に問題視されていた。
  - 14] 研究者の Sylvette Boubin-Boyer に問い合わせた。
  - 15] 日本人移民が日本に帰国できた別のケースとして、1914年11月、ドイツ仮装巡洋艦エムデンを追ってヌメアに寄港した日本海軍の艦船が、失業者の窮状の陳述を受け、ヌメアで帰国希望者を募り、随伴していたベナン号で約100名を連れ帰った。(小林 p.201)
  - 16] 筆者の所有する移民名簿に門池の名前が見当たらなかった。Palombo の作成したリストには出身地が東京とあるが、別稼ぎ移民に東京出身者はいないので、別の雇用(技術者や移民監督など)でニューカレドニアに渡ったのかもしれない。
  - 17] 外人部隊の日本人義勇兵には、フランス在留中に開戦を迎え、そのまま従軍した小林祝之助と茂呂五六と滋野清武がいる。いずれも飛行士。門池と同じ野戦病院にいた小林飛行上等兵は戦死。(1918年6月25日朝日新聞)。茂呂は帰国(1919年6月7日の朝日新聞)。
  - 18] Palombo, Annex v. によると、「1916年4月11日から5月24日に志願した日本人53名が1916年6月4日にマルセイユに上陸した。そして10月7日に除隊し、アトス号で日本に送還されている」とある。
  - 19] 内訳は福岡13人、福島10人、鹿児島7人、岐阜3人。三重2人、滋賀、熊本、富山、山形、広島、愛知が1人である。(朝日新聞) ニューカレドニアへの移民数が最も多い熊本出身者は少なく、沖縄にいたっては0人である。
  - 20] 右眼貫通傷となった福島県の斎藤寅次郎と太腿に銃創を負った富山県の富岡健次郎。(朝日新聞)
  - 21] 先の大森鉄之助の話では、旅費はすでにフランス側が負担していたとある。大森は矢鳥の名前をあげて、「この一団の親分はこうした日本人の中では稀少価値のあった大学出で、性格異常ともいふべき乱暴者、この英雄が一声咆哮すると全員は一瞬にして殺気立った」と語っている。

- (角田 p.324) 東洋移民合資会社の資料(外交史料館所蔵)によると、矢島は1890年、愛知県生まれ。1910年、採掘運搬工夫として採用されている。
- 22] このフランス人3名は横浜地方裁判所の寛大な取り扱いで刑の執行が猶予され、26日に帰路につく。(1917年2月25日の朝日新聞)
- 23] フランスのエム・エム汽船会社所有のアトス号はマルセイユのシオタ会社が建造した最新式の2万トンの船。この汽船会社は横浜に支店があった。
- 24] 当時、日本の生糸は世界に誇る輸出品であり、それがフランスの繊維産業を支えていた。一俵は60kg。

#### 参考文献

- Sylvette Boubin-Boyer "La Nouvelle-Calédonie durant la Première Guerre Mondiale", *Revue juridique politique et économique de NC*, No.8 sept-oct 2006
- Philippe Palombo "La présence japonaise en Nouvelle-Calédonie 1890-1960" ANRT 2001
- 小林忠雄『ニューカレドニア島の日本人』ヌメア友の会 1977
- 角田房子「たんぼぼ鉄之助」『文藝春秋』1961 7月号
- 朝日新聞は国会図書館所蔵のデジタルデータ開蔵を使って収集した。

# 2011年度大学満足度調査結果分析（3）

～自由記述篇～

A Report about the Seian Satisfaction Survey in 2011（3）

山川 裕樹

Hiroki YAMAKAWA



# 2011年度大学満足度調査結果分析（3）～自由記述篇～

A Report about the Seian Satisfaction Survey in 2011（3）

山川 裕樹  
Hiroki YAMAKAWA

准教授（心理臨床学、学生相談）

Here I will report the results of the Seian Satisfaction Survey in 2011. This report is volume three, and offers an analysis of the students' comments. I summarize their level of satisfaction and their needs regarding classes and the university life and I suggest what we can do for students.

## はじめに

本稿の目的は、2011年度に行われた成安造形大学満足度調査の結果から、学生たちにおいて成安造形大学がどのように受けとめられどのように感じられているのか、果たして満足いく大学だと思われているのか、そこを検討することにある。昨年度並びに一昨年度報告したもの（山川、2013、2014）に引き続いて、今回は自由記述で得られた回答をまとめ、それらを踏まえて総合考察を行う。なお、自由記述欄は、必修授業と選択授業について、それぞれ「満足している科目名とその理由」「必修（選択）授業に関していいこと」を尋ね、そして最後に、「満足な点、改善してほしい点」などへの記入を求めている。以下では、必修授業についての記述を領域ごとでまとめ、次に選択授業についての記述、最後に全般的な満足点・改善希望点の自由記述をまとめることとする。なお、学生の記述すべてを表にすると冗長になるためその詳細については学内資料に委ね、自由記述についてはその具体的記述は省略し、特徴的な声を拾い上げることとした。

## 1. 領域別 必修授業自由記述

ここでは、満足している必修授業ならびに領域に関して述べられた意見を、領域別に取り上げる。

### ☆1.1 総合領域

調査回答者30名中、必修自由記述回答者9名（回答者比30%、在籍者比21%）。

回答者数が少ないので特記すべき意見は少なかったが、学生の声に「Fライセンス以外とれず不便」や「総合（領域）というだけで下に見られる」というのがあり、これについてはもう少し考えていかねばならないことだろう。この大学の中で、総合領域をどのように位置づけるのか。他領域との棲み分け・差別化などもあり容易に答え

の出る問題ではないが、我々の検討課題であるだろう。

## ☆1.2 イラストレーション領域

調査回答者285名中、必修自由記述回答者154名（回答者比54%、在籍者比42%）。

満足している必修授業については多くの学生から声が挙がっており、満足いく授業が多いことが窺われる。名前が挙がった先生の数回答者数比で77.9%になり、（共担科目で二人名前が挙がった先生が多いというのものもあるかもしれないが）全領域中群を抜いてトップである。またコメントも長きにわたるものが多く、学生たちも思い入れを持って書いていることがうかがえる。

コメントで多いのは、「丁寧」や「分りやすい」などの文言である。イラストレーション領域の丁寧な教育が評価されているようである。満足いく授業として挙げられたのは専任／特任教員が多いが、それと並ぶくらいにある一人の非常勤の先生の名前が挙がった。学生のコメントからは、その先生がやさしく丁寧で話も面白いと評価されていることが分かる。

一般的な要望として複数名から上がった声は、「課題が多くてしんどい」「もっとやりたいが授業時間が短かった」「たくさんやっているがこれでいいのか（深められている感じがしない）」「もう少し厳しい意見もほしい」などがある。多くの学生を抱えている現状で、課題量の適切さはなかなか難しいテーマである。困難な舵取りが要求されていると感じる。

## ☆1.3 美術領域

調査回答者86名中、必修自由記述回答者48名（回答者比56%、在籍者比39%）。

必修授業に関しては好意的な意見が目立つ。なお、「全部」のように、全教員に対する感謝が比較的多いのが美術領域の特徴である。教員全員を挙げなくとも、複数名の教員を挙げている学生は少なくない。ただコメントが他領域と比べて短い。満遍なく評価を受けているのだが、「特にこの先生がいい！」というような思い入れのあるコメントは少ないようだ。これは美術領域での施行形態の影響も考えられる。他領域では基本的にパソコン等による学生の自主回答であったが、美術領域では授業中に教員が施行し、紙媒体にて教員が回収するという形をとった（手書きの面倒さや教員が読むと想定することによる心理的ブレーキも想定される）。要望で一つ気になるのは、「クラスの担任がないぶん、同じ領域の先生ともっとふかく関わる事ができなくて、相談事等に困る。もっと先生と仲良く関わりたい」という一回生の意見である。授業の関係で一回生時に専任（特任）教員の授業が多くないのかもしれないが、何らかの形でそれを補えるようなかわりを構築してもいいのかもしれない。

## ☆1.4 メディアデザイン領域

調査回答者90名中、必修自由記述回答者35名（回答者比39%、在籍者比16%）。

学生たちから多く賛意が寄せられた教員は、学生たちの熱いコメントが伴っており、その先生の教育の一端を垣間見させてくれる。丁寧さや共に歩む姿勢が評価されている教員もいれば、適切・的確な指摘が評価されている教員もいた。ほか、非常勤で一名高評価の教員がいたが、その先生の授業では基礎的なところを実践的に学べ、的確な指導がなされるところがよいと学生は感じているようだ。

ただ少し気になるのは、回答者内で教員の名前を上げた割合があまり多くないことである(44.4%)。総合領域(30%)に次いで低い。そのことが、改善希望の意見の多さに繋がっているのか、他領域に比べて必修授業の改善を望む声が比較的多い。回答の母集団がほぼ同じ美術領域と比較すると、美術領域で寄せられた要望の声が7件/86名(8%)であるのに対し、メディアデザイン領域においては13件/90名(14%)である。イラストレーション領域は35件/285名(12%)と比較的近いが、その言語表現を見てみると、メディアデザイン領域のほうがより具体的な要望が多いようである。そのことは山川(2014)で見た必修授業への満足度の低さ(とりわけ1~2年)と繋がっているのか。学生から寄せられた声を見るに、ゆるくなり過ぎていることへの不満が多いようだ。先の高評価の教員とも併せて考えると、もう少し厳しさがあってもいいと学生は感じているのかもしれない。

### ☆1.5 空間デザイン領域

調査回答者20名中、必修自由記述回答者10名(回答者比50%、在籍者比12%)。

必修授業では、いろいろな先生がそれぞれの特徴にあった評価をされているようである。多面的な視点が評価される教員もいれば、熱意と的確な指摘が評価される教員も、学生のニードをちゃんとつかんでいるところが評価される教員もいる。領域必修の他コース共通授業は、他コースに行った友達と会えるいい機会として捉えている学生の声もある。領域共通の授業の増加によって学生たちにどれほどの専門性を担保しているのか、悩ましい問題ではあるのだが、友人との切磋琢磨も学生時代において大切な経験である。その意味で、領域共通の授業は、ただ専門性が薄まるのみと捉えられるものでもないことが分かっていく。

## 2. 選択科目自由記述

調査回答者516名中、必修自由記述回答者221名(回答者比43%、在籍者比26%)。

### ☆2.1 満足いく科目について

選択科目の人気は、タイプの違う二人の先生が高評価であった。片方の先生は「丁寧に教えてくれる」「分かりやすい」「いろんな情報を教えてくれる」「知識が身につく」などが評価の言葉としてよく挙がる。分かりやすく丁寧な講義と、さらに実質的な知識に直結している講義内容が評価されていると考えられる。もう一人の先生は、

「楽しい」「面白い」「制作のヒントになる」「相談が書けるのがいい」などが意見として多い。面白くて楽しい講義で、気軽な気持ちで知識が得られるところを学生たちは評価していると思われる。

この二名を挙げた学生がそれぞれ60名超と多く、あとの教員は15名前後以下となっている。大ゴマを担当する教員の名が上位にくるのはそれに触れる学生が多いため当然であろう。しかし非常勤の教員でもある程度名前の挙がる先生もおり、週に一コマ程度の担当であることを考えるとなかなか高い評価であるといえよう。

## ☆2.2 要望について

いくつか個別の科目への要望も挙げられたが、ここではそれについては割愛する。ここで見ておきたいのは、「科目数が少なく、とれる科目がない」という要望である。確かに時間割をよく見ると教養演習や語学科目というやや特殊な科目が一定数を占めており、いわゆる講義系の科目のバリエーションはさほど多くない。ある学生が指摘するように、「四年生になるととりたいた科目がない」状態にあると考えられる。

制作に近い選択科目を求める声も複数ある（4名）。領域担当の教員が担当する授業など、制作に近い選択の授業がもっとあってもいい、と思っているようだ。この辺は、各領域の講義系科目（あまりスキルが要求されない科目）を全学開講するなどして対応できるのではないだろうか。先に挙げた「とれる科目がない」との要望に関してもその回答を提供できるだろう。

## 3. 大学への要望・意見

これは516名中227名の記入があった（回答者比44%、在籍者比27%）。

得られた意見は多岐にわたるため、

表1：大学への要望分類

分類	件数
1. 領域～領域施設	27
1. 領域～必修授業	18
1. 領域～領域研究室	8
2. 選択授業	2
3. 専門部署～購買	35
3. 専門部署～バス	33
3. 専門部署～学生食堂	25
3. 専門部署～事務	23
3. 専門部署～図書館	19
3. 専門部署～メディアセンター	14
3. 専門部署～工房	10
3. 専門部署～告知・広報	7
3. 専門部署～キャリア	6
3. 専門部署～キャンパスが美術館	6
3. 専門部署～守衛	2
4. 時間割	7
5. 施設使用～使用時間	20
5. 施設使用～使用許可	5
6. 当局への不満～予算使途	8
6. 当局への不満～90周年	7
6. 当局への不満～意見を聞いてほしい	5
7. 施設・環境～空調	7
7. 施設・環境～環境	6
7. 施設・環境～ATM	5
7. 施設・環境～トイレ	5
7. 施設・環境～設備その他	11
8. イベント～学内交流	6
8. イベント～特別講義	5
8. イベント～教員作品展	4
8. イベント～学祭	3
8. イベント～学外交流	2
9. その他～全体的満足	11
9. その他～全体的不満	2
9. その他～総花的意見	4
9. その他～その他	7

以下のような基準で整理を試みた。まず、その回答にその意見を集約していると思われるラベル（名称）をつけ、つけられたラベル同士で比較し、重複するものは統合するなどして整理する。整理されたデータを更に上位カテゴリーでまとめ、9つに区分した。その9つとは、領域／選択／専門部署／時間割／施設使用／当局への不満／施設・環境／イベント／その他、である。うち、「選択」と「時間割」以外はそれぞれ2～11の下位分類を持つ。「専門部署」などはいくつもの寄せ集めであるが、各自を独立させるとカテゴリーが増大しすぎると判断しこのままとした。作った分類項目とそれに該当する件数は右の表1で示された通りである。

このラベルは、学生の一意につき最大四つまで付けることとした。それ以上にわたるものは主たる意見を四つまで計上するかあるいは「総花的意見」として扱った。そのため、例えばATMやバスについての意見などはここで示された分類表に加えて数名ほど多く寄せられているとお考えいただきたい。なおここで挙げられた項目のうち、1と2の領域ならびに選択授業に関しては、いずれもこれまでに取り上げたことに属するため以下では割愛する。

### ☆3.1 購買、バス、学生食堂、図書館、守衛

では、まず、3の専門部署としてまとめたうち、独立性が高い（外部委託あるいはそれに近い＝当学園所属の教職員のみで運営していない）部門についてまとめよう。毎回多く挙がることだが、購買にバス、学生食堂、図書館に関する要望は多い。

多い順に見ていこう。購買であるが、35ある意見のうち、品揃えに関するものが21、営業時間に関するものが9、値段に関するものが8、狭さに関するものが4であった（重複あり；以下同じ）。「狭さ」も品揃えとほぼ同義であると考え、購買に望むものは品揃えの充実であると考えてよい。具体的にどのような品を望むか挙げているものもあり、それは画材が9、食品が3、書籍が2とやはり画材の充実を望む声が多い。ただ、食品や書籍の充実に関しても、この大学が「すぐ近くに何もない環境」であることを考慮に入れなければいけない。これは学生食堂の項で改めて考える。

さて、次がバスである。堅田駅からもスクールバスを出してほしいという意見が9、接続の悪さの改善を望む声と同じく9、20時台が少ないという意見が7、本数の増加を望む声6、休暇中のバス停止時への対応を望む声3である。接続の悪さを指摘する声も多い。これには「北方面からの接続があまり考えられていない」という意見もあるが、もっと多いのは、「授業に微妙に遅れる時間にバスが出る」であったり「駅での待ち時間があまりに多い」であったりする。委託先と運用面で検討を重ねる事によって、こうした訴えには対応できるのではないかと。

学生食堂に関しては少し減って25名の学生から意見が寄せられている。メニューが少ないとの声11、営業時間についてのものが7、味の改善を望む声と値段が高いとの声それぞれ4である。この辺りは先方でも何らかの対策をとってもらいたいところである。なお、営業時間を指摘する意見の中で、「成安の近くに店がないため、外

に出ようとする」と30分以上かかってしまう」との意見があった。先の購買の項でも述べた、「すぐ近くに何も無い」大学環境だからこそ、ある程度のものを学内で取り揃えておく必要がある。周囲は住宅街のため、学生食堂が閉まってしまえば、学生たちは食べる手段がないのである。何か対応できればよいのであるが。

図書館は、開館時間に関するものが13、蔵書の充実を望む声が6である。時間は期間（日曜や休暇期間）の要望も含めた。ともかく、授業が終わったあと（あるいは始まる前）に行けない、というのがその要望の多く、である。借りようと思っても借りる時間がない、授業が終わってレポート資料が必要になっても閉まっている、などの指摘である。守衛に対する要望は多くないものの、退出時間をめぐっての意見が二名ある。10時を少し過ぎても使いたいという意見は別の問題だとしても、10時を回っていないのに退出させられるという意見については、少し先方と話し合いを持つ必要があるだろう。

以上、教職員以外も関連している専門部署について取り上げてみた。外部委託の性質が強いものもあり、大学側だけではコントロールしにくい要素もあるかもしれないが、だからこそ大学から意見を伝えていく、という発想も必要であると思う。寄せられる声は、その多くがより真剣に学業に取り組みたいから出てくる意見が多かった。大学でちゃんと制作をしたい、そう思っている学生にどうやって答えていけるのか、そこが問われているように思われる。

### ☆3.2 事務、メディアセンター、工房、キャリア、告知・広報、キャンパスが美術館

次に、3の専門部署のうち、内部組織（教職員）に属するものをまとめる。

この中で一番多いのが、事務に関する意見である。一番多い要望が、開室時間に関するもの（10名）である。6限が終わってからでは間に合わないという指摘が多い。昼休みもなく、午後からの授業に3限連続で実習が入るような本学の時間割では、確かに、学生たちの指摘ももっともである。選択式回答でも学生の希望は多かった。

次いで多いのが、教員と事務組織との、あるいは事務組織内の連携不足を指摘する声である（7名）。教員が事務に聞けと聞いたことが事務では通じなかった、事務に伝えたことが教員に伝わっていなかった、事務室内での情報共有がなされていない、などである。業務が多くなると連携は難しくなるものだが、情報・知識を個人内に留めてしまわないための工夫も必要であると思われる。

メディアセンターに関する意見はいくつかあるがまとめてこれといった意見は少ない。比較的多いのは「システムが分かりにくい」という意見である。「物があるのは分かるがなにがどのように使えるのか、スケジュールなどはどうなっているのか」が分かりにくいようである。新入生向けにガイダンスは行われているが、新入生の頃にまとめて教え込むよりも、もう少しいろいろ分かるようになってからガイダンス（あるいは案内ブックレット）で情報を伝えたほうがいいのかも。工房への要望もその多くがライセンスやシステムについての意見であり（合計7）、学内にある資源

をどのように学生たちに利用してもらえるか、その告知を考えていく必要があるだろう。

告知・広報と「キャンパスが美術館」は、重なっているところもあるのでまとめて報告する。学生の声をまとめると、『「キャンパスが美術館」の活動において学内外への告知が不足している」とでもなるだろうか。マンパワー的な面などでも難しいことであろうが、大学の売りとして「キャンパスが美術館」を推すのであれば、その活動を集約しウェブサイトならびに学内の掲示板などでしっかりと広報していくことは必要なことだろう。なお「キャンパスが美術館」には感謝の声も寄せられており、また、教員の作品展示が見たいというものもあった。何らかのかたちで実現してほしいものである。

### ☆3.3 時間割

昼休みがないのでお昼が食べられないという意見が3件寄せられた。授業時間を何時までにするのかなど別の問題も絡んでくるため早急に対応することは困難だろうが、中長期的には考えていかねばならない問題だろう。

### ☆3.4 施設使用

施設の使用に関しては、使用時間についてのものが20、使用許可についてのものが5あった。使用時間は、その殆どが、「もっと遅くまで学校を使いたい」であった。徹夜や泊まりで制作をしたい、それが無理でももっと遅くまで残れるようにしてほしい（せめて卒制前だけでも／あるいは簡易宿泊設備を作ってほしい）、というのが学生の意見である。使用許可は、手続きが煩雑すぎて簡便化してほしい、同じことを何枚にも書くのは面倒である、というものが殆どである。使用時間は、確かに学生の立場からすればもっと長く使いたいというのもっともである。限られた時間の中で如何にエネルギーを注ぐかも腕の見せ所であると思うのだが、追い込み作業で残って徹夜するのも学生の醍醐味であるようにも思う。一方、休日や夕方に遅くまで残って作業する学生が減ってきているような印象も筆者には残る。ただ、時間延長に相当数の意見が寄せられたのは事実であり、何らかのレスポンスは必要になると思われる。

### ☆3.5 当局への不満

重複を除けば17の意見が「当局への不満」に当たっている。決して無視してよい数だとは思えない。中でも90周年事業で行われた芝生への不満が多く、学生生活にあまり直結しないところでお金が使われている一方、学生に直結するところはどんどん厳しくなっていくと感じているようだ。本学を選ぶのには真面目で堅実な学生が多く、それはつまり実質を重視する学生ということである。そうした学生に応えられるよう、学生の立場に立って、学生の意見を聞こうとする姿勢を示しながら事業にあたるのが求められていると思われる。

### ☆3.6 施設・環境

一番多かったのが空調の整備である（7名）。あちこちで空調の老朽化が問題になっており、そのことへの苦情が目立ったようだ。また、集中管理エアコンの融通の利かなさも毎回挙がる問題である。ついで同票でATMとトイレが挙がる（総花的意見にもそれぞれ2件ずつよせられていたので、いずれも7票ずつ）。トイレに関しても毎回挙がりながらもおろそかになる施設である。全面改装や洋式トイレ化などはすぐにできるものではないが、「流れが悪い」という苦情は早々に対応できるだろう。動けるところから動いていくことが必要である。あとやや多いのは食料品系の自動販売機の設置である。これは購買の営業時間外に必要なものなので、そちらと絡めて検討が必要かもしれない。

一つ、学生相談も担当している筆者の観点から気になるのは、「ゆっくりできる場所が学内にほしい」という意見である。確かに、本学にはそのような場所が少ない。“一人でゆっくりとぼんやりできて放っておかれる場所”である。比較的図書館はその任を果たせそうであるが、それでも本を読んだりする場所であるという制約はある。保健室もあるが、その利用に当たっては事務室を経由することが必要で、それはいい面もあるが面倒なところでもある。ナイーブな学生は、かまわれずにいる場所で、守られて過ごすことで、少し自分のエネルギーを回復してまた現実に向かっていくことも少なくないと思う。少し検討してみたいと思う。

### ☆3.7 イベント

学内での学生間での交流（他領域他クラス・サークル・学祭）とそれ以外との交流（教員作品・特別講義・他大学）に大きく括る。

まず、学内学生間交流を取り上げる。サークル活動の不活発さや活気のなさに触れているものがいくつかある。そして、それを補うものとして、もう少しオフィシャルな形での（授業など）学生間交流を求めている声がいいくつかある。学生間交流を補うものとしては、例えばプロジェクト科目もそれに相当しようが、委託する事業の専門性から領域横断になるまでは至っていないのかもしれない。なお、領域横断を望んでいる学生の声として、「他のクラスの学生作品を見たい」「卒展や進級展のような他領域の作品と出会い触発される場がほしい」というものもあった。こうした意見を参考に、「キャンパスが美術館」の芸術月間として、学生の選抜展を行うというプランもあり得るだろう。学生というコンテンツをもっと活かしていく道もあるのではないかと。

それ以外の交流では、教員の作品展を望む声が目立つがこれについては以前に述べたのでここでは触れない。他大学との交流の要望は、総合大学か近くの美大なのか、もう少し聞いてみたいところではある。選択肢式回答でも希望が多かった。教職員にできることは限られているかもしれないが、そうしたニーズがあることは視野に入れておきたい。

### ☆3.8 その他

これは、全体的な意見表明や行き先が不明確な意見を分類した。また、たくさん挙げていて四つにおさまらない意見も「総花的意見」として「その他」扱いにした。

満足の声が11、不満の声が2であるが、不満の声は「当局への不満」などでもカウントされているため、この比較のみで満足の声が多いとはいえないことに注意されたい。満足の声は、その理由としてあげられているのが先生の応対や環境の良さである。「分析その1」の総合満足度での結果と等しい。

### ☆3.9 学生から多く寄せられている要望とは

以上、それぞれの意見を網羅的に見てきたわけだが、それを多い順に並べるとどうなるだろうか。これまでに見てきたカテゴリーは、上位カテゴリー（例えば領域や専門部署）と下位カテゴリー（購買やATM）があるが、上位カテゴリーのみで扱って差し支えない重みをもつもの（例えば当局への不満）もあれば、下位カテゴリーだけでも様々な意見が混じっているものもある。そこで、ここではこれまでの分析になされたまとまりをベースにカテゴライズした（例：「当局への不満」はそのまま。「購買」や「バス」は具体的な要望をもとにカウント）。

こうした場合、幾つ以上を「意見が多い」とするかは難しいところではあるが、ここでは7件以上とした。結果は表2の通り。なお、トイレとATMの値は表1より多くなっているが、それは総花的意見に含まれているものもカウントしたからである（その二つのみ；その他の項目は大体既に上位に入っているため）。また、購買は「品揃え」（21件）では拾わずに、より細かい「画材」としてリストアップした。「品揃え」でいくとトップにくる。

これを見ると、要望を寄せた学生の一割弱が「長い時間制作をしたい」と思っていることがわかる。年末の、学期末の追い込みシーズンに近い時期に調査した要因もあろうが、かなり多くを占めている意見であることには違いない。それに次ぐのが、効率的な予算運営や学生の意見聴取を求める「当局への不満」である。そして、図書館の時間延長を望む声がベスト3に入ってきている。時間延長の声で見ると、教室施設>図書館>事務室>購買>学生食堂、である。事務室の延長よりも図書館のほうが要望は多い。この三つに、「画材」のみをカウントした「購買の品揃え」と、学生食堂での「メニューの多様性」を含めた五つが、多くの学生が望んでいるものだ

表2：意見の多い項目

分類	件数
施設/使用時間	20
当局への不満	17
図書館/時間	13
学生食堂/メニュー	11
事務室/時間	10
購買/画材	9
購買/時間	9
バス/接続	9
バス/堅田方面	9
購買/値段	8
バス/20時台	7
学生食堂/時間	7
事務室/連携不足	7
工房/システム(ライセンス)	7
空調	7
トイレ	7
ATM	7

と理解してよからう。

#### 4. 満足度調査分野別総評

ここでは選択式の回答も含めて全体をまとめ、今後必要な方策を提言しておく。もちろん個人的な視点であるため領域の教員並びに担当部局の職員に異論もあると思われるが、何かを云わないと対話は始まらないので一つのたたき台として挙げておく。

##### ☆4.1 総合領域について

「いろいろ取れる」を求めて入ってきたが、「いろいろできる」は「道が定められない」のと裏腹である。学生たちもどういう風に道を定めていいのか迷いがあるように思う。それを「こうだ」と定めてしまうことも必要であるように思うのだが、それである意味楽になるだろうが魅力を失わせるリスクにも繋がりがかねない。多様性を活かしたまま、手応えある“総合領域らしさ”を見出すことができれば一番いい。しかしそれほど困難なテーマもないと思う。ただプロジェクト科目への指向性が高いなど、エネルギーのある学生が多いらしいのは一つのヒントになるだろう。「何かした」というエネルギーを如何に現実的につなげていくか、である。

##### ☆4.2 イラストレーション領域について

多くの学生を抱えている領域ながら、ここまでのまとまりと満足度を形成しているのは、並大抵のことではないと思う。イラストレーションという多様な分野を対象にしての満足度の高さは、学生のほうを向いて学生の望みに応じて教育しておられる辺りが評価されていると思われる。ただその多様さは、学生に課される課題の多さにも繋がっており、専門性が薄く感じられてしまう危険性もあることは若干名の学生が指摘した通りである。「裾野の広さ」と「専門性の深さ」は簡単に両立するものではない。ただこの「裾野の広さ」が今の学生たちのニーズに合っていることも確かである。

##### ☆4.3 美術領域

制作重視の学生が多いのが特徴である。その点、本学の環境面（制作に集中出来るところ）は評価されているが、学内での刺激が少ないと感じられているところは注意せねばならない。学内外での制作面での交流ができるよう配慮してもいいのではないか。満足度から見ると、評価の高い学生と低い学生が分かれているようである。必修授業の評価は平均以上でも、選択科目や制作サポート、キャリアなどの満足度は低い学年が多い。必修授業での満足は高いため領域で取り組める要素は少ないのかもしれないが、しかし学生にとって一番大事である必修授業で平均以上の満足度を出しているのに、なぜ全体としての満足度が下がるのかは熟考しなければいけない。

仮説に過ぎないが、「領域の先生と深く関われない」との意見と関係するのだろう

か。つまり授業としては満足であるが、授業以外での教員との交流が乏しく先生との間での触れ合いが不足している、という仮説である。もちろん仮説にすぎないのだが。

#### ☆4.4 メディアデザイン領域

いろいろ気になるところは多い。総合満足度も平均より低く、必修授業より選択授業の満足度が高くなっているなど、あまり喜ばしくない傾向が見られている（傾向として総合領域に近いものがある）。貸出機材などの面は満足が高いが、制作面での満足がどうも今ひとつのようである。必修授業に望むものとして選ばれた項目は、専門性や技術、スキルの向上につながる教育であった。必修授業の目標設定をどういうところにおくのか、今一度考える必要があるかもしれない。

#### ☆4.5 空間デザイン領域

回収率の低さもあって、領域の特徴とまでいい得る印象を紡ぎにくい。自由記述を詳しく見ると批判的なものがやや目立つが、総合満足度を見ると「1～3もないが9～10もない」となっており、批判的であるとはいっても総合満足度で低い点をつけるほどではないようだ。「何かいいたいのだが強く主張するほどの何かはまだ見つかっていない」・「あれでもないしこれでもないが、どれかは全くわからない」状態なのだろうか。それを具体的な何かに結実させて、ちゃんと手応えある「これ」として提示できる教育が重要となるということだろうか。

#### ☆4.6 選択授業

選択科目に求められているものに、「制作に関連する科目」と「多様性」、「キャリアの基礎学力」があった。

リメディアル教育的な、様々な基礎能力に関する選択科目は今後ますます求められるものとなろう。基礎学力もそうであるし、美術のデッサンなどの基礎能力もそうである。授業化・単位化していくことを今後検討していく必要がある。また、リメディアルではなく、上位層に向けた発展的な教育、つまり、授業で学んだ内容をさらに深めていく形での選択授業も検討されていだろう。このことを整理すると、「より制作に近い選択科目」の枠組として、「基礎能力の補充」(e.g. デッサン補講)と「美術能力の発展・伸張」(e.g. 現行のイラストレーション特別実習)の二種類と、そして、「キャリア科目の延長」として、「基礎学力の補充」(e.g. 現行のキャリア演習)、以上の三種類の科目を開発・整備していくことが求められている、となる。

なお、「能力の発展・伸張」系の科目については、今まで領域の必修科目としていた科目を積極的に全学開放していくという方針もある。それは「制作に関連する科目」の増加であり「多様性」を持たせることにも繋がる。領域を越えたつながりも生まれてくる。当然ながら、他領域の学生にも必修授業があり、(時間的/体力的に) そう簡単に領域を越えた専門授業を履修するわけにもいかないだろうが、比較的容易に実

現可能な施策であろう。

#### ☆4.7 内部組織

事務の開室時間や連携の問題は部署内で検討してもらうとして、もう少し具体的に検討が求められる項目を挙げてみる。

一つは、メディアセンターと工房の問題である。このどちらもが、一学科五領域となった時点で、全学に向けてどのような施設として位置づけるのかを検討しなければならない部署であった。現状は既存の施設をブラッシュアップしその延長上で運営されていると思われるが、領域制となったからには全学の学生に対してどのように制作支援を行っていきけるか検討していかねばなるまい。システムとライセンスを整備し(冊子や Semester ごとのガイダンスなどによって)学生にわかりやすいよう告知するとともに、ライセンス取得の機会をどれくらいの頻度でもうけるかなどもう少し検討してもいいだろう。学生が、領域の必修授業だけで留まってしまう、大学全体の組織を上手に活用できるよう、いろいろな工夫が必要である。教職員が連携してそれを考えねばならない。

次に「キャンパスが美術館」である。芸術月間はあったものの、学生たちにとって興味をもてるフックがあまりない展覧会が多いように思うのだ。学生たちが寄せた意見は、「教員の作品がもっと見たい」、「学生の作品交流がしたい」である。学生が知っている教員や学生の作品展のほうが学生にとって興味を湧くのは明らかである。「先生の昔(20代)の作品」という切り口でも面白いと思う(手元に作品がないかもしれないが)。ともかく、何か「手応え」ある作品展が求められている。

最後に、施設使用のことである。最終下校時間を延長できれば学生のニーズには合うのだろうが、それについては他大学の現状なども含めて比較検討する必要があるだろう。もちろんいろいろと危機管理上のことも考えると難しいことは多そうである。ただ、学生からの要望としては一番多く寄せられた項目であることだけは指摘しておきたい。

#### おわりに

ある学生から、「学生のことを考えてくれてないなと思うことがよくあります。地域連携とよくいうけれど、地域の人のことを考える前に、まずは学費を払っている学生を第一に考えてください」というものがあつた。この学生の総合満足度を見てみると7であった。決して低くはない。ちゃんと大学に期待しているからこそ、要望は寄せられる。もちろん学生の要望全てを叶えられるわけではない(し全て叶えたらいいというものでもない)が、しっかりと耳を傾ける姿勢は堅持したい。

今回寄せられた意見で、何名かから「このような機会があつてよかった」とのコメントがあつた。やはり学生は声を届けたいと思っているのだ。そんな学生の声に耳を

傾けるのは、大学人としての責務であろう。教育とはお互いが会う中で生まれるものであり、押しつけで可能になるものではない。対話が必要である。対話した上で、批判するところは批判し、受け入れるところは受け入れる。大切なのは、この意見を受けてなにができるか、である。各部署、各教員の真摯な態度が求められているし、また、上層部のバランスのいい判断もいっそう重要になるだろう。

……と、このようにまとめて、はや3年が経過した。ふり返ってみて、着実に変更されているところもあると思われる。トイレはキレイになったし、バスの時刻も見直された。学食もリニューアルされたし、工房なども次第に整備されてきた。事務室の開室時間も長くなった。もちろん全てに対応できていないが(図書館のことなど)、学生の声は着実に改善につながった。それらが大大的に喧伝されるわけではなく、地道におとなしく変わっていくのもある意味成安らしいところかもしれない。3年前の学生に何が伝えられるだろうか。「成安は少しずつよくなってるよ」、そう胸を張っていえる自分でありたいと思う。

満足度調査はまた新たに行われる。3年にわたって行った報告も、とりあえずこれで幕を閉じたい。また新たな要望が寄せられるであろうし、その学生の声には真摯に耳を傾けていきたいものである。たとえその要望を全て叶えることはできなくても、「いってよかった」「伝えてよかった」と思ってもらえることは可能である。そのような姿勢を示せる大学人でありたい。ここからそう思う。

#### 文献

- 山川裕樹 (2013). 2011年度大学満足度調査結果分析 (1) ～満足度篇～. 成安造形大学紀要, 4, 123-146.
- 山川裕樹 (2014). 2011年度大学満足度調査結果分析 (2) ～満足項目篇～. 成安造形大学紀要, 5, 43-72.



## 芸術系大学のキャリア支援科目を考える（3）

成安造形大学における新たな導入教育科目  
「スタディスキル実習」の開発：  
キャリア支援教育との連携を視野に

A Report on the Career Support Curriculum at  
Seian University of Art and Design (3)

千速 敏男

Toshio CHIHAYA



## 芸術系大学のキャリア支援科目を考える（3）

### 成安造形大学における新たな導入教育科目

#### 「スタディスキル実習」の開発： キャリア支援教育との連携を視野に

---

A Report on the Career Support Curriculum at Seian University of Art and Design (3)

---

千速 敏男

Toshio CHIHAYA

教授（美学美術史）

In order to discuss the career support curriculum at art universities, this paper reports the new system of introductory education of Seian University of Art and Design.

本稿では、成安造形大学における一年生への導入教育の一環として、筆者が2014年度に新たに開発した科目「スタディスキル実習」の概要を紹介する。この科目は、二年生・三年生におけるキャリア支援教育との連携を視野に開発されたものである。

なお、本稿は「芸術系大学のキャリア支援科目を考える（1）：成安造形大学『キャリアデザイン特講3』におけるミニッツ・ペーパーに寄せられた学生からのコメントを中心に」（『成安造形大学紀要』第4号37-54ページ、2013年）と「芸術系大学のキャリア支援科目を考える（2）：成安造形大学キャリアサポートセンター進路調査票の改良を中心に」（『成安造形大学紀要』第5号145-154ページ、2014年）に続く。

#### 新科目開発の背景

成安造形大学では、これまで、学生が自らのキャリアを考え、上級学年においては卒業後の就業を準備する機会として「キャリアデザイン特講1」（一年生）、「キャリアデザイン特講2」（二年生）、「キャリアデザイン特講3」（三年生）という講義科目を正課の授業として開講し、大半の学生が受講してきた。これらの科目は、ガイダンスを中心とする内容である。

そして、上記の「キャリアデザイン特講」を補完する科目として、就職活動における筆記試験のための基礎学力の向上、面接やグループ・ディスカッションにおけるコミュニケーション能力の強化と時事問題に対する関心の向上、履歴書やエントリー・シートのための文章力の養成、あるいはポートフォリオの制作といった、いわゆる「ジェネリック・スキル」を身につけることを目的として、「キャリアデザイン演習A」「キャリアデザイン演習B」「キャリアデザイン演習C」「キャリアデザイン演習

D」という演習科目を、筆者が中心となってこれまでに開発してきた。これらは、いずれも三年生を想定したものである。

しかし、基礎学力やコミュニケーション能力、文章力といった「ジェネリック・スキル」の養成は、三年生から学び始めるのでは間に合わないことが明らかになってきた。そこで、筆者は、「教養演習」という導入教育用に用意された科目の一部を代用し、一年生から受講できる選択科目として「教養演習 B1」「教養演習 B2」「教養演習 J1」「教養演習 J2」という演習科目をさらに開発した。

2012年度には、「キャリアデザイン特講」3科目、「キャリアデザイン演習」4科目、「教養演習」4科目と、すべての科目がそろったが、「キャリアデザイン演習」や「教養演習」は選択科目ということもあり、受講率は在籍者の半分以下にとどまっていた。これらの科目を受講した学生は順調に就職先を見いだせたものの、受講しなかった学生はなかなかよい結果が得られず、はがゆい思いで学生たちの就職活動を励ますことが続いた。

そこで、2014年度の新入生からカリキュラムを一新することになったとき、「ジェネリック・スキル」をキー・コンセプトとして導入教育とキャリア支援教育を連結する新たな導入教育科目を開発することにした。

## 新科目の科目名とそのねらい

「ジェネリック・スキル」の養成を目的とする実習科目であるので、「ジェネリック・スキル実習」という科目名がいちばんふさわしいと考えられたが、「ジェネリック」という外来語は学生たちに親しいものではない。

導入教育について、山田礼子氏は次のように説明している。(山田礼子「大学における導入教育の拡がり」と意義『大学と学生』通巻第503号、8ページ、2006年)

導入教育とは、高校から大学への学習面、生活面を含めての円滑な移行を目指すための教育であると定義できる。具体的には、(一) スタディ・スキル (一般的なレポート・論文の書き方や文献の探し方、コンピュータ・リテラシー) の教育、(二) スチューデント・スキル (大学生に求められる一般常識や態度) の教育、そして、(三) 専門教育への橋渡しとなるような基礎的な知識・技能の教育、の三つの側面である。

2014年度からのカリキュラム改善において、後述するように、スチューデント・スキルの養成を目的とする新科目「大学入門」が開設されることになったので、それに関連づけ、基礎学力やコミュニケーション能力、文章力といった「ジェネリック・スキル」の養成を目的とするこの新科目を、「スタディスキル実習」と名づけることにした。

さらに、「専門教育への橋渡しとなるような基礎的な知識・技能の教育」を担当す

る新科目として、「ファウンデーション実習A」「ファウンデーション実習B」「ファウンデーション実習C」も開設されることになった。

そして、これまで一年生を対象に開講してきた「キャリアデザイン特講1」も、「キャリアデザイン概論1」「キャリアデザイン概論2」と改称され、学期ごとに2科目に分割された。

## 新科目群の概要と相互関連

一年生を対象とする導入教育科目の名称がひとつとおり出揃ったところで、それぞれの科目の概要と相互関連を説明しておこう。

スタディ・スキルの養成に関しては、「スタディスキル実習」が担当する。1教室の定員は36名とし、一年生全員を無作為に組分けした。この実習科目は、毎週1回2コマ連続でおこなわれ、7.5回の授業で1単位を形成する。そのため、スタディスキル実習1」は前期の前半で終了し、前期の後半に開講する「スタディスキル実習2」に接続する。後期の「スタディスキル実習3」と「スタディスキル実習4」の関係も同様である。

スチューデント・スキルの養成について、「大学入門」が担当する。この科目は一年生全員がひとつの教室で受講する講義科目である。この講義科目は、隔週1回1コマでおこなわれ、7.5回の授業で1単位を形成する。そこで、前期に「大学入門1」、後期に「大学入門2」が開講されることになる。

そして、「大学入門」の授業のない週の同時時間帯に「キャリアデザイン概論」をはじめこんで開講した。学生にとっては、卒業後のキャリアを考えることも重要なスチューデント・スキルだからである。こちらも、一年生全員がひとつの教室で受講する講義科目であり、「大学入門」と同様に7.5回の授業で1単位を形成し、前期に「キャリアデザイン概論1」、後期に「キャリアデザイン概論2」を開講する。

「専門教育への橋渡しとなるような基礎的な知識・技能の教育」を担当する科目は、3分野に分けた。

専門的な造形教育への橋渡しとなるような基礎的な教育については、「ファウンデーション実習A」が担当する。1教室の定員は24名とし、各領域での授業を考慮して一年生全員を組分けした。この実習科目は、「スタディスキル実習」と同様に、毎週1回2コマ連続でおこなわれ、7.5回の通常授業で1単位を形成する。そのため、ファウンデーション実習A1」は前期の前半で終了し、前期の後半に開講する「ファウンデーション実習A2」に接続する。後期の「ファウンデーション実習A3」と「ファウンデーション実習A4」の関係も同様である。

コンピュータ・リテラシーは、通常、スタディ・スキルに含まれるが、成安造形大学の場合、コンピュータによる画像処理は、専門的な造形教育の基礎をなすものである。そこで、「専門教育への橋渡し」のひとつととらえ、「ファウンデーション実習

B」が担当することとした。1教室の定員は30名前後とし、学生一人ひとりの高等学校までにおけるコンピュータ・リテラシーを考慮して一年生全員を組分けした。この実習科目は、毎週1回1コマでおこなわれ、15回の授業を1単位を形成する。前期に「ファウンデーション実習 B1」、後期に「ファウンデーション実習 B2」を開講する。

専門的な造形教育をおこなう芸術系大学におけるリメディアル教育は、素描が中心となる。そこで、素描力の向上を目的とした導入教育科目として、「ファウンデーション実習 C」を用意した。この科目は、夏期休暇期間に「ファウンデーション実習 C1」、春期休暇期間に「ファウンデーション実習 C2」が、それぞれ集中型の実習授業として開講され、それぞれ1単位を形成する。履修を希望する学生を募る一方、「ファウンデーション実習 A」の授業を通じて素描力が劣ると判断された学生には履修を勧めた。

なお、成安造形大学では、リメディアル教育として一般的に考えられている基礎学力の向上については、後述するように「スタディスキル実習」が担当している。

以上が2014年度のカリキュラム改善において一年生全員に履修を指示した科目であるが、これらに加えて、既存の「東洋・日本美術史概説 A」「東洋・日本美術史概説 B」「西洋美術史概説 A」「西洋美術史概説 B」「デザイン史概説 A」「デザイン史概説 B」という6科目（各2単位）の講義科目を単位数で三分の二以上履修するように指示した。

一年生が指示どおりにこれらの科目を履修し、各領域における専門科目を履修すると、履修登録単位数は、各学期における上限単位数24にかなりちかいものとなり、一年生が自由に選択できる選択科目は英語や体育など、ごく限られたものになるが、今回のカリキュラム改善では、一年次を導入教育の期間ととらえ、あえて選択幅を狭めた。なお、各領域における専門科目も一年次は「専門導入課程」として構成されている。

## 「スタディスキル実習」と「大学入門」のより緊密な連携

一年次の導入教育科目のなかでも、「スタディスキル実習」とスチューデント・スキルを養成する「大学入門」とは、より緊密な連携をとるように心がけた。

「大学入門」は、「教養演習」という導入教育用に用意された科目の一部を代用して2012年度から開講した「教養演習 K1」を発展させたもので、筆者も担当を分担している。

## 「スタディスキル実習」と「大学入門」の目的と到達目標

まず、「スタディスキル実習」と「大学入門」の目的と到達目標を確認しておこう。

「スタディスキル実習」の目的は、基礎学力やコミュニケーション能力、文章力と

いった「ジェネリック・スキル」の養成にあるが、学生に配布するシラバスには以下のように記した。

成安造形大学での学生生活を充実させるために、領域での専門的な学修の基礎となる知識や技能を学びます。グループ・ディスカッションやワークショップをとおして、コミュニケーションの能力を高めます。社会人として必要な基礎学力を確かめます。

一方、スチューデント・スキルの養成を目的とする「大学入門」は、シラバスに以下のように記した。

成安造形大学での新たな学生生活を有意義に過ごすためには、自主的に学ぶこと、つまり計画的に自己開発していくことが重要です。しかし、その手がかりをつかめなまま大学生活を過ごしてしまう学生も見受けられます。充実した学生生活を送るために、この授業をとおして、大学での学び方を理解し、大学での生活に慣れ、意欲的に学生生活を送るための基礎をつくりましょう。

また、「スタディスキル実習」の到達目標として以下の5点をシラバスに記した。

- (1) グループ・ディスカッションでお互いに意見交換することができる。
- (2) ワークショップで自らを表現することができる。
- (3) 新聞をよく読み、広く社会の動きを知る。
- (4) 芸術系大学で学ぶ学生として知っておくべき基礎知識を身につける。
- (5) 国語や数学を中心とした基礎学力を身につける。

一方、「大学入門」の到達目標は以下のとおりである。

- (1) 自分が学ぶ成安造形大学について知り、「成安」の一員であることを自覚する。
- (2) 学生生活を充実させるための知識や技能を身につける。
- (3) 自らを表現する力を身につけ、コミュニケーション能力を高める。

## 「大学入門」の授業内容

次に授業内容を紹介するが、「スタディスキル実習」の授業内容を詳細に説明する前に、「大学入門」の授業内容の概要を述べておくことにする。

「大学入門」は、ガイダンスなどを除くと、前期・後期とも7回ずつ通常の授業をおこなっている。それぞれの回におこなった授業内容は、下記のとおりである。[ ]に担当者を記した。

## 前期「大学入門1」

- (1) 情報メディアセンターのライセンス講習と学生会と各サークルの紹介 [学生支援部門]
- (2) 大学周辺の生活情報 [学生支援部門] / ゴールデンウィークに見るべき展示会の紹介 [筆者]
- (3) 関西の主要な美術館・ギャラリー・書店の紹介 [筆者]
- (4) 各領域で助手を務める卒業生による座談会 [筆者、助手5名]
- (5) レポート対策講座①：図書館と百科事典の使い方 [筆者]
- (6) 「合評会」とはどのような授業なのか [泊博雅教授]
- (7) レポート対策講座②：レポートのしくみ [筆者]

## 後期「大学入門2」

- (1) 各領域の上級生による座談会：時間をじょうずに使おう [学生支援部門]
- (2) 英語を学ぼう [島先京一准教授] / 地域連携推進センターの紹介 [学生支援部門]
- (3) 情報をキャッチしよう、情報をファイルしよう [泊博雅教授]
- (4) 大学生が知っておくべき現代社会の諸問題 [学生支援部門、大津市保健所、滋賀県警]
- (5) 卒業生、高橋静香氏による講演
- (6) 物語と心 [山川裕樹准教授]
- (7) 一年間をふりかえって [山川裕樹准教授、学生支援部門]

なお、毎回、授業の最後でミニツッペーパーを学生に書かせ、その内容を学生支援部門で整理して次回の授業での配付資料とし、授業の冒頭でその内容にふれるようにした。上記の授業内容には出てこないが、これも重要な授業の一要素となっている。

## 「スタディスキル実習」の授業内容（1）：ワークショップ

「スタディスキル実習」の授業内容は、大きく4分野に分かれる。1) ワークショップ、2) グループ・ディスカッション、3) NIE (Newspaper in Education)、4) 基礎学力の補習である。

ワークショップとしては、3つの活動をおこなった。1) 入学直後に3回の授業(合計6コマ)を用いておこなった紙コップと洗濯ばさみによる造形活動のワークショップ、2) 前期の7月上旬におこなったフィンガー・フードを調理し、展示するワークショップ、3) 後期の12月中旬におこなった身体でコミュニケーションをとるワークショップの3つである。

紙コップと洗濯ばさみによる造形活動のワークショップ [図1] は、ひとつの共同作業を通じて新入生がお互いに顔見知りになることを目的に、一年生全員を体育館に



図1：紙コップと洗濯ばさみのワークショップ



図2：フィンガー・フードのワークショップ



図3：身体でコミュニケーションをとるワークショップ

集め、3週にわたって実施した。できるだけ高く紙コップを積み上げてみたり、洗濯ばさみをつないでさまざまなかたちをつくったりしたあと、第3回の授業では、それぞれグループに分かれて、美しい造形作品づくりに励んだ。

幼稚園児や障がいのある子どもたちに対して造形教育をおこなってきた島先京一准教授がこれまでに培ってきた方法を活用し、大学生向けに組み立てなおしたものである。なお、本紀要の島先准教授の論考においても、このワークショップへの言及があるとのことである。

7月におこなったフィンガー・フードのワークショップ [図2] は、昨年まで「教養演習 K1」の授業の一環としておこなわれてきたワークショップを受け継いだものである。

「教養演習 K1」では、共同作業を体験させるために、7月下旬に成安造形大学のグラウンドで開催される「成安音頭」という盆踊りのような行事にあわせて、一年生全員に模擬店の運営をやらせてきた。盆踊りの櫓の周囲に10以上の模擬店が並ぶ光景はすばらしいものだったが、ちょうど入学して最初の合評を迎える時期でもあり、学生の負担はけして小さいものではなかった。

そこで、新しいカリキュラムに組み込む際、より負担の少ない、ビスケットやクラッカーの上に食材をのせたフィンガー・フードを展示して、調理と展示を競い合うというワークショップに変更した。当日は、一年生や見学にきた教職員に投票してもらい、優秀なグループを表彰した。

ワークショップの前、2回にわたってワークショップの準備をグループ・ディスカッションのテーマとしたが、実際におこなう作業の打ち合わせが授業のテーマとなったので、より実感のこもったものになったようだ。

12月のワークショップ [図3] は、ダンス・カンパニー「モノクロームサーカス」のみなさんが指導にあたってくださった。ことばを用いず、身体だけでコミュニケーションをとってみようという試みであるが、これも、昨年まで「教養演習 K1」の授業の一環としておこなわれてきたワークショップを受け継いだものである。造形活動に隣接するダンスやパフォーマンスという身体を用いた活動を体験させることで、学生自身が造形活動に対して見識を深めていくことを願っている。

## 「スタディスキル実習」の授業内容 (2) : グループ・ディスカッション

グループ・ディスカッションには5月の大型連休明けから取り組み、1教室36名を6名1グループの6グループに分け、指定したテーマで議論をさせた。毎回のテーマは後述のとおりだが、5月にはNIEの導入もグループ・ディスカッションのテーマに組み込み、また6月は上記のフィンガー・フードのワークショップの準備もグループ・ディスカッションのテーマとした。さらに、「大学入門」での卒業生の座談会や講演も、その直後の授業でグループ・ディスカッションのテーマとした。

また、ワークショップをおこなった回も含めて、毎回、授業の最後にはミニツペーパーあるいはブリーフレポートを学生に書かせるようにした。授業の感想だけでなく、議論した結果をかたちにさせるように心がけ、各グループに A3版の白紙を配り、そこに議論の結果をまとめさせて、授業のおこなわれる教室の外の壁に貼りだすような試みも繰り返した。

なお、グループ・ディスカッションの指導には、株式会社モーリスから派遣されたインストラクターのみなさんの協力を得た。「スタディスキル実習」では、一年生全員が6教室に分かれて同時に授業に臨んだが、均一な授業内容を各教室に提供するためには、グループ・ディスカッションの指導を専門とする外部講師のほうがよいと判断したからである。

筆者は、事前に毎回の授業の内容を企画してグループ・ディスカッションのテーマを設定し、授業時間内は各教室を巡回した。また、後述するように、授業終了後には学生から提出された自宅課題を採点している。

では、テーマの詳細を列記しよう。なお、「スタディスキル実習1」の最初の3回は、紙コップと洗濯ばさみのワークショップだったため、グループ・ディスカッションはおこなっていない。また、「スタディスキル実習2」ではフィンガー・フードのワークショップで1回、「スタディスキル実習4」では身体を用いたワークショップで1回、それぞれグループ・ディスカッションをおこなっていない。グループ・ディスカッションをおこなっていない回は、[ ] で授業内容を記した。

#### 前期「スタディスキル実習1」

- (1) [紙コップと洗濯ばさみのワークショップ①]
- (2) [紙コップと洗濯ばさみのワークショップ②]
- (3) [紙コップと洗濯ばさみのワークショップ③]
- (4) ひととなりを知るための25の質問
- (5) 新聞のしくみとその意義
- (6) 関西の美術館をめぐるツアーを考えてみよう
- (7) 関西三都：京都・大阪・神戸

「ひととなりを知るための25の質問」は、もちろん、自己紹介をかねた内容である。「新聞のしくみとその意義」は、5月下旬からはじめるNIEの準備としておこなったもので、全国紙5紙と地方紙1紙を1週間分、各グループに配り、新聞の構成を再確認させた。

「関西の美術館をめぐるツアーを考えてみよう」と「関西三都：京都・大阪・神戸」は、これから4年間学ぶことになる成安造形大学のある関西地区について、芸術・文化を中心に調べさせたものである。スマートフォンが普及したこともあり、グループ・ディスカッションの途中で調べるのがたいへん容易になった。

### 前期「スタディスキル実習2」

- (1) 各領域で助手を務める卒業生による座談会を聞いて
- (2) 新書で教養を高める
- (3) 気になる雑誌をあげてみようか
- (4) フィンガー・フードのワークショップのための打ち合わせ①
- (5) フィンガー・フードのワークショップのための打ち合わせ②
- (6) [フィンガー・フードのワークショップ]
- (7) 夏休みに見るべき美術館と展覧会

「各領域で助手を務める卒業生による座談会を聞いて」は、直前の「大学入門1」でおこなった座談会を振り返らせる内容である。

「新書で教養を高める」では、筆者私有の新書を各教室に100冊ずつ配り、自由に手に取らせた。昨今では新書というジャンルの本があることを知らない学生が少なくない。

「気になる雑誌をあげてみようか」では、図書館が定期購読している雑誌を芸術分野を中心に選び出し、その表紙と目次をカラー・コピーして各グループに配った。

すでに述べたように、フィンガー・フードのワークショップのための打ち合わせは、2回連続でやらせた。

「夏休みに見るべき美術館と展覧会」と後期最初の「夏休みに見た展覧会、読んだ本」は、もちろん夏期休暇を無駄に過ごさせない老婆心である。

### 後期「スタディスキル実習3」

- (1) 夏休みに見た展覧会、読んだ本
- (2) ジブリ映画を語ろう
- (3) 行ってみたい土地、行ってみたい国
- (4) あなたのふるさと、教えてください
- (5) 比叡のふもと、琵琶湖のほとり
- (6) 都市と田園
- (7) 懐かしい風景を描いてください

「ジブリ映画を語ろう」は、教職員有志でこの科目について話し合いしたときに出た「同世代の間で共有できる話題で議論させてみてはどうか」という提案を受けたものである。グループ・ディスカッションのあと、グループごとにA3版の白紙に意見をまとめさせ、その結果を廊下に掲示した。

「行ってみたい土地、行ってみたい国」以降の一連のテーマは、「大学入門2」での地域連携推進センターの紹介と関連している。成安造形大学は「芸術による社会への貢献」を基本理念としており、地域連携推進センターはその実践の中心となっている。自己と地域社会との関連を3回にわたって議論させ、「芸術による社会への貢献」

に対する学生の関心を高めた。

さらに、それを受けて、島先京一准教授の提案で「都市と田園」の差異について議論させた。このテーマは、近代社会とデザインを考える際にも重要であろう。

そして、都合4回にわたるディスカッションのまとめとして、事前に描いてきた「懐かしい風景」を見せ合うワークショップにちかいかたちのグループ・ディスカッションをおこなった。

後期「スタディスキル実習4」

- (1) 自分をたとえると
- (2) 自分のこだわりを図にしてみると
- (3) 卒業生、高橋静香氏による講演を聞いて
- (4) わたしたちの新語・流行語大賞
- (5) 新聞を読み比べてみよう
- (6) [身体でコミュニケーションをとるワークショップ]
- (7) 18歳は大人か？ 子どもか？

「自分をたとえると」と「自分のこだわりを図にしてみると」、およびモノクロームサーカスによる「身体でコミュニケーションをとるワークショップ」は、「スタディスキル実習3」で育んだ社会への眼差しを一転して、自己へと向けさせるものであった。「自分のこだわりを図にしてみると」は、トニー・ブサンの提案する「マインド・マップ」から着想したものだが、とくにブサンの流儀にはこだわらず、学生たちには自由に図を描かせるようにした。

「卒業生、高橋静香氏による講演を聞いて」は、直前の「大学入門2」でおこなった講演をふまえたものである。講演の内容は、高橋氏が大阪市内にアートスペースを開設した経緯であった。詳細は『博物館学芸員課程実習報告』第16号（成安造形大学博物館学芸員課程，2014年）に掲載された高橋氏の「卒業生活動報告：アートスペース＋ギャラリー『あべのま』」を参照されたい。なお、グループ・ディスカッションの最後にA3版の白紙にグループごとに意見をまとめさせ、廊下に掲示した。

「今年の新語・流行語大賞は？」では、毎年12月初旬に発表される新語・流行語大賞を利用し、大賞候補にあがった新語・流行語50語に加えて、5語を学生たちに自由に追加させ、そのなかからグループごとにベスト5を選ばせた。この回も、最後はA3版の白紙にグループごとに意見をまとめさせ、廊下に掲示した。

「新聞を読み比べてみよう」は一年ちかく続けてきたNIEのふりかえりが目的であり、「18歳は大人か？ 子どもか？」は、一年間の大学生活全体をふりかえらせることをねらいとした。

以上のように、何回かの授業を連続させたり、「大学入門」と連携させて、毎回のグループ・ディスカッションを指導してきた。グループ・ディスカッションをおこなった回数は、1年間を通して23回におよぶ。

### 「スタディスキル実習」の授業内容（3）：NIE（Newspaper in Education）

新聞を毎日読むようにさせることも、「スタディスキル実習」の重要な課題とした。卒業後、どのような分野で就業するにしても、あるいは作家として活動していくとしても、社会に対する広く深い眼差しが求められるからである。

そこで、「スタディスキル実習1」の第5回の授業で「新聞のしくみとその意義」をグループ・ディスカッションのテーマとし、あわせて第6回以降の自宅課題として以下に掲載した作業をさせることにした。

そして、「スタディスキル実習1」の第6回以降は、授業の最初、つまりグループ・ディスカッションに入る前に、自宅課題として用意した新聞記事をグループ内でそれぞれ紹介させるようにした。したがって、ワークショップをおこなわない通常の授業のときは、学生たちは、6名1グループのグループに分かれたのち、まず用意した新聞記事を紹介し、それからその日のグループ・ディスカッションのテーマに取り組んだのである。

新聞記事の文章は、義務教育を終えた者であれば誰もが読める平易な文章であるから、大学卒業後、社会人として文章を書く際の手本にはふさわしいはずである。成安造形大学の卒業生の多くは、デザイナーとして活動しているが、仕事の一環として企画書を書くことが多いという。平易な文章を書き、要約し、意見をまとめ、グループ・ディスカッションで発表する。これを繰り返すことによって文章力の向上はあった。

すでに「教養演習B1」で履修者にこの課題を課していたので、新聞を購読していない下宿生のために、図書館では全国紙5紙と地方紙1紙を1週間分、開架で自由に閲覧できるようにしてもらってあったが、一年生全員がこの課題に取り組むことになったので、2014年のカリキュラム改善と同時に発足した共通教育センターの共同研究室でも全国紙5紙と地方紙1紙を1週間分、開架で自由に閲覧できるようにした。

「教養演習B1」は選択科目だったため、意欲的な履修者のみだったが、「スタディスキル実習」は一年生全員である。なかには意欲の乏しい学生もいるかと考え、新聞記事を用意してくるだけの「入門コース」を設定したが、実際には「入門コース」を利用する者は特定の学生に限られた。そこで、後期からは「入門コース」を廃止し、「初級コース」以上とした。

一方、「最上級コース」は、期待に反し、さほど提出されなかった。小論文を書くことに対する苦手意識は、かなり高いようである。

後期からは、授業の最後で新聞記事を紹介しあうとき、聞く側の学生に紹介する学生の発表の仕方をコメント・シートで評価させるようにした。評価項目は、

- ① 声の大きさ
- ② 話す速さ
- ③ 主張がはっきりしていた

## 「新聞を読もう！」自宅課題について

- 1) 毎回、授業のときに教室で自宅課題を提出してください。
- 2) 提出した自宅課題は、確認の署名をしたのち、次回以降の授業で返却します。
- 3) 自宅課題には次の5コースがあります。毎回、いずれかのコースを選んで提出してください。
- 4) 自宅課題の表紙（共通教育センター指定）に、領域、学籍番号、名列番号、氏名、提出日、コース別を明記し、自分が選んだ新聞記事の情報を記してください。また、「自宅課題見本」を参照し、ホッチキスでとめて提出してください。

**入門コース（4点満点）**——興味をもった新聞記事（800字以上）をA4版かA3版の大きさの用紙に複写する。自分が所有する新聞の場合は記事を切り抜き、A4版かA3版の大きさの紙に貼り付けてもよい。その後、自宅課題の表紙に必要な事項を書きこむ。筆記用具は、鉛筆かシャープペンシルでよい。記事の複写を最後に付けること。

**初級コース（5点満点）**——興味をもった新聞記事（800字以上）をA4版かA3版の大きさの用紙に複写する。自分が所有する新聞の場合は記事を切り抜き、A4版かA3版の大きさの紙に貼り付けてもよい。その後、成安造形大学指定の原稿用紙に縦書きでその記事を正確に手書きで書き写し、すべての漢字にふりがなをつける（読み方のわからないことばは、辞書などで調べること）。筆記用具は、鉛筆かシャープペンシルでよい。記事の複写を最後に付けること。

**中級コース（6点満点）**——興味をもった新聞記事（800字以上）をA4版かA3版の大きさの用紙に複写する。自分が所有する新聞の場合は記事を切り抜き、A4版かA3版の大きさの紙に貼り付けてもよい。その後、成安造形大学指定の原稿用紙に縦書きでその記事を正確に手書きで書き写し、すべての漢字にふりがなをつける（読み方のわからないことばは、辞書などで調べること）。そして、その記事の分量の10%以上20%以内の分量で記事の要点をまとめる（たとえば、800字の記事であれば、80字以上160字以内）。筆記用具は、鉛筆かシャープペンシルでよい。記事の複写を最後に付けること。

**上級コース（7点満点）**——興味をもった新聞記事（800字以上）をA4版かA3版の大きさの用紙に複写する。自分が所有する新聞の場合は記事を切り抜き、A4版かA3版の大きさの紙に貼り付けてもよい。その後、成安造形大学指定の原稿用紙に縦書きでその記事を正確に手書きで書き写し、すべての漢字にふりがなをつける（読み方のわからないことばは、辞書などで調べること）。そして、その記事の分量の10%以上20%以内の分量で記事の要点をまとめる（たとえば、800字の記事であれば、80字以上160字以上）。さらに、その記事の分量の10%以上20%以内の分量で記事に対する自分の意見を述べる。筆記用具は、鉛筆かシャープペンシルでよい。記事の複写を最後に付けること。

**最上級コース（10点満点）**——興味をもった新聞記事を2件（同じ日に同じ新聞に掲載された記事2件は不可）とりあげ、A4版かA3版の大きさの用紙に複写する。自分が所有する新聞の場合は記事を切り抜き、A4版かA3版の大きさの紙に貼り付けてもよい。これらの記事に共通するテーマから問題を提起し、自由に論ずる。分量は、1,000字以上2,000字以内とする。以下のような構成にすること。

- ① 記事の概要をそれぞれ説明する形式段落
- ② これらの記事に共通するテーマを明らかにし、問題を提起する形式段落
- ③ 問題提起を受け、自分の意見を述べる形式段落
- ④ 自分の意見が有意味であることを事実によって論証する形式段落

なお、最上級コースにかぎらず、提出は手書きでもコンピュータによる出力でもよい。手書きの場合は、成安造形大学指定の原稿用紙に縦書きで執筆すること。コンピュータによる出力の場合は、A4版の白紙を用い、25ミリメートルの余白をとり、禁則処理をほどこして10ポイントの明朝体で出力すること。縦書きでの出力ができない場合は、横書きでの出力でもよい。手書きの場合も、コンピュータによる出力の場合も、記事の複写を最後に付けること。

### 【注意事項】

新聞を毎日読む習慣をつけることも、この課題の目的のひとつですので、この課題に用いる新聞記事は、提出日から2週間前までの記事とします。また、インターネット上の新聞記事も認めません。

以上

- ④ 構成がまとまっていた
- ⑤ 興味深かった

の5項目で、いずれも5段階評価とした。同級生を評価することにためらいをもつ学生も出るかと案じたが、思いの外、学生たちは落ち着いて評価したようである。これは、作品を評価しあう合評が当然のように存在する芸術系大学だからだろうか。後期の半ば以降は、コメント・シートの余白に感想などを書き添えて発表した学生に渡す学生も現れるようになった。

提出された自宅課題は、次回までに採点し、返却した。なお、後期からは島先京一准教授も採点に加わってくれた。

新聞記事を素材とした自宅課題は、1年間を通して20回課せられた。

#### 「スタディスキル実習」の授業内容（4）：基礎学力の補習

大学センター試験を利用した学生を除くと、成安造形大学の入学者は実技試験しか受けていない。そのため、高等学校までで習う国語や数学の実力には大きな差がある。

さらに、芸術系の高等学校の場合、数学が一年生で終わってしまうところもあり、うかうかしていると、大学四年生になって採用試験を受けるまで、5年間、数学にふれないままという学生も出てくることになる。これでは、筆記試験を通過して面接に臨むことがむずかしい。

既存のカリキュラムでは、三年生を対象とした「キャリアデザイン演習B」「キャリアデザイン演習C」「キャリアデザイン演習D」、一年生と二年生を対象とした「教養演習B1」「教養演習B2」「教養演習J1」「教養演習J2」で、基礎学力の補習がおこなってきたが、前述のとおり、履修者は学年の半分にも満たない。そこで、一年生から基礎学力の補習ができる体制づくりが望まれていた。

しかし、国語や数学の授業に苦手意識をもつ学生は多いので、慎重に進めなければならない。紙コップと洗濯ばさみのワークショップでお互いに顔見知りになり、グループ・ディスカッションを何回か繰り返し、新聞記事を用いた自宅課題を課すようになったあと、つまり「スタディスキル実習1」の第7回の授業の最後でようやく、義務教育修了レベルの漢字の書き取りと方程式を利用すれば解ける数学の問題を出題したプレイズメント・テストを実施した。

テストの結果、漢字の書き取りは正答率が平均で60%を超えていて一安心できたものの、数学は過半数の学生が正答率50%未満という厳しい状況だった。とはいえ、この数学の状況は、これまで「キャリアデザイン演習」や「教養演習」を担当してきた筆者からすれば、予想どおりでもあった。

この最初のプレイズメント・テストからは、もうひとつ分かったことがある。それは、学力低位層の本当の学力の一端がみえたということである。これまでは、三年生

の「キャリアデザイン特講3」のなかで、外部の業者が実施する採用試験の模擬試験を受験させてきたが、この模擬試験の受験率は例年75%前後であった。20%以上の学生が試験を嫌って受験しなかったのだが、彼らの多くは学力低位層に位置づけられるだろうと「想像」するしかなかった。ところが、今回のプレイズメント・テストは一年生の95%以上が受験したので、これまで試験を嫌って受験しなかった学力低位層の実態が見えてきたのである。

このプレイズメント・テストの結果をふまえて、「スタディスキル実習2」以降は、授業の最後の30分間を基礎学力を補習するための時間とした。

学習用の教材としては、市販の義務教育レベルの問題集を参照して、漢字の読み書きを1枚に100題掲載したプリントを27枚と、方程式の計算や文章題を中心とした数学のプリント25枚を用意し、共通教育センターの共同研究室前の廊下に設置した書類棚に納め、学生が自由に取出せるようにした。なお、漢字のプリントの作成には、小善善通教授、山本和人教授、島先京一准教授、山川裕樹准教授も協力してくれた。また、後期からは島先准教授が英語の補習用教材を作成してくれるようになった。

さらに、後期の「スタディスキル実習3」からは、とくに数学の点数がよかった学生を1教室にまとめ、公務員試験用の資料分析の問題などを提供するようにした。こうした学生たちには、方程式の問題が物足りないものだったからである。

「スタディスキル実習2」以降、各実習の第7回にプレイズメント・テストを実施した。学習意欲を高めるため、「スタディスキル実習2」では漢字の書き取りのテストの結果を成績評価に反映させることとし、後期の「スタディスキル実習3」以降は数学のテストの結果も成績評価に反映させることとした。

「スタディスキル実習2」の第7回におけるプレイズメント・テストの結果は、予想以上によいものだった。とくに、過半数を超えていた数学の正答率50%未満の学生が、三分の一にまで減ったのである。学生たちが書いたミニッツペーパーにも、中学校や高等学校で習ったことを思い出してきたという内容が散見され、少しでも補習すれば、基礎学力が向上することがわかった。

ただし、これは学力中位層以上のことを留意しておかなければならない。学力低位層にはほとんど変化が見られなかった。これは、後期に2回実施したプレイズメント・テストでも同じだった。筆者のオフィス・アワーを活用し、質問を受ける機会を繰り返し設けたが、こうした機会に姿を見せるのは学力中位層以上の学生ばかりであり、学力低位層が質問に来ることはなかった。

いくつかの業者から届いた補習用教材のサンプルを見てみると、どれも、数学は小学校レベルまで戻って補習するようになっている。たしかに、そこまで戻った補習用教材も必要なのであろう。次年度以降の課題のひとつである。

余談だが、インターンシップとしてデザイン事務所などで就業体験をした三年生たちのレポートを読んでいると、プロのデザイナーたちがデザインを「数値」で管理していることに驚く声が多い。なんとなく見た目だけで制作してきた学生たちにとって、

たとえば色彩の明度を3ポイント上げたバージョンと5ポイント下げたバージョンを作成し、3つのバージョンを顧客に見比べさせたりする作業は新鮮だったようだ。と同時に、学生たちはデザインにも「数字」が要ることに気づくことになる。

## 次年度の「就業力育成演習」に向けて

以上が、2014年度に一年生への導入教育の一環として開発してきた「スタディスキル実習」の概要である。次年度には一年生が二年生に進級することになるが、目下、この「スタディスキル実習」に接続するキャリア支援科目として「就業力育成演習」を開発しているところだ。この「就業力育成演習」では、ひきつづきNIEをおこなう一方、採用試験での筆記試験の対策にも取りかかる予定である。

# 特別研究助成 状況報告

津田 睦美 准教授

田中真一郎、大草真弓、加藤賢治、石川 亮、由井真波

研究・制作テーマ：

芸術系大学で「コミュニティデザイン」を学ぶ意義

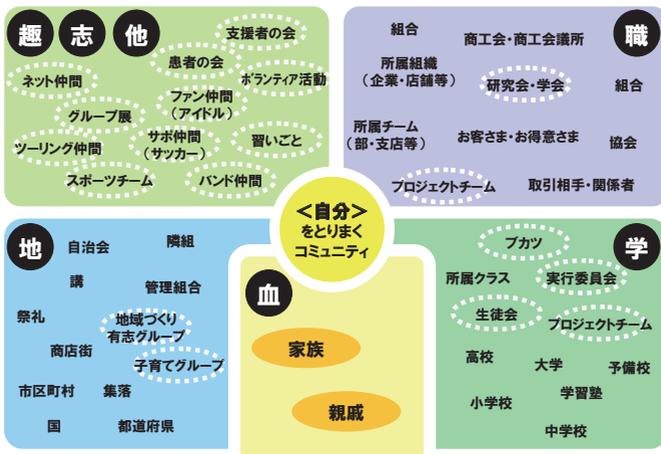
COC（文部科学省：地（知）の拠点整備事業）への応募をきっかけに、成安造形大学のコミュニティデザインを考えようという主旨でたちあがった研究会には、総合領域教員、職員メンバーに加えて、京都を拠点に活動するコミュニティデザイナーの由井真波氏（リンク・コミュニティデザイン研究所代表）にアドバイザーとして参加していただいた。

ミーティングは、成安造形大学、リンク・コミュニティデザイン研究所でほぼ月1回のペースで行い、議論を重ねた。6月には、滋賀県立大学の仁連孝昭副学長が代表を務めておられる地域共生センターを訪問し、COC（文部科学省：地（知）の拠点整備事業）に採択された経過や、大学の活動について話を聞き、成安造形大学における可能性について意見交換をした。

本研究会の目標は、ものづくりをベースにした「美術系大学のコミュニティデザイン」を考え、平成27年度から全学向けに新規開講される新規授業「コミュニティデザイン概論」の内容を具体的に検討することであった。研究会で検討してきた「コミュ

コミュニティ・あれこれ

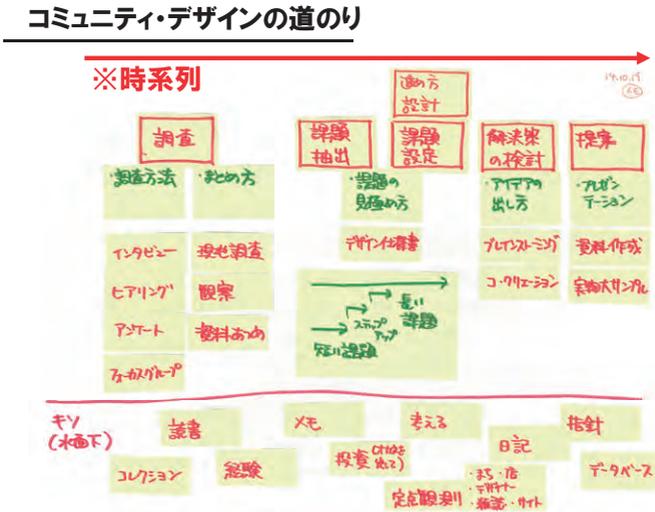
すべてがコミュニティ・デザインのフィールドだ！



「コミュニティデザイン概論」は、平成27年度開講に向け共通教育センターに引き継がれシラバスに落とし込まれる。

本研究会は、2月に「芸術系大学で『コミュニティデザイン』を学ぶ意義」と題し、学内で研究発表報告会を開催した。ここでの提言を活動の成果として、今後本学の教育に活かしていきたいと思う。

図表は報告会に向け作成中のものを一部抜粋。(作成：由井真波)



### コミュニティ・デザイン実践例

成安造形大学の領域から



山川 裕樹 准教授 (心理臨床学・学生相談)

研究・制作テーマ：

創作活動における創造的変容について

～「転機」をキーワードにした面接調査から～

### 1. 研究の目的及び概要

心理療法の過程において、以前のありようとは次元を異にする創造的な変容が存在している。苦しみの中から何かを獲得したり、その人にとってあってほしくないと感じられていた傷つきがその人のアイデンティティを支えたり、自分自身の限界に気付くことで逆説的に飛躍したり、そうした非線形的な変化である。そうした変容は如何にして生じるのか、どのようなメカニズムが働いているのか。

そうした創造的変容を考えるために、今回の研究では造形作家の「転機」に着目したいと考える。造形活動を生業とし活動を続けてきた作家には、何らかの「転機」があったことと思われる。その転機はどのようであったのか、それはどのようにして乗り越えられたのか。「転機」をキーワードにした語りを求め、その分析から人間における創造的変容の諸相をすこしでもことばにしていきたいと考える。

### 2. 研究方法

現在も制作を行っている美術家・デザイナー（学内教員）に対して協力を仰ぎ、「転機」をキーワードとして今までの制作をふり返ってもらう面接調査を行った。対象は五名とし、各一時間程度の面接を二回行う。二回行うのは、「語ることによる刺激」を想定したからである。調査は録音し、文字データとする。それをもとに質的分析を行い、結果をまとめていくこととする。

### 3. 結果について

現在、語られたものをテキスト化し、分析を行っている。今後、心理臨床家とこの結果について討議を行い、見出したものをさらに洗練させてまとめていく予定である。

まだ研究途中であるので詳細は示し得ないが、現時点で語りうることとしては、一つに連続面接の効果が見られた一群があったことである。面接間隔は概ね2～4週間空けたが、初回面接後、「あれから色々話すことを考えて……」や、「そういえばこん

なこともあるな、と自分で思った」、「後から考えたら、自分にとって大きいのはこれだと思った」などという語りが聞けた人もいた。このことは、心理療法において「語る場」を設定することがもたらす効果に近いものであり、本来の創造的変容のプロセスを明示するというとは少し目的が異なるが、興味深い語りであると思われた。

また、「転機」を語る中で出てきたキーワードから感じられたのは、そこに「偶然性」がどうしても入ってしまうことであった。例えば人との出会い、挫折、制作上の制限（機材・予算・時間等）など、自分の意志では如何ともしがたい要素が（当たり前といえど当たり前であるが）入ってくる。研究目的で挙げた「次元を異にする」とまではいいがたいものではあっても、しかし何かしらそうした偶然性から産み出されるものがあるのだろう、制作とは自分の意志のみで進んでいけるものではないのであろう、謂わば「手を離す」ことで「掴める」、そのような側面が見えてきたのは非常に興味深いことであった。

研究目的では大上段にかまえ「創造的変容」と名前を付けてみたものの、（これも当たり前といえど当たり前であるが）制作し続ける作家にとって制作とは「日常的行為」であり、それはつまりある意味生活の糧としての側面も切り離せないのだなということも思わされた。美術作家といえども日常を生きる一人の人なのである。ただしかし、上記のも挙げたそうした「偶然性」から何かを見出していくというのはきわめて面白いプロセスであると思われた。この点についてさらに分析を行い、結果としてまとめ上げたいと考える。

## 編集後記

ここに成安造形大学紀要第6号を刊行いたします。

今、トマ・ピケティの「21世紀の資本」が大変な注目を集めています。経済学にあまり明るくない編集子は未読であり、また難解な大著ということなのでこの先も読むことはないと思いますが、世間一般に流布している簡単な解説によれば、資本主義経済においては、行政が市場に積極的に干渉しない限り、富裕層とそうでない層の格差は拡大を続けることを、この大著は主張しているということです。あまり楽しくない解釈をすれば、資本主義社会においては努力は報われない、ということなのでしょうか。正当な努力が報われた時代をモダニズムの時代であるとすれば、まさに私たちは、経済的にもポストモダニズムの時代に突入しつつあるのかもしれない。

ポストモダニズムの時代の特徴の一つに、真実の多元主義を挙げることもできるでしょう。何か一つの論法でもって世界を語ることはできない、ということかもしれません。しかし私たちは希望を捨ててはなりません。異なる理論、異なる世界観を結びつけること、これは感性というものを第一の拠り所とする芸術活動にこそ可能なものではないでしょうか。

本学をはじめ、多くの美術系大学の置かれている状況は、決して楽観できるものではありません。しかし感性を第一の武器として世界と対峙する専門家を育成する機関としての私たちの社会的役割は、極めて重要です。私たちはそのような若者を社会に送り出すために、私たち自身の感性を常に磨き続けなければなりません。本紀要は、そのような私たちの努力を世に問うメディアなのです。

(Chepito)

### 成安造形大学紀要 第6号

### Journal of Seian University of Art and Design No. 6

---

発行日：2015年3月27日

Date of Issue: 27 March 2015

発行者：学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属芸術文化研究所  
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1  
電話：077-574-2111（代表）

Publisher：Kyoto Seian Gakuen, Seian University of Art and Design, Center for Arts  
Oginosato-Higashi, 4-3-1, Otsu-City, Shiga-pref.,  
zip 520-0248, Japan  
Tel: +81-77-574-2111

編集：芸術文化研究所  
Editor：Center for Arts

印刷・製本・デザイン：株式会社 北斗プリント社  
Print, Design：Hokuto Print Co., Ltd.

---